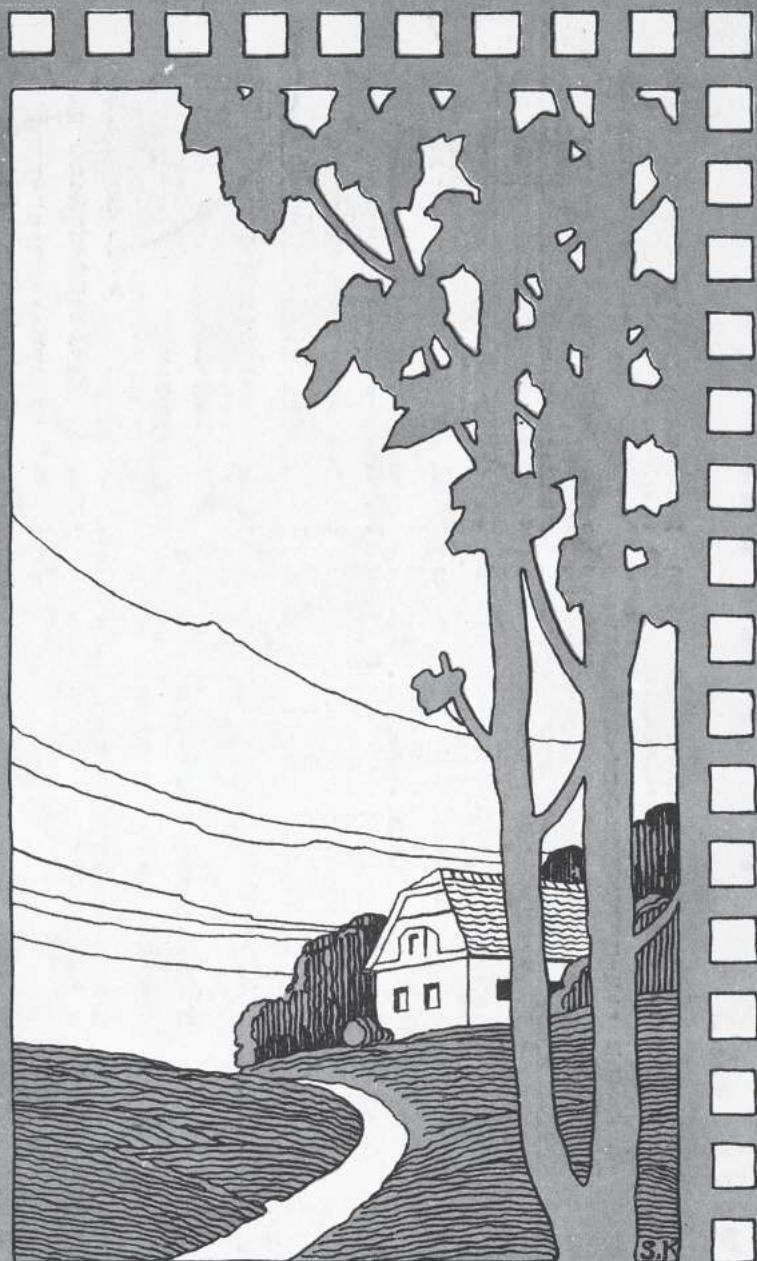


建築と社会

第 第
九 三
号 輯



大正六年九月十四日（第三輯郵便物認可）
大正九年九月一日發行（毎月一回一日發行）

日一月九 年九正大
會協築建本日

歴代の会誌表紙 Vol.3

特集 東海支部特集

2018 03
Vol.99 No.1152

建築と社会

Architecture and Society

日本建築協会

電100

since 1917.03.30

日本建築協会は創立100周年を迎えました

第1回片岡安賞

(日本建築協会論考コンクール)

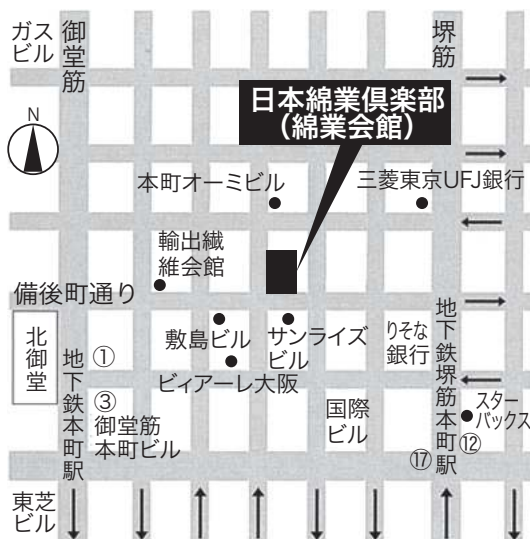
募集テーマ：これからの建築と社会
ーその関係を問う

1次審査通過者による 公開プレゼンテーション

第1回片岡安賞（日本建築協会論考コンクール）は、昨年11月から第1次審査が行われ、右の6編が1次審査通過論考と決まりました。3月10日には最終審査に向けた公開プレゼンテーションが大阪市中央区の綿業会館で行われます。記念すべき第1回片岡安賞受賞を目指すプレゼンターの熱のこもった発表をぜひ会場で聴講下さい。

日 時 2018年3月10日(土)
13:00~15:00 (予定)
※12:30より開場

会 場 綿業会館
新館2階中会場
(大阪市中央区備後町2丁目5番8号)



地下鉄御堂筋線本町駅①または③番出口より徒歩5分
地下鉄堺筋線堺筋本町駅⑦または⑫番出口より徒歩5分

1次審査通過論考6編 (到着順・敬称略)

- ・これからの建築と社会ーその関係を問う
岡本 清文
- ・これからの建築と社会ーその関係を問う
北村 潤
- ・人びとがつくる『場所』という現象をとらえる
林田 大作
- ・AIがもたらす新たな「知」と社会
一居 康夫
- ・建築と社会の幻想曲
伊熊 昌治
- ・スルーアーキテクチャーー建築・社会・
共同体のゆるい関わり合いー
西野 翔

審査委員

舟橋國男 (委員長・大阪大学名誉教授)
岩前 篤 (近畿大学教授)
花田佳明 (神戸芸術工科大学教授)
山浦晋弘 (安井建築設計事務所)
勝山太郎 (本会編集委員長)

■定 員 50名 (申込先着順)

■参加費 無料

■申込み

- ①催し名 公開プレゼンテーション
- ②氏名 (ふりがな)
- ③職場名または学校名
- ④住所
- ⑤連絡先電話番号
- ⑥E-mailアドレス

上記項目を明記しFAXまたはE-mailにて下記までお申し込みください。

■申込先

(一社) 日本建築協会 (担当: 入谷)
TEL: 06-6946-6981 FAX: 06-6946-6984
E-mail: hensyu2@aaaj.or.jp

■締切り 2018年3月8日(木)

約款改正のお知らせ

民間（旧四会）連合工事請負契約約款委員会では、下記の表の約款2種を平成30年2月1日付で改正いたしました。今回の改正は、平成29年7月25日の中央建設業審議会において、民間建設工事標準請負契約約款等につき、「請負代金内訳書への法定福利費の明示」に係る改正がなされたことを受け、先般改正した「民間（旧四会）民間連合協定工事請負契約約款」と同様に、本約款を改正するものです。

また改正は、民法、建設業法等の法令の制定・改廃によるものではありませんので、平成30年2月1日（約款改正日）以降、お手持ちの現行約款をそのまま使用して頂いても差し支えありません。しかしながら、上記の通り改正約款を発行・頒布することから、その日以降に現行約款を使用される場合には、できる限り契約書「その他」欄に以下の特約を記載してご使用下さるようお願い申し上げます。

改正内容（新旧対比表 アンダーライン部分が改正箇所）

約款種別	改正前	改正後	特約（例）
民間（旧四会）連合協定 小規模建築物・設計施工一括用 工事請負契約約款	第6条 工事請負代金内訳書、工程表 受注者は、本契約を締結したのち速やかに工事請負代金内訳書及び工程表を発注者に提出する。	第6条 工事請負代金内訳書、工程表 (1) 受注者は、本契約を締結したのち速やかに工事請負代金内訳書及び工程表を発注者に提出する。 (2) 受注者は、工事請負代金内訳書に、健康保険、厚生年金保険及び雇用保険に係る法定福利費を明示するものとする。	約款第6条（工事請負代金内訳書、工程表）に、以下（2）を加える。 『（2）受注者は、工事請負代金内訳書に、健康保険、厚生年金保険及び雇用保険に係る法定福利費を明示するものとする。』
民間（旧四会）連合協定 マンション修繕工事 請負契約約款	第4条 請負代金内訳書、工程表 受注者は、この契約を締結したのち、発注者の請求があるときは、速やかに請負代金内訳書及び工程表を発注者に提出する。	第4条 請負代金内訳書、工程表 (1) 受注者は、この契約を締結したのち、発注者の請求があるときは、速やかに請負代金内訳書及び工程表を発注者に提出する。 (2) 受注者は、請負代金内訳書に、健康保険、厚生年金保険及び雇用保険に係る法定福利費を明示するものとする。	約款第4条（請負代金内訳書、工程表）に、以下（2）を加える。 『（2）受注者は、請負代金内訳書に、健康保険、厚生年金保険及び雇用保険に係る法定福利費を明示するものとする。』

なお、上記改正の詳細につきましては、民間（旧四会）連合工事請負契約約款委員会HPに掲載。

◆ 第1回 建築セミナー ◆

主催：日本建築協会出版委員会 共催：学芸出版社

日本建築協会は、「建築の本」の著者をお招きし、手軽にご参加いただける連続セミナーを今年から開催します。第1回として日本建築協会企画『図解住まいの寸法』の出版を記念して実施いたします。お気軽にご参加ください。

「暮らし」から考える 住まいの寸法入門講座

講師：堀野和人 氏 一級建築士事務所スマイルズム。



住宅の設計には、そこに住む人の暮らしをふまえた寸法への理解が欠かせません。『図解住まいの寸法』では、玄関、階段、トイレ、洗面室など、住まいの13の空間の持つ機能と要素を整理し、そこで行われる生活行為に支障のない、理に適った寸法をイラストで紹介しました。寸法という数字の持つ意味を知り、設計に活かす方法をお伝えしたいと思います。

〈講師プロフィール〉

堀野 和人（ほりの かずと）

1965年大阪府生まれ。ゼネコン、ハウスメーカー設計室勤務を経て、一級建築士事務所スマイルズム。を設立。一級建築士、一級建築施工管理技士。

このセミナーは、建築 CPD 情報提供制度認定プログラム申請中です。
建築関連 CPD（2単位）

日 時： **2018年5月16日（水）**
18：00～20：00（17：45開場）

場 所： **TOTOテクニカルセンター大阪**

大阪市中央区久太郎町3-6-8 御堂筋ダイワビル2階 地下鉄本町駅から徒歩4分

使用テキスト：『図解住まいの寸法』
堀野和人・黒田史香 著
A5判・200頁・本体2600円＋税

参加費：テキスト購入＋受講4000円、受講のみ1500円

（※日本建築協会会員と学生はテキスト購入＋受講3500円、受講のみ1000円）

定 員：50名

※当日はテキストを税込2808円⇒税込特価2500円で販売します。

【申込み方法】

下記を記載の上、メールもしくはFAXにてお申込ください。

①催し名（第1回建築セミナー） ②氏名（ふりがな） ③所属 ④会員・一般・学生の別 ⑤当日の書籍購入希望の有無 ⑥受講票郵送先住所 ⑦電話番号 ⑧E-mail アドレス ⑨CPDを申請される方は申請先団体名と番号

申込先：（一社）日本建築協会 TEL 06-6946-6981 FAX 06-6946-6984

E-mail: hensyu2@aaj.or.jp（担当：入谷）

「奈良県農業研究開発センター及びなら食と農の魅力創造国際大学校」見学会

【この見学会は、建築CPD情報提供制度認定プログラム申請中です。
(2単位)】

今回は、大規模木造建築の見学・説明のほか農業研究開発センターのご担当者様にお話をうかがいます。農業についても知見を深められるこの機会にぜひご参加ください。

コンセプト

奈良県農業研究開発センターの移転を契機に、研究開発の機能強化と大学校との集約を行い、県農業を支援する拠点施設として再整備。シンボル施設である交流・サロン棟は、敷地内の古墳と呼応する全方向に正面性をもつ楕円曲面の屋根形状、他建物は周辺園場への日影の影響が最も少ない寄棟の屋根形状とし、「歴史的風土にふさわしい周辺の緑地や集落に調和する施設整備」を実現。各棟は、メンテナンスバルコニーや廊下天井インフラなど室機能の変更にフレキシブルに対応できるようにし、大庇による建物周囲の中間領域を設け、半屋外での作業を可能とするなど「研究を効率化する質実剛健な各施設」を実現。内部空間は県農業研究・振興・教育の拠点として、家具、仕上げのみならず大断面集成材による架構や、木格子による透明な展示壁などにも県産木材をふんだんに用いて、「奈良らしく親しみやすい木に包みこまれた空間」を実現。

日 時 2018年 5月16日(水)
14:30~16:30 (予定)
受付 14:00~

見 学 先 奈良県農業研究開発センター及びなら食と農の魅力創造国際大学校

所 在 地 奈良県桜井市池之内130-1

講 師 (株)徳岡設計 ご担当者様
奈良県農業研究開発センター ご担当者様

集 合 現地(参加証に地図記載)

最 寄 駅 近鉄大阪線・JR万葉まほろば線「桜井」駅から
奈良交通バス「安倍小学校」下車 徒歩5分
桜井市コミュニティバス「生田(おいだ)」下車 徒歩15分

定 員 30名(先着順)

参 加 費 会員1,000円/一般1,500円
学生500円

申込方法 ①催し名
②氏名(フリガナ)
③会員・一般・学生の別
④職場名または学校名
⑤住所
⑥当日連絡先電話番号
⑦CPD申請される方は申請先の団体名とID番号

上記を明記しFAXかE-mailにて申込先まで

申込先: 日本建築協会(担当: 内山)
TEL: 06-6946-6981
FAX: 06-6946-6984
E-mail: jigyoka@aaj.or.jp

※現地の駐車場が利用可能ですので、お車で越しの方はお申し込み時にご連絡ください。

【概要】

建 築 主 奈良県
設計・監理 (株)徳岡設計
施 工 中尾・中和特定建設工事
共同企業体

敷 地 面 積 98,362㎡
建 築 面 積 6877.18㎡(合計)
延 床 面 積 7665.36㎡(合計)
構 造 規 模

本 館: RC造一部W造
地上2階
交流・サロン棟: W造 地上2階
現場管理棟: W造 地上1階
教育管理棟: W造 地上1階
農機具庫: S造 地上1階
大資材庫: S造 地上1階
小資材庫: S造 地上1階
竣 工 2015~2017年完成



若き創造者たちへ

「第65回青年技術者顕彰」のご案内

日本建築協会では、昭和29年から「青年技術者」を表彰してきました。これは、35才以下の優秀な設計者、技術者、研究者等を対象とするもので、若手建築技術者のいわば登龍門として定着しています。

今年も、青年技術者選考委員会を設けて、これまでどおり、計画・設計・構造・設備・施工およびその他の分野について青年技術者を表彰します。

選考は有職者による選考委員会が行い、選出された方は、本会総会での表彰、「建築と社会」への掲載等を予定しています。建築界の様々な分野で活躍されている皆様の積極的なご応募をお待ちしています。

応募提出規定

1. 応募できる人は満35歳（平成30年3月30日現在）以下の青年技術者であって、本会個人会員に限る。
2. 原則として、すいせん者を併記する。
すいせん者は被すいせん者（青年技術者）の勤務する組織の上司か上長とする。すいせん者が学校教官である場合はこの限りでない。また本人が組織の代表者である場合は自せんとする。
3. 応募分野は特定しない（建築に関するあらゆる分野を対象とする）。応募者は、たとえば計画、一般設計、住宅・インテリア設計、構造、設備、施工、技術開発、行政、情報、コーディネート等の分野にあって、なしとげたすぐれた実績について、下記の所要資料を1部、本会に期日までに提出する。
4. 提出された資料は「青年技術者選考委員会」において選考する。
5. 「青年技術者選考委員会」において選出された青年技術者は本会総会において表彰し、「第65回青年技術者特集号」（平成30年7月号予定）に掲載する。

6. 提出資料

■応募用紙

本会事務局で発行、またはホームページからダウンロードして下さい。

■略歴

本人の氏名、生年月日、最終学歴、業歴、作品経歴など

■選考資料

A：業績資料（A3版5枚以内／書式は任意）

- ① 設計の場合——鮮明な写真、配置図および主要平面図、概要、設計要旨、その他設計内容を説明するに十分な資料
- ② 計画、構造、設備、施工の場合（それぞれの設計計画なども含む）——上に準じた資料
- ③ 上記以外の分野の場合——それぞれの分野にふさわしい資料

B：青年技術者の思い（A4版2枚以内／書式は任意）

上記業績資料に記載した業績において、本人が特に貢献した部分、または力量が活かされたと思われる部分の詳細な説明をしてください。また、本人の建築、都市、環境などに対する考え方、取り組み姿勢や将来展望等についてまとめてください。文字だけでなく必要に応じて図表、写真等も用いてもかまいません。ただし、応募者本人の執筆に限りです。

この資料は、応募者の考え方を知る上で大変重要と考えていますので、十分配慮をしてください。

7. 提出期限 平成30年3月30日（金）

8. 提出先 （一社）日本建築協会「青年技術者選考委員会」

〒540-6591 大阪市中央区大手前1-7-31
大阪マーチャンダイズ・マートビル7階
電話 06-6946-6981 FAX. 06-6946-6984
E-mail: jigyouka@aaj.or.jp

9. 提出方法 郵送（当日消印有効）または持参

10. 青年技術者選考委員会（予定）

委員長 勝山 太郎／㈱日建設計設計部門理事
グループマネージャー設計部長
委員 岸田 文夫／㈱竹中工務店開発計画本部長（西日本担当）
長尾 健／長尾健建築研究所代表
橋本 修／㈱昭和設計執行役員プロジェクト推進室室長
松原 茂樹／大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻准教授
金尾 伊織／京都工芸繊維大学デザイン・建築学系教授
榊田 洋子／㈱桃李舎代表取締役
井村 隆／清水建設㈱関西支店設備設計部設計長
小倉 良友／㈱日建設計エンジニアリング部門
設備設計グループ理事副代表設備設計部長
山口 善史／㈱大林組大阪本店建築事業部生産技術部長
山辻 直樹／大成建設㈱関西支店建築部購買管理室課長

出版図書一覧

当協会会員の方で、当会でのご購入を希望される方には、特価：本体価格の1割引＋税にて販売しております。
詳しくは（一社）日本建築協会事務局（TEL 06-6946-6981、FAX 06-6946-6984、E-mail soumu@aaj.or.jp）まで。

最新刊 平成30年1月発行

原因調査と対策のポイント 図解 雨漏り事件簿

雨漏りの原因調査と対策にプロ集団「雨漏り110番」が、多数の生の事例をもとに実務に役立つポイントを解説。

著者 玉水新吾・唐鎌謙二
A5判 216ページ
定価 本体2,500円＋税

近刊 平成29年7月発行

暮らしから考える設計のポイント 図解 住まいの寸法

玄関、トイレ、洗面室など住まいの13の空間の機能と要素を整理し、生活に支障のない理にかなった寸法を紹介。

著者 堀野和人・黒田吏香
A5判 200ページ
定価 本体2,600円＋税

近刊 平成29年3月発行

Q&Aでわかる新築・増改築のポイント 図解 一発で通す！確認申請

確認申請をスムーズに通すために、実務で注意すべき間違えやすいポイントが満載。申請業務に必携の一冊。

著者 野口元・平沢隆志・仲本尚志
B5判 192ページ
定価 本体3,200円＋税

近刊 平成28年7月発行

建築現場のコンクリート技術

コンクリートの基本知識、発注の仕方から、品質管理、調査、打込み、劣化・検査と維持補修まで、「そこが知りたい」「今さらきけない」ポイントを解説。

著者 柿崎正義・玉水新吾
四六判 220ページ
定価 本体2,000円＋税

直感で理解する！ 構造設計の基本

山浦晋弘 著
A5判 216ページ 定価 本体2,400円＋税

設計・監理・施工者のための 建築品質トラブル予防のツボ

仲本尚志・馬渡勝昭 著
A5判 248ページ 定価 本体2800円＋税

改訂版 イラストでわかる 消防設備の技術

中井多喜雄 著 石田芳子 イラスト
赤澤正治・岩田雅之・西博康 改訂監修
B5判 216ページ 定価 本体3,000円＋税

写真マンガでわかる 住宅メンテナンスのツボ

玉水新吾・都甲栄充 著
A5判 248ページ 定価 本体2,800円＋税

主婦建築家と考える 住まいづくりのウソ？ホント？

井上まるみ 著
四六判 184ページ 定価 本体1,800円＋税

プロが教える 住宅の植栽

藤山宏 著
B5判 176ページ 定価 2,800円＋税

住宅エクステリアの100ポイント 計画・設計・施工・メンテナンス

藤山宏 著
A5判 232ページ 定価 本体2,500円＋税

第二版 環境と共生する建築 25のキーワード

大西正宜 著
A5判 240ページ 定価 本体2,600円＋税

〈プロのノウハウ〉シリーズ

写真マンガでわかる 工務店のクレーム対応術

玉水新吾・青山秀雄 著
四六判 220ページ 定価 本体2,000円＋税

現場直伝！ 躯体工事の100ポイント

中川徹 著
四六判 220ページ 定価 本体2,200円＋税

写真マンガでわかる 建築現場管理100ポイント

玉水新吾 著
四六判 224ページ 定価 本体1,900円＋税

建築主が納得する住まいづくり Q&Aでわかる技術的ポイント

玉水新吾 著
四六判 224ページ 定価 本体1,900円＋税

第三版 建築基準法を読みこなすコツ

高木任之 著
四六判 280ページ 定価 本体2,600円＋税

建築と社会

Architecture and Society

Journal of the Architectural Association of Japan

日本建築協会

2018 03

Vol.99 No.1152

■特集予告

● 4月号／働き方と価値：社会に繋がる多様なワークスタイル

● 5月号／スポーツイベントを支える設備技術(仮)

今月の表紙

大正9年1月号から「日本建築協会雑誌」は現在と同じ「建築と社会」に改題されました。

誌名は例会での投票で決定されましたが、前年の会報に記載された予告には『一層社会的に本誌の使命、否当協会の使命を果すべく時代の進潮に順応した』とあり、1月号と2月号の1ページ目に改題についての文章が掲載されています。

会誌の内容は、前年に引き続き都市計画や都市の改造、それにまつわる諸問題の論考、住居改善に関する論考などが並びます。また、住宅紹介、古建築や庭園、女性の住居に関する記事などの他に俳句や和歌のコナーができています。

この年、大阪住宅経営株式会社の委嘱による、生活改善を目的とした『改良住宅設計懸賞』が開催され、4月号の当選発表から9月号にかけて、当選7作品の図案が口絵に毎月掲載されています。

特集 東海支部特集

■東海支部会員作品2018

南山大学名古屋キャンパス 新教室棟Q棟・多目的棟リアン	8
藤田保健衛生大学 坂文種報徳會病院	9
あいち航空ミュージアム	10
知多信用金庫 本店営業部・ほしぎきホール	12
知多信用金庫 事務センター	14
知多信用金庫 阿久比支店	15
岡崎信用金庫 名古屋支店	16
岡崎信用金庫 城下町支店	17
東春信用金庫 江南支店	18
日本特殊陶業株式会社 ウェルネスセンター	19
ネットヨタ中部プラザ豊田	20
グローバルゲート	22
KiTARA (豊田市駅前通り北地区第一種市街地再開発事業)	24
ヤマハモーター・イノベーションセンター	26
岐阜トヨタ自動車 本社ビル 金園店ショールーム・サービス工場	28
大日コンサルタント本社屋	30
津市産業・スポーツセンター サオリーナ／三重武道館	31
三重交通G スポーツの杜 伊勢 陸上競技場	32
高浜町立中央体育館	34
三交イン伊勢市駅前	35
TOKAI Sketch Book	36

■特集Ⅰ 建築がつなぐ都市、地域、まちの記憶 第1回「アクテノン」

名古屋市・稲葉地配水塔・演劇練習館「アクテノン」●中井孝幸	40
演劇練習館をはじめとする歴史的資源を活かしたまちづくり●松田和彦	41
稲葉地配水塔不死鳥伝説～2度生まれ変わった配水塔～●小島克生	43
配水塔から図書館へ地域の「記憶」の倉庫●中井孝幸	45
転用プロセスの特徴と建物各部の関連性名古屋演劇練習館「アクテノン」●谷田 真	49
アクテノンの眩き～私はいき続ける～●加藤武範	51

■特集Ⅱ 東海支部青年部会における30代前後の若手設計者の意見交換会「納マリ倶楽部」

●塩田哲也、中井孝幸、久保久志、三宅伸幸、鈴木豊一郎、小杉嘉文、佐藤 剛、石橋洋二郎	52
--	----

■東海の建築：開口

■東海支部だより

清里・茅野見学会旅行記 2017年10月8日(日)～10月9日(月・祝)	
●平松佳奈	60
清里・茅野建築の旅●塩田有紀	61

会告	第1回片岡安賞(日本建築協会論考コンクール) 1次審査通過者による公開プレゼンテーション 約款改正のお知らせ、第1回建築セミナー「暮らし」から考える住まいの寸法入門講座 奈良県農業研究開発センター及びなら食と農の魅力創造国際大学校見学会 若き創造者たちへ「第65回青年技術者顕彰」のご案内	1 2 3
gallery	“わからないこと”にワクワクする空間●塩瀬隆之	6
法令コーナー	新耐震基準の木造住宅の耐震性能検証法(新耐震木造住宅検証法) ●一般財団法人日本建築防災協会 国土交通大臣指定耐震改修支援センター	62
構造の頁	歴史的建築物と一体化した高層建築物 日本橋ダイヤビルディングの設計●浜田勇気	63
建築と社会を考える	建築的思考の射程●竹山 聖	64
Member's Forum	U-35委員会企画 talk baton13 活動報告	68
information	ONTEN～LOVE&ROCK ビートルズ×忌野清志郎～／新収蔵品展／アニメーションにみる日本建築—ジブリの立体建造物展より—／くまのもの 隈研吾とささやく物質、かたる物質／明治150年展 明治の日本画と工芸	70
月間の動き	平成30年1月	72

“わからないこと”に ワクワクする空間

大学教員/
コミュニケーションデザイナー/
システム工学者/エドゥケーター

塩瀬 隆之

塩瀬 隆之（しおせ たかゆき）

1973 大阪生まれ
2012 経済産業省 課長補佐
2014 京都大学 総合博物館准教授

プロジェクト

2014 日本科学未来館
“おや？”っこひろば
<http://www.miraikan.jst.go.jp/activity/kids.html>
2015 ミニフューチャーシティ
<https://vimeo.com/141034483>
2016 NHK Eテレ「カガノミカタ」
<http://www.nhk.or.jp/rika/mikata/>

遠藤幹子（マザー・アーキテクチャ）
中原崇志（DENBAK-FANO DESIGN）

日本科学未来館「“おや？”っこひろば」は、子どもの好奇心を徹底的に信じ抜く学びの空間だ。

手を出さない、口を出さない、しかし目は離さない。そんな親子の微妙な見守りの距離感を、遠藤幹子氏、中原崇志氏と未来館チームが空間に結実させた。

良かれと思って、大人が答えらしき知識を先に教えてしまうと、子どもはそこで探究を止めてしまう。大人が何かを教えるのではなく、子ども自らが“はてな”を見つける瞬間を見逃さないことが大切だ。

「ごろごろのしば」でただボールを転がし、貸出カウンターで手に入れたたくさんの素材をただ切り貼りする。そんな何気ない日常にこそ科学的思考の原体験が潜む。

大きさや重さ、素材の違いがボールの軌道に不思議な変化をつける。ザラザラ、つるつるといった異なる手触りが子どもの創造性を刺激する。まだ言葉にならない違和感や名前も知らない現象、“わからないこと”そのものに心躍る体験こそが子どもたちの学びの力を育む。



遠藤幹子氏の当初アイデアスケッチ



「ごろごろのしば」で様々なボールを転がしてみる



貸出カウンターでたくさんの素材を手に入れる



子どもが走らないようなレーンの仕掛け



楽しむための約束事は否定表現を避ける工夫



“おや？”っこひろば全景（オープン当時）

東海支部会員作品2018

南山大学名古屋キャンパス 新教室棟Q棟・多目的棟リアン

藤田保健衛生大学 坂文種報徳會病院

あいち航空ミュージアム

知多信用金庫 本店営業部・ほしざきホール

知多信用金庫 事務センター

知多信用金庫 阿久比支店

岡崎信用金庫 名古屋支店

岡崎信用金庫 城下町支店

東春信用金庫 江南支店

日本特殊陶業株式会社 ウェルネスセンター

ネッツトヨタ中部プラザ豊田

グローバルゲート

KITARA（豊田市駅前通り北地区第一種市街地再開発事業）

ヤマハモーター・イノベーションセンター

岐阜トヨタ自動車 本社ビル 金園店ショールーム・サービス工場

大日コンサルタント本社屋

津市産業・スポーツセンター サオリーナ／三重武道館

三重交通G スポーツの杜 伊勢 陸上競技場

高浜町立中央体育館

三交イン伊勢市駅前

『建築と社会』東海支部特集特別編集委員会

委員長：篠原佳則

特集記事担当委員：中井孝幸、加藤武範、塩田哲也

作品作風担当委員：土井敬三、今井 亨

支部だより担当委員：松元親司、今津芳清

委員（順不同）：河田克博、福田泰造、佐伯 博、冨田昌志、本梅 誠、宮丸孝史、井平 敬

吉田祥子、西澤太良、芳山明久、野呂和弘、澤田康司、片山友美

南山大学名古屋キャンパス 新教室棟Q棟・ 多目的棟リアン

建築主 学校法人 南山学園
設計 日本設計・大林組
監理 南山大学設計共同企業体
施工 日本設計
大林組名古屋支店

所在地 名古屋市昭和区山里町18
敷地面積 118,001.11㎡
建築面積 新教室棟Q棟：2,187.11㎡ 多目的棟リアン：1,077.71㎡
延べ面積 新教室棟Q棟：13,602.72㎡ 多目的棟リアン：1,720.28㎡
構造規模 新教室棟Q棟：RC造 地下1階 地上7階
多目的棟リアン：RC造一部S造 地上2階
工期 新教室棟Q棟：2015年6月～2017年2月
多目的棟リアン：2015年6月～2016年7月
最寄駅 名古屋市営地下鉄名城線 名古屋大学駅
撮影 近代建築社（トロロスタジオ 谷川ヒロシ）



新教室棟Q棟 外観

2017年、南山大学は全学部全学科を名古屋キャンパスに統合した。1964年にアントニン・レーモンドの手により整備されたキャンパスのマスタープランとデザインを継承・強化しながら、教育対象の拡大、学問領域の拡大という将来形を、最新の教育環境をもつ<新教室棟Q棟>と豊かな交流空間をもつ<多目的棟リアン>として結実させた。

<新教室棟Q棟>

キャンパスのメインストリートの高低差を利用した1・2階の2フロアアクセスと中庭により、賑わいを中庭に誘引し多様な交流シーンを創出した。

中庭を挟んで、北側に教室群、南側に研究室群を配置し、研究と学習が一体になったフロアを積層させた。また、教室群の廊下を外周に配し、メインストリートへ学生のアクティビティを表出させた。

中庭や周辺の緑と連続感を持たせたラーニングコモンズは、多様な学習ユニットを設け、学生の活動の主体性・発信力を高められる空間とした。

ファサードには、方位に対応して垂直・水平に編まれたルーバーによるブリーズレイユを配し、Low-Eペアガラスと併せて、建物外皮の熱負荷を低減している。

中庭を利用し、全ての居室に自然採光を確保すると共に、全ての居室に自然換気窓を設置し、廊下～建物外周～中庭に通じる自然通風を確保するなど、自然エネルギーを積極的に活用できる建築とした。

<多目的棟リアン>

敷地の高低差を活かした多様な動線計画と活動スペースを組み合わせ、立体的な交流空間とした。

ホールは、サッシ方立を構造利用した大開口・樹形の柱・直接/間接照明と自然光を織り交ぜた天井デザインによって、周辺の豊かな自然と一体感のある空間としている。

センサー開閉式ハイサイドライトによる自然換気、冬の天井裏暖気を空調に還元利用して負荷を低減させる環境装置を組み込み、レーモンドのコンセプトであった「自然を基本として」を現代の環境技術で継承した。

新教室棟Q棟と多目的棟リアンは、レーモンドが描いたマスタープランを強化・充実させ、キャンパス全体の活性化を促す重要な施設となった。現在、継続してキャンパス全体の歴史的建築物のリニューアルが実施されている。歴史と未来が行き交う魅力的なキャンパスに進化する姿が目される。

(廣瀬浩二、武田新平/日本設計) (一瀬直樹/大林組)



多目的棟リアン 外観北東面



多目的棟リアン ホール

藤田保健衛生大学 坂文種報徳會病院

建 築 主 学校法人 藤田学園
設計・監理 大林組名古屋支店 一級建築士事務所
施 工 大林組名古屋支店



外観

藤田保健衛生大学坂文種報徳會病院は、名古屋駅からも近い都市型病院である。既存病院施設は、昭和5年に前身である「坂種病院」が開院して以来増築改修を繰り返し、施設の複雑化・老朽化が進んでいた。今回、藤田学園創立50周年を期に、大学病院・教育病院としての機能拡充するため、既存棟の一部を撤去し161床の新棟を建設した。新棟では、病室の拡充はもとより、リハビリテーション施設の設置、ICU・検査部門の強化、エントランスやコンビニ・カフェ等の利便施設の充実を行った。一方、既存病院施設を稼働させながらの建設であり、施工インパクトを最小化することが必要であった。そこで、既存施設の改修活用によるスタッフエリア充実等、医療継続に配慮したトータルな環境整備を目指した。古くから続く商店街と住居が混在隣接する生活色の濃い周辺地域特性にあって、この病院は、地域に馴染む親しみやすいオーソドックスなデザインとした。病院の顔が新しくなっても「ばんだねさん」と呼ばれ続け、地域の人々から信頼される病院として、先進医療を提供している。

(一瀬直樹／大林組)

所在地 名古屋市中川区尾頭橋3丁目6番10号
敷地面積 5,918.31㎡
建築面積 1,360.53㎡
延べ面積 7,633.87㎡
構造規模 S造 地上9階 塔屋1階
工期 2015年4月～2016年6月（新棟竣工）
～2017年6月（既存改修完了）
最寄駅 JR東海道線 尾頭橋駅
撮影 エスエス名古屋支店



デイルーム



特室



待合ホール

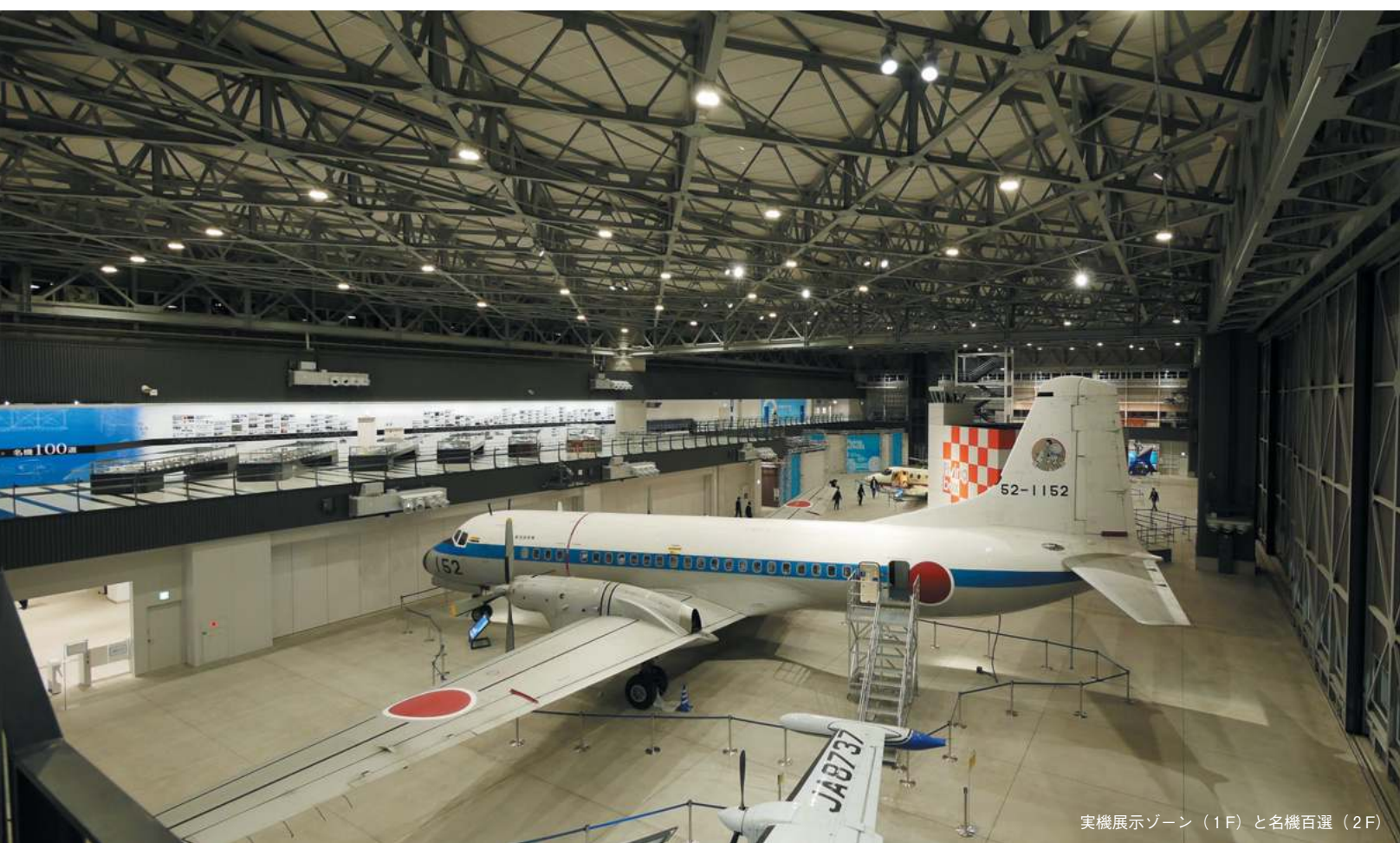


エントランスロビー



所在地 愛知県西春日井郡豊山町
 敷地面積 1,715,975.11㎡
 建築面積 5,708.49㎡
 延床面積 7,899.74㎡
 構造規模 S造 地上2階、塔屋1階
 工期 2016年10月～2017年9月
 最寄駅 名古屋駅からバス「あいち航空ミュージアム」
 撮影 エスエス名古屋支店

メインアプローチ側ファサード



実機展示ゾーン（1F）と名機百選（2F）

あいち航空ミュージアム

建 築 主 愛知県

設計・監理 安井建築設計事務所

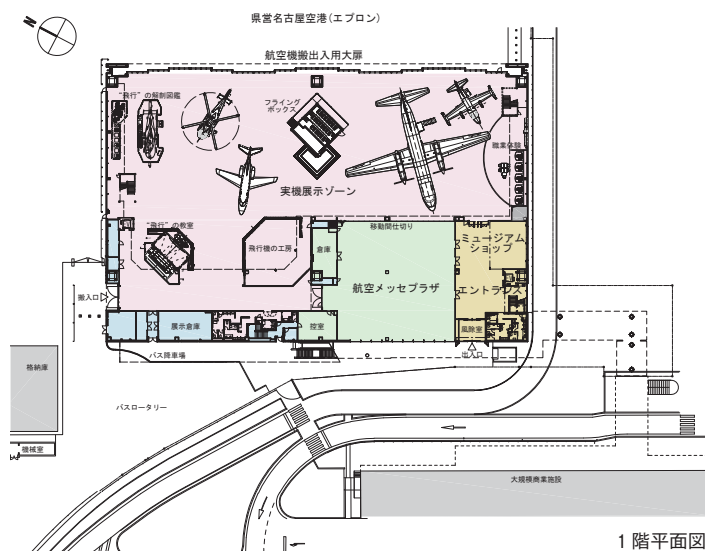
施 工 清水・名工特定建設工事共同企業体 他

県営名古屋空港周辺は、国産初のジェット旅客機であるMRJが生産されることもあり、航空機の開発・生産の場としてのみでなく、航空機産業の情報発信・人材育成・産業観光の場としての役割が期待されている。「あいち航空ミュージアム」はその中核施設として、周辺各施設との連携を行い、地域活性化を図ることを意図して建設された。

建設地は名古屋空港の南端に位置しており、その南側にはかつて国際線のターミナルであった大規模商業施設が隣接している。そこに残されていたボーディングブリッジを利用し、2階で本館と接続している。建物西側をメインアプローチとし、東側には空港エプロンに直接面して格納庫用の大扉を設け、展示物となる航空機の出し入れを容易に行える計画としている。1階が展示のメインフロアとなり、実機展示や各種コンテンツ、体験コーナーなどが展開されている。また、独立して使用できる航空メッセプラザがあり、様々なイベントを開催することができる。2階をメインエントランスとし、ツアー受付窓口やオリエンテーションルームを設け、MRJミュージアム等の他施設との連携を図りやすい計画とした。

屋上には航空機の離着陸を間近に見られる展望デッキを設けた。

(清水 満、西野培夫／安井建築設計事務所)



1 階平面図



夜景



来館者を2階へ導く大庇



屋上展望デッキ



エプロン側ファサード



知多信用金庫 本店営業部・ほしざきホール

建 築 主 知多信用金庫
設計・監理 日建・伊藤 設計監理共同企業体
施 工 七番・沢田特定建設工事共同企業体

知多信用金庫は創立90周年記念事業として、老朽化・過密化していた本部ビルを隣接する3つの敷地にそれぞれ本部機能、事務センター機能、本店営業部機能を持つ3棟に分けて建替える計画を進めてきた。これら3棟は三身一体の施設として建物のボリュームや、共通のモチーフである縦基調のデザインや使用する石材やタイルの色調を考慮した。第1段として完成したこの建物は本店営業部としての重厚感や安定感と、地域に開かれた多目的ホールとしての開放感や親しみやすさの両立を目指した。

花崗石（浪花白）張りのリズムカルな縦格子で覆われたガラスの外装は周辺への圧迫感を低減し、内外のつながりを意識したものとなっている。この縦格子はガラスを支える外方立として機能し、内部からはすっきりとした軽やかな印象となるよう配慮した。

敷地東側の国道に面した本店営業部は高い天井や落ち着いた色調の家具類でまとめられ、本店としての格調と開放感のある空間となっている。また300人が収容できる3階の多目的ホール「ほしざきホール」は、明るい色調で木を基調に温かみのあるホール空間や、内壁に地元知多半島で製作されたタイルを使用した落ち着いたホワイエ空間を提供している。

工事は建築主の意向により地元へ本拠地を置く施工会社が行った。地場の素材を使い、地域の力をあわせてこの建物は完成した。この地域に親しまれ、共に歩いていく建物となっていくことを期待している。

（富田昌志、松本拓也／伊藤建築設計事務所）



エントランス



外観東面



3階 ほしざきホール



3階 ホワイエ



1階 営業部ロビー



左：旧本部ビル（旧本店営業部）／右：新本店営業部・ほしざきホール

所在地 愛知県半田市星崎町3丁目
敷地面積 1,243.34㎡
建築面積 991.70㎡
延床面積 2,514.95㎡
構造規模 S造 地上3階＋塔屋
工期 2016年8月～2017年10月
最寄駅 名鉄河和線 知多半田駅
撮影 エスエス名古屋支店

知多信用金庫 事務センター

建 築 主 知多信用金庫
設計・監理 日建・伊藤 設計監理共同企業体
施 工 大林組

名鉄知多半田駅至近に建つ知多信用金庫本部ビル建替計画のうち、第Ⅱ期にあたる事務センターの計画である。

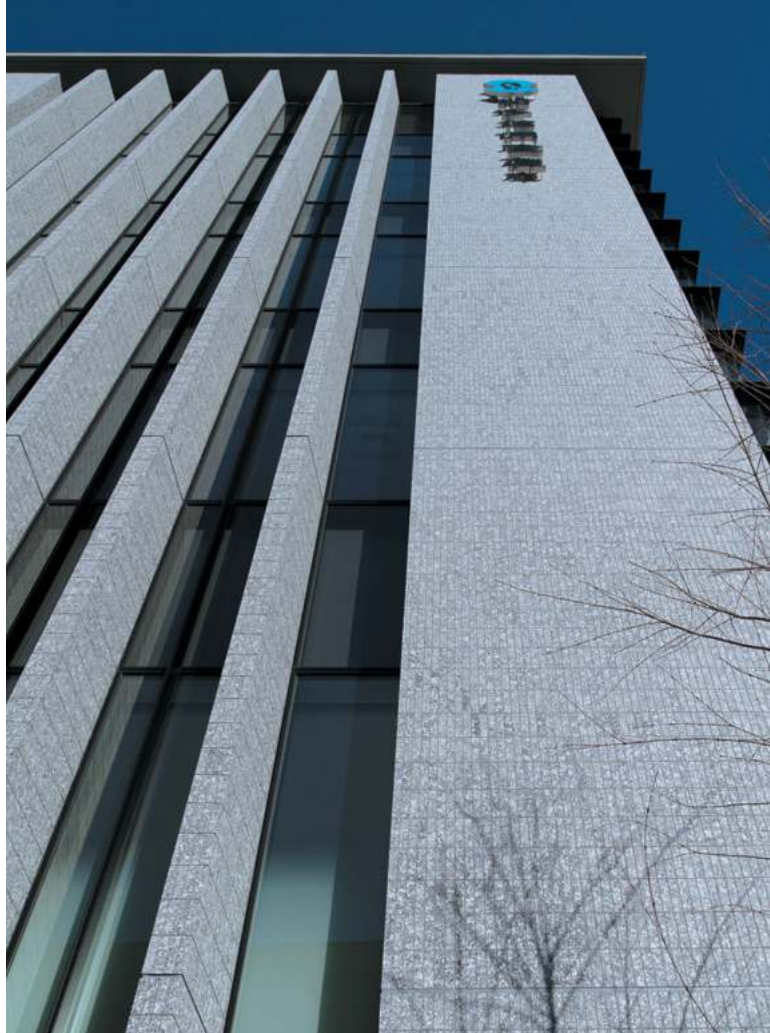
再編にあたり、現本部ビル跡地を含む隣接3敷地に本部・事務センター・本店営業部と金融機関における中枢業務を3建物に分離することで、性質の異なる各業務に最適な機能性・防犯性・意匠性を明快に打ち出す計画とした。

初期より三位一体の見せ方を意識したプロポーション検討を行い、大きさの異なる3つのヴォリュームに縦基調の外装のリズムと石・タイルという素材の統一感を施し、街の目抜き通りである国道沿いに金融機関に相応しく「新しいちたしん」を一群で表現しようと意図している。

地域経済の核となる金融機関として「安全・安心」は事業全体のテーマであるが、特に事務センターでは、RC造＋基礎免震構造による堅牢な構造計画及び100%デマンドバックアップと更新性に配慮した設備計画により、高度なBCP性能とロングライフ建築を実現した。

2017年9月完成済の本店営業部・2020年1月完成予定の本部と合わせて、創立90周年を迎えた知多信用金庫のキャッチフレーズ「いつまでも夢と希望のお手伝い」を次の100年につなげる新たな拠点創りを目指している。

(小谷陽次郎、森岡俊介/日建設計)



所在地 愛知県半田市
敷地面積 971.13㎡
建築面積 589.31㎡
延床面積 2,876.40㎡
構造規模 RC造 地上6階
工 期 2016年10月～2017年12月
最 寄 駅 名鉄河和線 知多半田駅
撮 影 車田 保 (車田写真事務所)



知多信用金庫阿久比支店

建 築 主 知多信用金庫
設計・監理 伊藤建築設計事務所
施 工 七番組

阿久比支店は名古屋鉄道河和線阿久比駅から100mほど南の敷地にて1983年から営業をしてきたが、さらなるサービス向上と地域貢献を目的に移転新築を行った。

敷地は、主要幹線道路と阿久比駅前ロータリーの交差点に面した場所であり、普段から多くの地元住民の方が往来している場所である。また、すぐそばにある阿久比町役場や阿久比中学校・高校と駅前広場をつなぐ場所でもあることから、交差点に位置する街の「顔」としての機能を意識して計画した。

外観は青と白、ガラスとタイルの対比によりメリハリのあるものとし、駅前から主要幹線に流れるように続く白い庇が伸びやかな印象を与えている。またロビーに面した日差し対策の大型日除けルーバーと駐輪場の目隠しルーバーは木調色として外観のアクセントとなっている。

内部は玄関からATMコーナー・ロビー・営業室へと前面道路沿いを流れるように空間をつなぎ、高い天井とガラスによる開放的な空間となっている。この空間は夕暮れには「行燈」のように通りにあかりを作り出し、道行く人の安心や安全に寄与するとともに駅前空間の目印としても機能している。また通りに面した外壁はセットバックをして歩道にゆとりを生みだし、地域の方の往来がより円滑になるよう配慮した。

周辺地域に新たなリズムが生まれ、この建物が根づいていくことを期待する。

(富田昌志、石橋洋二郎／伊藤建築設計事務所)

所 在 地 愛知県知多郡阿久比町大字阿久比字駅前1丁目7番地

敷地面積 1,159.80㎡

建築面積 537.70㎡

延床面積 671.56㎡

構造規模 S造 地上2階＋塔屋

工 期 2017年2月～2017年10月

最 寄 駅 名古屋鉄道 河和線 阿久比駅

撮 影 アーキフォト加藤、リフレクト



駅側からのエントランス



夕景



天井の高いロビー空間と下がり壁の間接照明



岡崎信用金庫 名古屋支店

建 築 主 岡崎信用金庫
設計・監理 日建設計
施 工 小原建設

名古屋市内の歌舞伎演芸場を中心とした観劇街に構える岡崎信用金庫の名古屋の拠点ビルで、支店機能を併せ持つ。震災時にも継続運用できるように免振構造を採用している。

外観は、伝統和柄の「麻の葉模様」をモチーフとしたアルミキャストスクリーンで建物全体をつつみ込み、伝統ある街並みに調和した清々しいデザインとしている。夜間は「麻の葉模様」の中心一つ一つに埋め込まれたフルカラーLED照明が、日没時間に合わせて自動点灯し、夜22時に自動消灯するまで、「四季」や「時」の移ろいとともにより様々な光演出を行い、街に彩を与える。

内部は、限られた敷地のなかで拡がりのある店舗空間を実現するため、全館避難安全検証により縦穴区画を回避した3層分の吹抜けを確保した。また、前面道路に正対する室内の壁面を黒色カラーガラスとし、周辺の景色を写し込むことで奥行き感を演出している。1階の交差点に面した出隅部分には、外部からも鑑賞できる「からくり人形」の展示スペースを設け、伝統ある街並みに寄与している。

(塩田哲也、片桐雄歩、田丸正和／日建設計)



アルミキャストスクリーンの光演出

所 在 地 愛知県名古屋市中区栄1丁目11番22号
敷地面積 892.66㎡
建築面積 589.98㎡
延床面積 3,789.88㎡
構造規模 S造一部SRC造 地上7階、地下1階
工 期 2016年4月～2017年8月
最 寄 駅 名古屋市営地下鉄東山線・鶴舞線 伏見駅
撮 影 鈴木文人写真事務所



1階ロビーから吹抜け空間を見る



岡崎信用金庫 城下町支店

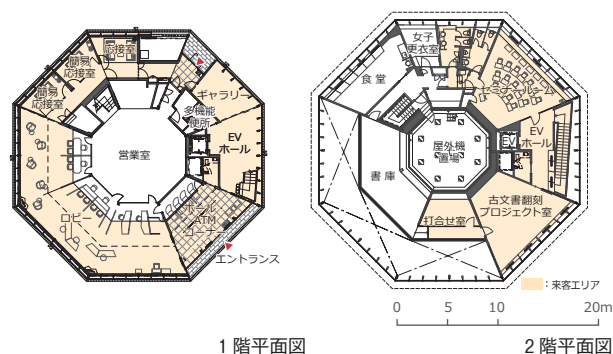
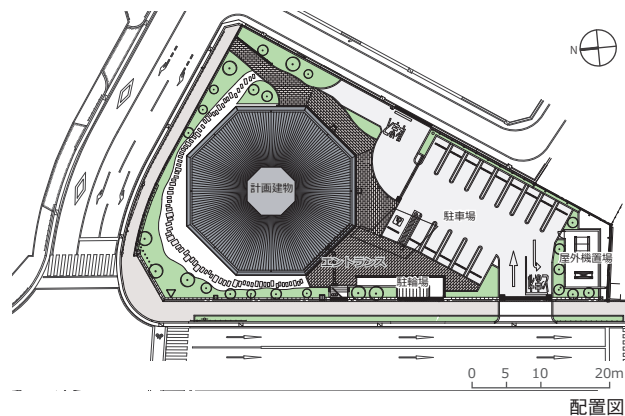
建 築 主 岡崎信用金庫
設計・監理 日建設計
施 工 小原建設

岡崎市中心部における金融機関の店舗である。「四方八方への情報の発信と集積」、「街をやさしく灯す行燈」をコンセプトに計画された。周囲に向けて裏をつくらない全方位ガラス張りの正八角形の平面計画とし、中央にバックゾーン、それを囲うよう外周部に来客ゾーンを設け、来客者が建物を一周回遊できるプランとした。敷地境界にフェンスを設けず、建物周囲も回遊できる庭をつくり緩やかに街に開き、建物周辺から内部を見通せ、衆人環視によるセキュリティを可能とすることで、シャッターを排除し、街の賑わいづくりを試みた。また地元の作家や市民の作品を展示するギャラリー、2階にはセミナールーム、岡崎の古文書を調査する研究室を設けることで公共貢献を行う金融店舗の実現を試みた。

内装の木材は三河産のヒノキ、スギとし、地域の企業の参入の間口を広げるために集成材を避け、無垢の製材で計画した。強度や寸法安定性の低さを許容するディテールとすることで、造作材のみではなく、外周のカーテンウォール、日除けのルーバーにも活用範囲を広げた。

ルーバーの形状は、建物全体でバランスの取れた日照量とするため、BIMモデルを作成し、年間を通じた日射のシミュレーションを行った結果、真南から真北にかけて徐々に角度と奥行きの変化する特徴的な外観となった。

(塩田哲也、奥瀬陽子／日建設計)



1 階平面図

2 階平面図

所 在 地 愛知県岡崎市上六名二丁目8-8
敷地面積 1,758.46㎡
建築面積 656.45㎡
延床面積 864.56㎡
構造規模 S造 地上2階
工 期 2016年3月～2016年11月
最 寄 駅 名鉄名古屋本線 東岡崎駅
撮 影 鈴木文人写真事務所



建物と周囲の街をつなぐ庭



木ルーバーからやわらかな日がさす開放的なロビー



正面外観

東春信用金庫江南支店

建 築 主 東春信用金庫
設計・監理 伊藤建築設計事務所
施 工 波多野工務店



様々なかたちでお客様へ情報発信が行えるようにしたロビー

本建物は現支店の老朽化に伴う、建替えである。必要最小限の機能を有する小規模な店舗として、今後、建設されるであろう新店舗のモデルとなる1号店である。受付カウンターにはテラー席2席と融資相談窓口1席を配置したコンパクトな店舗とした。

とかく雑然となりがちな営業室については受付カウンターの背面にパーティションを設置することでお客様から直接見えないよう配慮し、すっきりとした店内とした。

ロビーの壁面には金利情報の案内やテレビ放映を行い、窓面にはポスターが多く掛けられるようにした。また受付カウンターの側面の壁を利用して季節や地域の情報などを映す短焦点のプロジェクターを設置し、様々な方法でお客様への情報発信が行える場とした。

(大河内直哉／伊藤建築設計事務所)

所 在 地 愛知県江南市古知野町千丸218番地
敷地面積 733.24㎡
建築面積 215.96㎡
延床面積 319.94㎡
構造規模 S造、地上2階
工 期 2017年2月～2017年8月
最 寄 駅 名鉄犬山線 江南駅
撮 影 リフレクト



南側外観

日本特殊陶業株式会社 ウェルネスセンター

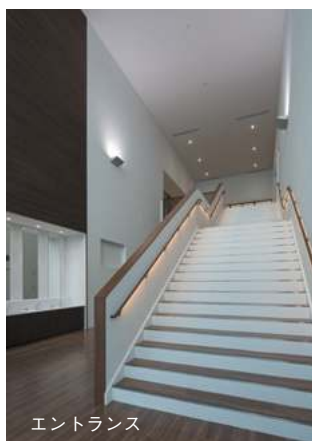
建 築 主 日本特殊陶業株式会社
設計・監理 大林組名古屋支店一級建築士事務所
施 工 大林組名古屋支店

所 在 地 愛知県小牧市大字岩崎原一丁目243番地
敷地面積 41,599.89㎡
建築面積 1,329.20㎡
延床面積 2,400.14㎡
構造規模 S造、地上2階
工 期 2016年6月～2017年1月
最 寄 駅 名古屋鉄道小牧線 小牧駅
撮 影 エスエス名古屋支店

本建物は、自動車関連部品で高い世界シェアをもつ日本特殊陶業の、広大な製造工場敷地内にある厚生施設である。工場で働く社員に対して癒しと憩いを与える場をつくるという事業主からの要望を受け、設計にあたっては、社員同士のコミュニケーションをより活発にする「つなぐ広場の創造」をコンセプトとしている。建物は、1階に食堂機能、2階に厚生施設機能を配置し、外装は工場内の景観との調和とLCCへの配慮から、金属サンドイッチパネルを採用した。

食堂は、配膳から下膳まで動線交錯のないスムーズな流れをつくるため、1WAY動線とした。また、15mのロングスパンを採用し、開放的かつフレキシブルな家具レイアウトを可能にする無柱空間を実現している。食堂の開口部はフルハイトサッシとし、直射光を遮る軒天を設けることで、柔らかく降りそそぐ太陽光と季節の変化を感じさせる彩り豊かな前庭の景観を楽しむ空間を創出した。更に天井を食堂内部と前庭をつなぐように流れる曲線状の間接照明とすることで、魅力的で落ち着いた食事空間を演出している。1階エントランスには、吹抜空間と幅3mの大階段を設け1階と2階を積極的につなぎ、北面のカーテンウォールより室内に取り入れられる控えめな天空光が、魅力的なエントランス空間を演出している。2階には、食後の休憩や社員の部活動やワークショップなどの様々な活動に利用できる明るいコミュニティプラザを設けている。コミュニティプラザに寄り添うようにスポーツルームや和室も配置し、社員の多彩な活動に対応できる癒しと憩いの厚生施設を実現した。

(鶴海秀一郎／大林組)



エントランス



北側外観



食堂

ネッツトヨタ中部プラザ豊田

建築主 ネットトヨタ中部株式会社
設計・監理 伊藤建築設計事務所
施工 伊藤工務店
施工協力 アクト、安成工業、井上硝子店、太田商事、加藤建装
小池商事、ティーズ、常盤建工、丸正、ヤマネ
イイダック、カイナン、小松ウォール工業、近藤鉄筋
双栄建装、永田電機商会、阪和興業
前田道路、マナック、マルエム商会、森定興商

所在地 愛知県豊田市細谷町七丁目18番地
敷地面積 7,249.02㎡
建築面積 3,314.00㎡
延床面積 5,003.65㎡
構造規模 S造 地上2階
工期 2017年2月～2018年2月
最寄駅 名古屋鉄道三河線 土橋駅
撮影 スタジオセゾン

豊田市内の国道沿いに位置するトヨタカーディーラー店舗の建替えである。
2層吹抜けの開放的なショールームには、大型キッズスペースやラウンジ、女性にやさしいパウダールームを設け、多様な年代のお客様が快適に過ごせる店舗とした。ラウンジは建具を全開することで屋外展示場と一体的に使用でき、様々なイベントに活用できる。

2階にはモータースポーツファンをターゲットとした「GRガレージ ミッドレス豊田」のショールーム、カスタマイズ工場を配置した。中央のオープン階段でつなぐことで、気軽にモータースポーツの魅力を実感できる空間とした。

1階ショールームは天井高約9.5mの開放的な空間であるが、空調設備に天井埋込型サーキュレーターと床埋込型ヒーターを併用することで、効率よく快適な温度環境を実現している。またサービス工場にもエア搬送ファンを併用した空調設備を設け、お客様だけでなく全てのスタッフが快適に過ごすことのできる店舗とした。

ガラスと曲線を描いた大屋根で構成した外観は、明るく開放的なショールームにスピード感を与え、「クルマのまち」豊田市の新たなランドマークとなっている。

(上西真哉、神保朋之／伊藤建築設計事務所)



1階ショールーム



1階商談ブース



2 階GRガレージショールーム



2 階GRガレージサービス工場

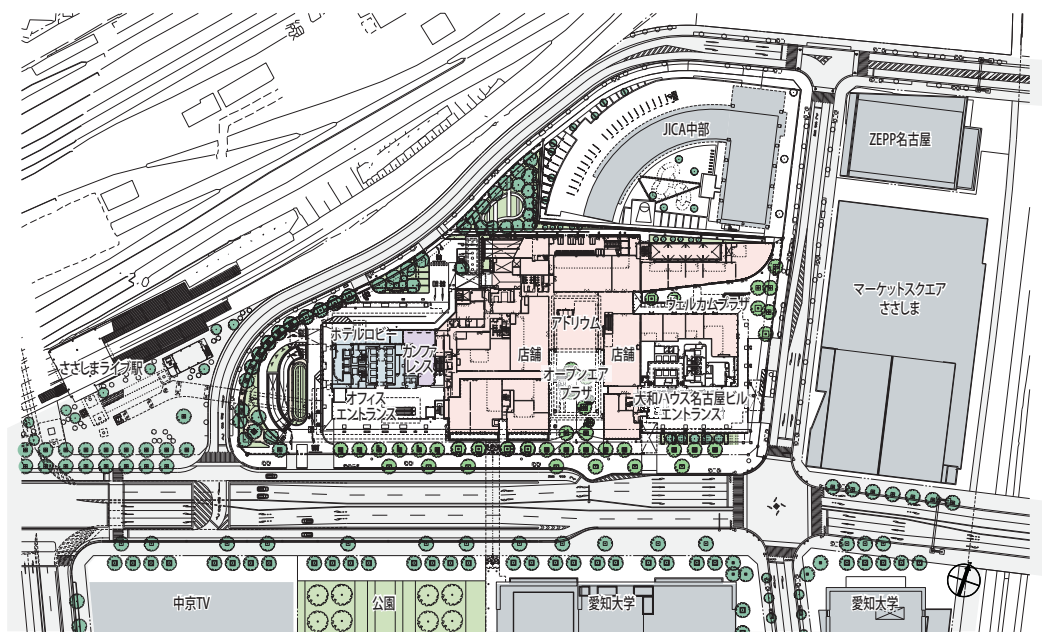
グローバルゲート

建 築 主 ささしまライブ24特定目的会社
設計・監理 竹中工務店
施 工 竹中工務店

名古屋駅南西約800mに位置し鉄道と高速道路によって切り取られた街区である。1986年までは貨物駅として名古屋港から中川運河を通り資材を運ぶ陸の玄関口であったが長らくそのままとっており、2007年により国際交流と環境配慮を掲げた「ささしまライブ24地区」として事業コンペが行われた。当施設は中核として国際会議場やホテルを求められた。地区に大学や放送局、商業施設が徐々にでき、グローバルゲートの完成によりコンペから10年後の2017年10月に街開きが行われた。中川運河も市の再生計画に基づき船着き場のある親水公園の整備がなされ水上交通も復活した。

グローバルゲートはデュアルタワー構成としタワー間には緑あふれる商業施設を配置して運河再生に呼応する象徴的なゲートとした。タワー外装はPCピラスターによる縦格子が特徴で、夜間は頂部照明により上空に光跡を引くことで運河を含めた周辺から灯台のように見せている。商業施設へは「オープンエアプラザ」及び「ウェルカムプラザ」という入江状に貫入させた外部空間からアプローチする。外周には歩道と合わせたケヤキ並木を整備しており、更に内部までケヤキを引き込むことで路面店の雰囲気を創り込んだ。屋上には「第2の大地」として回遊式の庭園を設けいつのまにか屋上に出る散歩体験を狙いとした。タワー棟頂部に入るホテルには「空の浮きふね」というコンセプトで旅を演出するインテリアは時間によって空間の色と光の強さを変えることで6層吹抜のロビー空間は外部と同期している。

(長谷川寛、鈴木貴紀、本多英行、上河内浩、神谷典子、柳澤隆、夏目将平／竹中工務店)



所在地 愛知県名古屋市中村区平池町
敷地面積 17,267.00㎡
建築面積 11,316.69㎡
延床面積 157,543.96㎡

構造規模 S・RC・SRC造 地下2階・地上37階・塔屋2階
工期 2014年10月～2017年3月
最寄駅 名古屋臨海高速鉄道あおなみ線 ささしまライブ駅
撮影 株式会社エスエス 新名 清



屋上庭園からオープンエアプラザを見下ろす。商業の賑わいが屋上庭園まで立体的に連続する

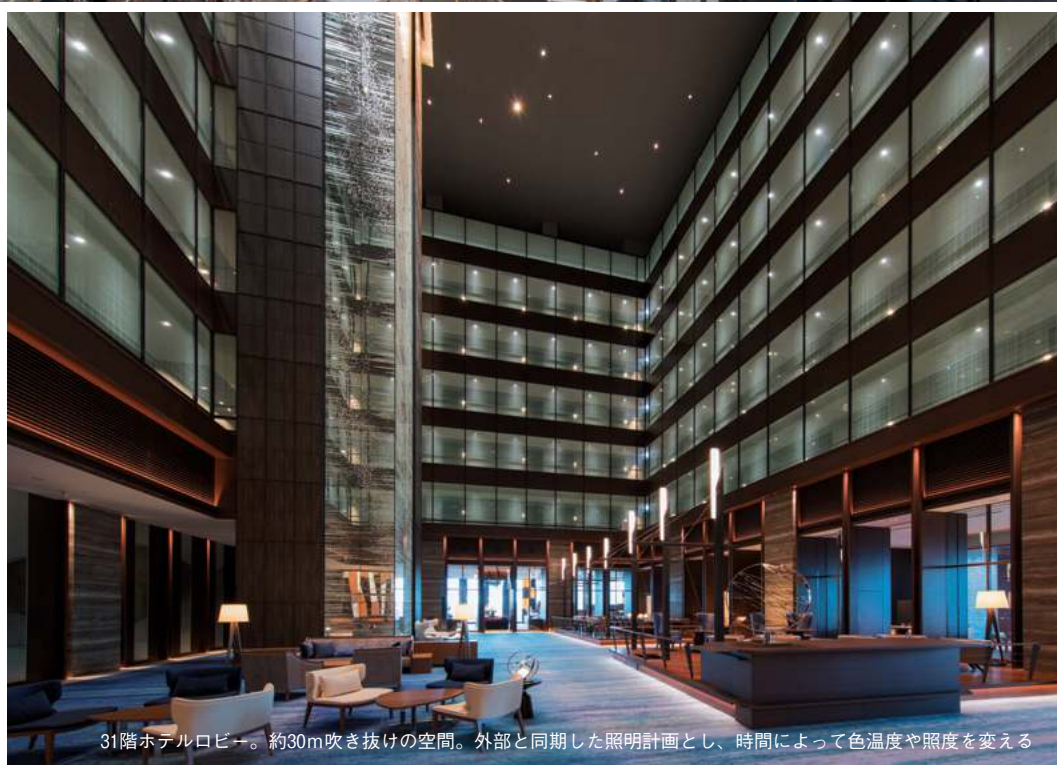




南西側より見る。左手前にささしまライブ駅、奥に名古屋駅前のビル群を望む。駅とはデッキで直結し、当施設を介して愛知大学までを2階レベルで接続した。将来的には名古屋駅と接続する都市計画道路が整備される



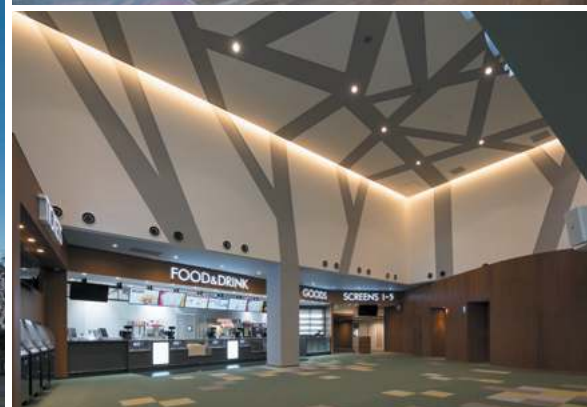
オープンエアプラザ。街路樹を引き込んだ路面店舗による構成



31階ホテルロビー。約30m吹き抜けの空間。外部と同期した照明計画とし、時間によって色温度や照度を変える



左から商業棟、高齢者棟、住宅棟



上／屋外通路 下／森の映画館をイメージしたシネコンロビー



市民が熱望した映画館の入る商業棟エントランス

KiTARA (豊田市駅前通り北地区第一種市街地再開発事業)

建築主 豊田市駅前通り北地区市街地再開発組合
 設計 日建設計、大成建設一級建築士事務所
 監理 日建設計、大成建設工事監理一級建築士事務所
 施工 大成・神谷組建設共同企業体

豊田市駅から東へ延びる駅前通り北地区の第一種市街地再開発事業である。

東西170mの敷地に、大きな壁を作らずボリュームを抑えるため、建物を大きく3棟に分け、低層部を繋ぐことで一体感を持たせた。渡り廊下で繋ぐことにより、棟間に南北の通り抜けをつくり、そこに広場を設け、賑わいの要とした。低層部の店舗配置も画一的とせず、ずらし、非対称等の手法により、そぞろ歩きが楽しめる配置とした。

また、敷地内にあった由緒ある喜多神社と山車蔵を広場に再配置し、記憶の継承と再生を図った。それぞれの棟には、9スクリーンのシネマコンプレックス、老人ホーム、約160戸の集合住宅等が入居し、銀行、飲食店、物販店等、約20区画の商業店舗が低層部に並び、約300台の地下駐車場が入る。

太陽光発電、下水熱利用、屋上緑化、再生材利用、地上緑化率10%等の環境配慮を行い、また、エネルギー管理システムを導入し、省エネルギーも図っている。

(葛原定次、奥宮由美、石森秀一／日建設計)

所在地 豊田市喜多町二丁目170番地
 敷地面積 8,101.02㎡
 建築面積 5,848.91㎡
 延床面積 42,470.40㎡

構造規模 RC造、S造 地上26階、地下2階
 工期 2015年3月～2017年11月
 最寄駅 名鉄豊田線 豊田市駅
 撮影 エスエス名古屋支店



新しいまちのランドマークとなる住宅棟





直方体の建物から飛び出すように設けられた階段室
内部の光環境を一定に保つため、開口部は限定的に設けている

ヤマハモーター・イノベーションセンター

建 築 主 ヤマハ発動機株式会社
設計・監理 日建設計
施 工 安藤ハザマ

所 在 地 静岡県磐田市新貝2500
敷地面積 163,581.13㎡
建築面積 1,946.65㎡
延床面積 8,634.00㎡
構造規模 S造 地上5階
工 期 2016年1月～2016年12月
最 寄 駅 JR東海道本線 磐田駅
撮 影 車田 保（車田写真事務所）

ワークスタイルを育み、ものづくりを変えるプラットフォーム

ヤマハ発動機グループのデザインの司令塔として計画された、先行プロダクトの研究開発拠点。設計プロセスと並行して望ましい働き方について議論を交わし、ワークスタイルコンセプト「Double Decker Design Approach」を導き出した。それを実現するため、各階を吹抜けと階段でダイレクトに繋いでセキュリティラインを排した「立体的なワンルーム」とし、その中心にコミュニケーションの拠点となる「ダンスフロア」を据えた。五感全体で発想してものづくりをするデザイナーやエンジニアのマインドをかきたてるように、メカニカルな設えの空間にアクティビティを促す様々な仕掛けを設けて、その仕掛けや居場所を自らカスタマイズできる余白を持たせてある。ワークスタイルを考えることから生まれた空間がワークスタイルを育み、ものづくりを変えていく。デザイン本部独自のプラットフォームから新たなイノベーションが起こることを期待している。

（小谷陽次郎、平野章博／日建設計）



2輪から4輪までマルチな開発に対応できるモデルルーム



メカニカルな設えでマインドをかきたてるエントランスホール



「ヤマハ哲学」を世界に発信するプレゼンテーションシアター



本社ビル1階エントランス



金国店ショールーム内観

岐阜トヨタ自動車 本社ビル 金園店ショールーム・サービス工場

建 築 主 岐阜トヨタ自動車株式会社
設計・監理 伊藤建築設計事務所
施 工 岐建

本社ビル

所 在 地 岐阜市金園町9丁目28番地
敷地面積 1,082.47㎡
建築面積 918.07㎡
延床面積 2,172.90㎡
構造規模 S造 地上3階
工 期 2016年12月～2017年9月

【サービス工場】

所 在 地 岐阜市雪見町1丁目6,8,9,10,11
敷地面積 1,326.46㎡
建築面積 927.90㎡
延床面積 1,858.29㎡
構造規模 S造 地上2階+塔屋
工 期 2016年2月～2016年9月

金園店

【ショールーム】

所 在 地 岐阜市金園町10丁目21,22,23,24-2
敷地面積 1,654.96㎡
建築面積 1,457.80㎡
延床面積 2,826.22㎡
構造規模 S造 地上2階+塔屋
工 期 2016年2月～2016年9月

最 寄 駅 JR岐阜駅 岐阜バス金園町9丁目
撮 影 アーキフォト加藤、リフレクト

岐阜トヨタ自動車創立75周年に合わせた本社及び金園店等の建替えプロジェクトである。

それぞれの既設建物は本社周辺に点在していたが、ショールームとサービス工場を併設し、駐車場を上層階に設置するなど機能を集約して再配置し、順次移転新築していくことで、営業を停止せずに建替えを行った。

国道248号線に面する本社ビルとショールームは、カーテンウォールを白いフレームで囲って施設全体の統一感を図り、和をイメージしたおだやかで格調の高い外観とした。

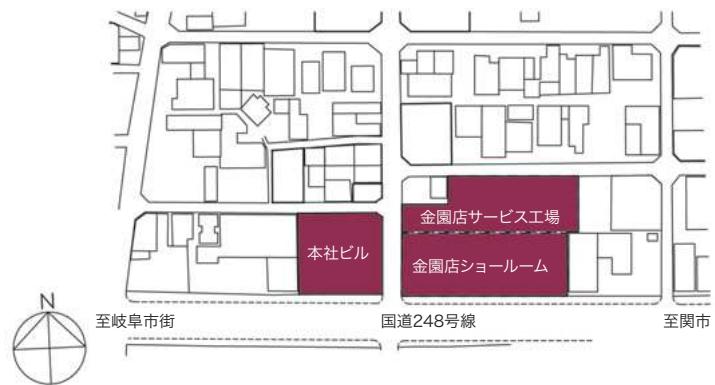
本社ビルは階ごとに機能を分け、利便性・セキュリティ面を強化した。スタイリッシュなエントランスロビー、ウィング型トラックの乗入れ可能な屋根付駐車場、無柱空間としたフレキシブルな事務室、用途に応じた多様な会議室の設置等、お客様・従業員ともに快適に過ごすことができる建物とした。また太陽光発電・自家発電設備の設置、EHPとGHP空調の併用等、BCP・省エネ・環境に配慮している。

ショールームは、1階ピロティ部にお客様駐車場・屋外展示場を設け、交通量の多い国道からも出入りしやすい動線を確保し、明るく訪れやすい店舗とした。内装は木調の床・ルーバー・格子状パーティション等、木質素材を使った落ち着きと暖かみのある空間とした。またサービス工場を隣接させることでお客様、従業員ともに使いやすい建物とした。整備工場ストールにはスポット空調を設け、通路のエア搬送ファンで攪拌することで夏場でも快適に作業できる環境としている。

(上西真哉、石橋洋二郎／伊藤建築設計事務所)



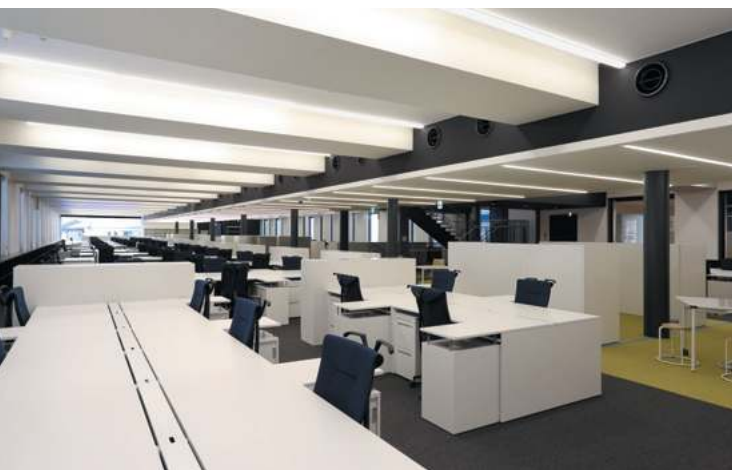
外観 南面



金園店サービス工場内観



金園店サービス工場外観



コンサルタント事業部を集約する整形でワンルームのオフィス



オフィス中央の開放的な階段

大日コンサルタント本社屋

建 築 主 大日コンサルタント株式会社
 設計・監理 日建設計
 施 工 大日本土木株式会社

創業65周年を迎え、岐阜県庁に隣接する旧本社屋敷地に旧社屋の1.7倍の延べ面積を有する新社屋を建設し、周囲に分散していた機能を集約。ワンフロア約1000㎡の整形でオープンなワンルームオフィスを確認して設計部門となるコンサルタント事業部を集約して業務効率の向上を図った。また階段で移動できる3階建てに抑え、オフィスの中央に開放的な階段とミーティングスペース、リフレッシュコーナーを設けることにより階をまたいだ社内コミュニケーションを活性化し、知的生産性を向上する。

土木コンサルタントの本社屋らしさを表現するため、明快で質実剛健な構造計画をめざし、鉄筋コンクリート造の扁平な柱・梁（1200×600）による門型フレームを3.6mスパンで連続したシンプルな筒状の構造体とした。また県道に面する東側ファサードはその門型の構造フレームの断面を外観に表出した力強い表現とした。外装は高断熱化を図り、通風や採光などの自然エネルギーを活用することにより、環境にやさしく省エネルギーで快適な執務環境とした。

BCP計画は、大地震に備え耐震構造Ⅱ類を採用し、洪水対策として1階床高を周辺地盤面より上げ、受水槽設置高さはハザードマップを指標として設定した。さらにBCP対応発電機、井水設備を備え、災害後の業務の継続を可能とした。

（小谷陽次郎、岡田宏介、廣野大樹／日建設計）

所 在 地 岐阜県岐阜市藪田南3-1-21
 敷地面積 2,137.00㎡
 建築面積 1,479.49㎡
 延床面積 4,099.28㎡
 構造規模 RC造 地上3階
 工 期 2016年9月～2017年9月
 最 寄 駅 JR東海道線 西岐阜駅
 撮 影 滝田良彦



大規模なイベントにも利用できるメインアリーナ



来館者にぎわうアスリートモール



周辺環境と対応した屋根シルエット

津市産業・ スポーツセンター サオリーナ／三重武道館

建 築 主 津市
設計・監理 日建設計（設計）・前野建築設計（監理）
施 工 清水・日本土建・東海土建特定建設工事共同企業体

所 在 地 三重県津市北河路町19-1
敷地面積 61,423.66㎡
建築面積 20,470.00㎡
延床面積 20,470.83㎡
構造規模 RC造・SRC造・S造（PCaPC版構造屋根）地上2階
工 期 2015年4月～2017年6月
最 寄 駅 JR紀勢本線・近鉄名古屋線 津駅
撮 影 センターフォト・愛知株式会社

古くは「安濃津」として港で栄え、海に面して開けていた津市は、平成18年に周辺市町村と合併し、「海から山まで」を市内に抱える自然豊かな市として更なる発展を遂げようとしている。この津市の新たなシンボルとすべく「津市産業・スポーツセンター」は、海辺の波、街のにぎわい、山並みの連なりを組み合わせ、既設のメッセウイングとも調和を図る、ヴォールト屋根を重ね合わせた津市に相応しいデザインとした。

また、本施設はメインアリーナやサブアリーナなど多くの機能を備えており、これら多様な施設を来館者にわかりやすく案内するため、施設の中央にアスリートモールと呼ぶロビー空間を設けた。アスリートモールに立てば各施設の入口が一望でき、来館者は各施設のテーマカラーに沿ったサインやカーペットのカラーリングに導かれ、自然と目指す施設に誘導されるようになっている。体育施設のエネルギー使用削減には、大空間で競技に必要な照度を確保する照明エネルギーをカットすることが効果的である。そのため各施設に設けた窓の他、プールのテント屋根、アスリートモール屋根のハイサイドライト等特徴的な採光手法を取り入れている。中でもメインアリーナに設けた光ダクトは世界最大級の規模を誇り、光ダクトのみでも平均200ルクスの照度を確保できる機能を備え、空調も含めた施設全体で約40%のエネルギー削減に大きく寄与している。

その他、災害時の一時避難場所となることを想定して、浸水対策に床レベルを周辺道路より高くすると共に、上水と雑用水の備蓄や非常時の汚水排水槽を4日分設ける等BCPに配慮した計画としている。

（小谷陽次郎、岡田宏介、高橋 溪／日建設計）



三重交通G スポーツの杜 伊勢 陸上競技場

建 築 主 三重県
設計・監理 安井建築設計事務所
施 工 清水・堀崎・伊藤特定建設工事共同体

所 在 地 三重県伊勢市宇治館町
敷地面積 110,069㎡
建築面積 8,387㎡
延床面積 13,601㎡
構造規模 RC・一部S造 地上4階、地下1階
工 期 2016年3月～2017年10月
最 寄 駅 近鉄鳥羽線 五十鈴川駅
撮 影 リフレクト

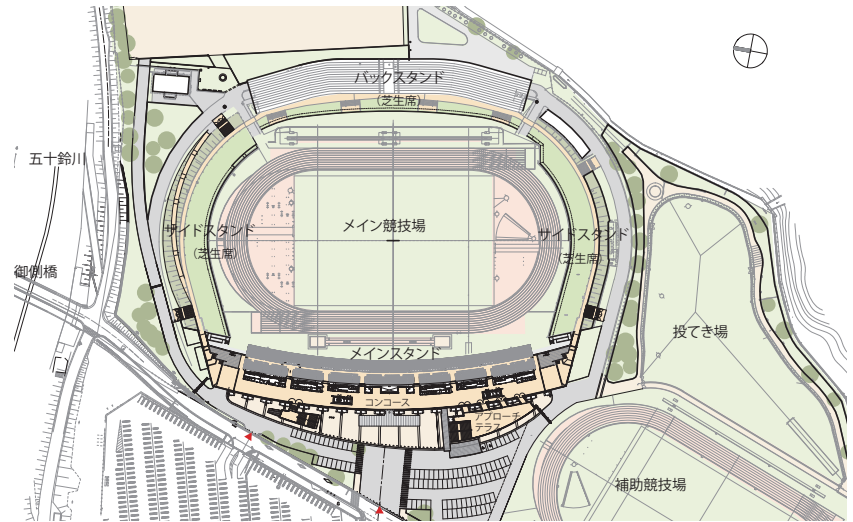
伊勢神宮に隣接する五十鈴公園内に位置する本競技場は、平成33年開催の三重国体メイン会場に予定されている。築45年以上が経過し、施設の老朽化や公認競技場としての現在の施設基準への対応を目的に、メインスタンドの改築をはじめ、サイド・バックスタンドの全面リニューアルを行なった。

神宮につながる杜の中の競技場として「架構美の継承」「山並み景観との調和」「素材感」を設計コンセプトに、「伊勢」に呼応した競技場をめざした。

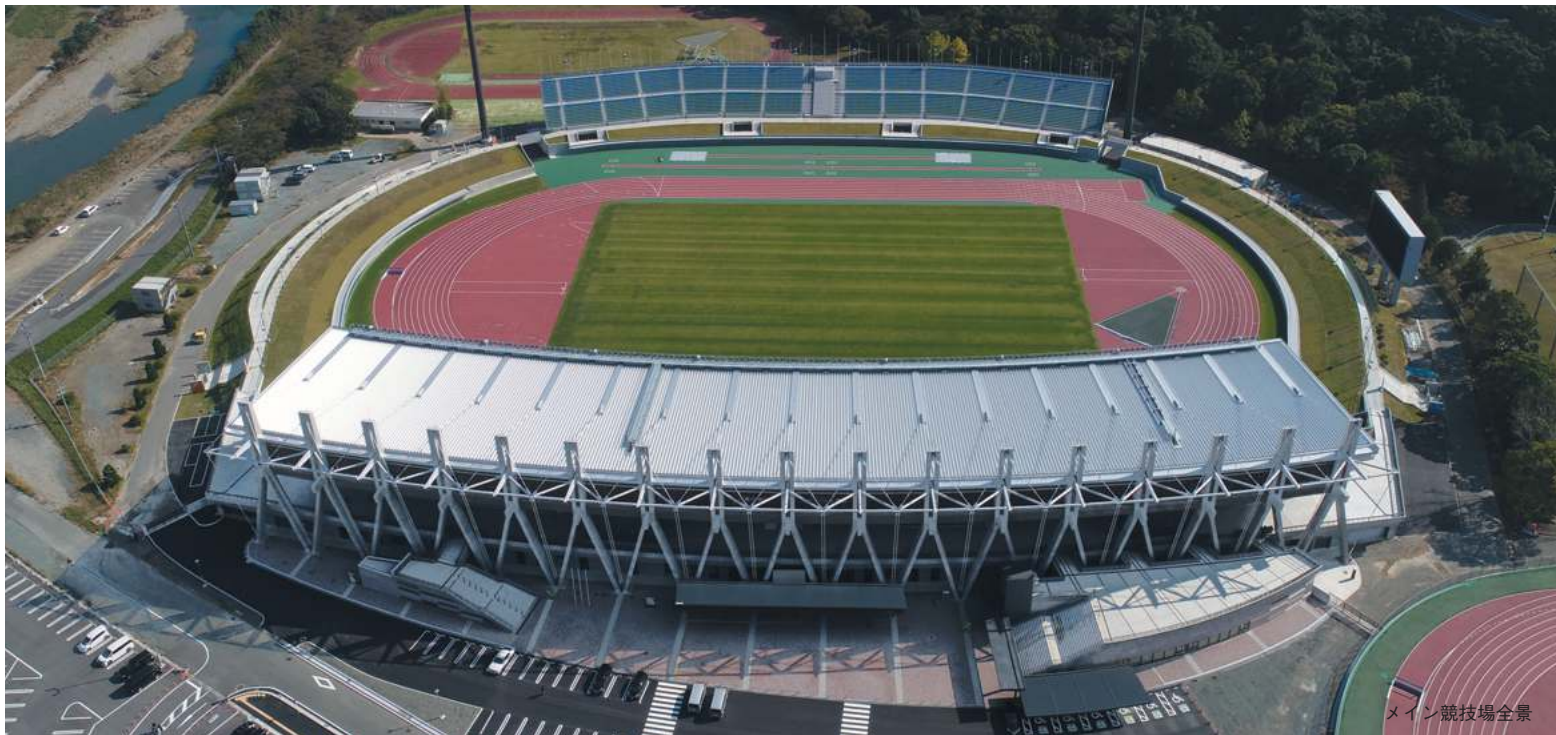
メインフレームはPCa化された直線部材により、組柱や木組といった伝統技術をイメージさせる架構デザインとし、構造体そのままを外観デザインに表した。また、張弦梁構造により高さを抑えたフラットな屋根としボリューム感を抑え、背後の山並み景観との調和を図った。さらにコンクリートや鉄による構造部材の力強さに加え、親しみを感じさせる県産木材による外壁ルーバーや玄関庇など、素材そのものの質感や魅力を活かすことを狙った。

エントランス横に設けられたアプローチテラスは、隣の補助競技場での選手のウォーミングアップ姿が一望でき、観客をスムーズにスタンドへ導くだけでなく緊張感やワクワク感を誘う仕掛けとなっている。観客が競技場全体を回遊できる動線や立見席を新たに整備し、バリアフリー化に対応するとともに様々な観戦が楽しめる競技場に生まれ変わった。

(上枝真二、三好裕司、原正二郎／安井建築設計事務所)



配置図 1/4000



メイン競技場全景



約7000人収容のメインスタンド



2階コンコース

スリットの窓が高浜町の美しい海の風景を切り取る

高浜町立中央体育館

建 築 主 高 浜 町
設計・監理 東畑建築事務所
施 工 清水・山惣ホーム・
弥栄電設特定建設工事共同企業体

高浜町中央体育館は福井県高浜町の高台にある総合グラウンドの体育館の建替えである。総合グラウンドは山を削り造成した場所に建てられており、西側・北側は高低差12mの崖地、北側は土砂災害特別警戒地域に指定される崖地になっている。限られた敷地の中で、さらに駐車場台数200台以上を設置するという、平面的に狭い敷地の中での計画が求められた。

敷地の制約、低コストが求められたことから、無駄な空間を徹底的に減らし、体育館に必要な最低限のボリュームの、極めてコンパクトな体育館を実現した。また、落雪防止や採光・通風といった体育館の安全対策・環境装置は体育館の周囲に設けられた高窓部分で全てを充足し、シンプルなカタチを実現している。

アリーナの柱と大梁の接合部は剛接合とし、H900×300の鉄骨梁をSRCの柱の中に埋め込み、梁せいを抑えることで、アリーナの高さを抑える計画としている。さらに、アリーナ大梁の剛接合により断面が大きくなったSRC柱を最大限に活かし、アリーナ周囲の2階を持ち出しとすることで、崖地で制約される敷地の中で、中空に浮いたランニング走路を実現している。また、積雪荷重で大きくなる小梁を斜めに掛けることで、高浜町の伝統工芸品である「組子指物」を思わせる意匠性の高い構造フレームを実現した。

アリーナの空調はコスト比較から、ガス熱源の床置GHPとした。6機ある屋内機を分散配置させ、さらに直近に室外機を隣接させることで、ダクトスペースと冷媒配管を最小限にし、1階の階高を4200で抑えた、コンパクトな体育館の実現に寄与している。

原子力災害時の外気の遮断、スポーツ利用時に配慮し、大きな窓を設けないうくりとしている。その代り、アリーナ周囲のランニング走路に高窓を設け、間接光での自然採光と中間期の快適な通風を実現している。

(瓦田伸幸、鵜飼浩平、植 政人／東畑建築事務所)

所 在 地 福井県大飯郡高浜町宮崎92号1番1
敷地面積 15,032.14㎡
建築面積 3,258.90㎡
延床面積 4,209.39㎡
構造規模 RC造（一部SRC造、一部S造）、地上2階
工 期 2016年4月～2017年3月
最 寄 駅 JR小浜線 若狭高浜駅
撮 影 エスエス北陸

南西側から建物正面を見る

ランニング走路の壁を自然光の間接光で照らし明るい体育館を実現

ヒノキの目透し板張がスピード感とリズム感をつくる

三交イン伊勢市駅前

建 築 主 三重交通株式会社、株式会社三交イン
設計・監理 株式会社東畑建築事務所
施 工 日本土建株式会社

日本を代表する「お伊勢さん」に参拝する人は多い。その玄関口に建つホテルである。駅前としての利便性を活かし、高層化を図り、昔ながらの宿場町に「和モダン」テイストを取り入れた新しい都市景観の創出を試みた。

多くの観光客が利用することから、正面にホテルエントランス、店舗の入口を分かりやすく配置した。2階にはホテルフロント、朝食ラウンジ、大浴場を配し、3階以上を客室とした。客室は、伊勢湾、神宮の杜を望める配置とし、窓外の景色から伊勢の豊かさを感じられる。ホテルフロント、ロビーは、木目調の仕上げ、茶系のアクセント壁を用い、落ち着いた雰囲気を演出した。賑わいのある朝食ラウンジは、大きな窓に和紙入りのブラインド、天井や壁には木目調の間接照明を施し、「和モダン」スタイルを徹底した。大浴場へ向かう廊下は伊勢の参道をイメージし、自然素材である砂利や石を活用した。男性大浴場は落ち着きある濃色で仕上げ、女性大浴場は淡い色調で柔らかさを演出し、旅の疲れを癒やす坪庭を施した。

(長谷恭典、谷口ひとみ／東畑建築事務所)

所 在 地 三重県伊勢市宮後1丁目1-1
敷地面積 977.46㎡
建築面積 418.68㎡
延床面積 3,317.16㎡
構造規模 S造 地上12階
工 期 2015年10月～2016年10月
最 寄 駅 近鉄山田線、JR参宮線 伊勢市駅
撮 影 エスエス名古屋支店



2階 ホテルフロント・ロビー



2階 朝食ラウンジ



伊勢市駅側より



浜松中部学園小中一貫校

設計 内藤・飯尾設計等特定業務共同企業体
施工 須山建設・中村組・杉浦組特定建設工事
共同企業体

所在地 静岡県浜松市中区松城町地内
敷地面積 24,919.38㎡
建築面積 5,997.56㎡
延床面積 11,791.80㎡
構造規模 RC造、地上4階
工期 2015年7月～2017年1月
最寄駅 JR東海道線浜松駅から遠鉄バス「美術館前」



石川県立中央病院

設計 日建設計
施工 大成建設・トーケン・表組・鈴木建設・
丸西組・石田工業 特定JV ほか

所在地 石川県金沢市鞍月東2丁目地内
敷地面積 96,000㎡
建築面積 16,000㎡
延床面積 62,000㎡
構造規模 S造、SRC造、RC造、地上10階、地下1階、
塔屋2階
工期 2015年3月～2017年9月
最寄駅 JR金沢駅から北鉄バス「中央病院」



医療法人宏和会 瀬戸みどりのまち病院

設計 東畑建築事務所
施工 TSUCHIYA株式会社、
シブヤバイピング株式会社

所在地 瀬戸市緑町二丁目113、114-1、115
敷地面積 32,145.77㎡
建築面積 3,456.49㎡
延床面積 9,229.11㎡
構造規模 S造、地上4階、塔屋1階
工期 2016年2月～2017年2月
最寄駅 愛知環状鉄道線 瀬戸口駅



紀北町健康増進施設 「紀北健康センター」

設計 東畑建築事務所
施工 北村・塩谷特定建設工事共同企業体

所在地 三重県北牟婁郡紀北町相賀417-1
敷地面積 5,117.68㎡
建築面積 2,088.28㎡
延床面積 2,898.65㎡
構造規模 RC造（一部S造）、地上3階
工期 2016年7月～2017年9月
最寄駅 JR紀勢本線 相賀駅



特別養護老人ホーム 第二白寿園

設計 (株)飯尾建築設計事務所
施工 石川建設(株)

所在地 静岡県磐田市掛塚地内
敷地面積 2,311.68㎡
建築面積 1,064.32㎡
延床面積 2,504.30㎡
構造規模 RC造、3階
工期 2016年5月～2017年3月
最寄駅 東海道線 豊田町駅



阿久比町庁舎

設計 安井建築設計事務所
施工 鴻池・岡戸特定建設工事共同企業体

所在地 愛知県知多郡阿久比町大字卯坂字殿越50
敷地面積 16,975.27㎡
建築面積 4,245.60㎡
延床面積 9,080.44㎡
構造規模 RC造一部S造、地上4階
工期 2014年6月～2017年3月
最寄駅 名古屋鉄道河和線 阿久比駅



東海労働金庫岡崎支店

設計 安井建築設計事務所
施工 鴻池組

所在地 岡崎市南明大寺町4-4
敷地面積 1652.62㎡
建築面積 582.70㎡
延床面積 923.83㎡
構造規模 S造、地上2階
工期 2017年1月～2017年9月
最寄駅 JR東海道本線岡崎駅から名鉄バス「岡崎警察署前」



朝霧カントリークラブ クラブハウス

設計 竹中工務店
施工 竹中工務店

所在地 静岡県富士宮市根原字宝山380番の一部
敷地面積 11,836.77㎡
建築面積 3,496.78㎡
延床面積 5,324.56㎡
構造規模 RC造、S造、地下1階、地上2階
工期 2016年8月～2017年11月
最寄駅 JR東海道本線 富士宮駅



名古屋市営金城ふ頭駐車場

設計 竹中工務店
施工 竹中工務店

所在地 名古屋市港区金城ふ頭2丁目7番2
敷地面積 30,521.17㎡
建築面積 26,648.50㎡
延床面積 143,982.01㎡
構造規模 S、SRC造、地上6階
工期 2015年12月～2017年2月
最寄駅 名古屋臨海高速鉄道あおなみ線 金城ふ頭駅



パッシブZEHの家

設計 株式会社ザインハウス
施工 株式会社ザインハウス

所在地 愛知県北名古屋市
敷地面積 287.50㎡
建築面積 152.64㎡
延床面積 171.24㎡
構造規模 W造
工期 2016年3月～2016年8月
(最寄駅は掲載不可)

東海支部特集

建築がつなぐ記憶・新たな創造

2016年3月東海支部特集では建築を供給する5つの立場（設計、施工、メーカー、教育・研究、行政）による3つのテーマを取り上げました。昨年の特集ではそのうち「保存活用」と「BIM」を取り上げました。

本年は「保存活用」のシリーズと、そして、新たに活動を始めた30代の方を中心とした集まり「納マリ倶楽部」を取り上げています。

「保存活用」のシリーズは、「建築がつなぐ都市、地域、まちの記憶」シリーズの第1回として、アクテノンを取り上げました。名古屋市西部の公園の中に佇む特徴的な建築、水道事業のための配水塔として建設され、図書館になり、今は演劇関係者のレッスン場として高い稼働率をほこる市民に愛されている建築。都市、地域、まちの記憶をつなぐアクテノンは、多角的な視点でその魅力を紹介しています。



アクテノン外観



アクテノン内部

東海支部では、青年技術者として表彰を受けた会員を会員交流会として、役員会にて発表してもらう機会を設けています。「納マリ倶楽部」は、そのような機会を通じて、会員から発案があった取り組みです。会社の中では出来ない議論を活発に行っていただくことが新しい創造につながると期待しています。



納マリ倶楽部の様子

東海支部だよりでは、吉村順三が設計した寮に宿泊した清里・茅野見学会の様子を紹介しています。東海の建築としては、開口部をテーマに4作品紹介しております。

(東海支部特集特別編集委員会委員長 篠原佳則)

■特集Ⅰ 建築がつなぐ都市、地域、まちの記憶 第1回「アクテノン」

名古屋市・稲葉地配水塔・演劇練習館「アクテノン」●中井孝幸

演劇練習館をはじめとする歴史的資源を活かしたまちづくり●松田和彦

稲葉地配水塔不死鳥伝説～2度生まれ変わった配水塔～●小島克生

配水塔から図書館へ地域の「記憶」の倉庫●中井孝幸

転用プロセスの特徴と建物各部の関連性名古屋市演劇練習館「アクテノン」●谷田 真

アクテノンの眩き～私はいき続ける～●加藤武範

■特集Ⅱ 東海支部青年部会における30代前後の若手設計者の意見交換会「納マリ倶楽部」

●塩田哲也、中井孝幸、久保久志、三宅伸幸、鈴木豊一郎、小杉嘉文、佐藤 剛、石橋洋二郎

■東海の建築：開口

あいち航空ミュージアム●安井建築設計事務所

岡崎信用金庫名古屋支店●日建設計

岐阜信用金庫春日井市役所前支店●竹中工務店

知多信用金庫本店営業部・ほしざきホール●伊藤建築設計事務所

■東海支部だより

清里・茅野見学会旅行記2017年10月8日（日）～10月9日（月・祝）●平松佳奈、●塩田有紀

特集テーマ：

建築がつなぐ都市、
地域、まちの記憶

第1回

名古屋市・稲葉地配水塔・
演劇練習館「アクテノン」

中井孝幸

愛知工業大学工学部建築学科
教授

中井孝幸

1967年 大阪府生まれ
 1991年 三重大学工学部建築学科卒業
 1993年 三重大学大学院工学研究科修士課程修了
 1993年 三重大学工学部建築学科助手
 2001年 安井建築設計事務所名古屋事務所
 2005年 INA新建築研究所名古屋支社
 2006年 愛知工業大学工学部都市環境学科講師
 2008年 愛知工業大学工学部都市環境学科准教授
 2009年 愛知工業大学工学部建築学科准教授
 2016年 愛知工業大学工学部建築学科教授
 現在に至る

■東海特集号テーマ：建築がつな
ぐ都市、地域、まちの記憶

日本建築協会は2017年3月に創立100周年、2015年に東海支部は55周年を迎え、月刊の機関誌「建築と社会」の毎年3月または4月に東海特集号を発刊している。

過去、様々な特集やテーマが取り上げられているが、2016年3月の東海特集号では、以下の3つの座談会を開催、報告している。

■座談会1：設計技術と施工～3次元CAD利用による建物づくり～

■座談会2：教育と建築～参加型設計施工プロセスの活用を通して～

■座談会3：地域の再利用と地域活性～重要文化財の保存とリノベーション～（半田赤レンガ倉庫にて座談会開催）

また、2017年4月の特集号では、以下2つの特集記事を掲載している。

■建築文化財の保存と活用：旧市川家住宅での取り組みを事例にして

■BIM技術研究会：BIMに取り組む様々な立場での意見交換

そうした中、2017年度からは「保存と活用」として、歴史的に重要な建造物だけではなく、私たちの身の回りにも長く使い続けている建物に着目し、「建築がつなぐ都市、地域、まちの記憶」をテーマに設定した。建物の建設経緯はもちろんのこと、保存されている経緯や使われ方に焦点を当てて、東海地区の中から掘り出していこうと考えている。

■第1回「アクテノン」

その第1弾として、今回は名古屋市の稲葉地公園内にある「アクテノン」を取り上げたいと思う。アクテノンは、1937年に高架水槽式の配水塔として建設され、その後1965年に図書館、1995年から演劇練習館として活用されているたいへん特徴のある建物である。



図1 稲葉地公園内の「アクテノン」(2017年12月)

稲葉地配水塔は、名古屋市水道局の設計で、1937年に竣工したが、1944年に配水塔としての使用は終了している。その後、1965～1991年まで中村区の図書館として利用され、1989年には第1回名古屋市都市景観重要建築物に指定されている。1995年から現在まで、演劇練習館として利用されている。

神殿風の建物の特徴もさることながら、その保存と活用の経緯もたいへんユニークであるため、こうした転用の経緯も含めて建物の内容を紹介し、全国に向けて東海地区にもいろんな建築があることを発信できるよい機会にしたいと考えている。

■設計、歴史まちづくり、建築計画など様々な立場からの論考

特集号としては、様々な視点から一つの建物を取り上げたいと考え、都市景観の立場から名古屋市歴史まちづくり推進室の松田和彦氏、配水塔の設計については元名古屋市上下水道局職員の小島克生氏、建築計画の立場から、図書館への転用については中井、演劇練習館への転用については名城大学の谷田真先生、見学記として東海支部役員の加藤武範氏（メックステクノ東海）に執筆して頂き、他の事例も含めながら「保存と活用」について論考していきたい。

■都市、地域、まちの記憶

魅力ある都市とは、時間や文化、そこでの生活が建築に刻まれ、それが都市の記憶となり、そこかしこに残る記憶の断片が都市の魅力ではないかと思う。

ICTの技術はめまぐるしく、いろんなモノのスピード感は早まっているが、地域の歴史や文化、都市の記憶はそうした短時間ではなく、20年、50年、100年と長い時間をかけて醸成されていく。都市や地域、まちの魅力とは、伝統的な建築物だけでなく、一般の建物での何気ない生活の痕跡であり、時間のつながりや積み重ねでもある。

こうしたテーマを設定することで、今後の単体としての建築も、集合体としての都市も、今現在だけでなく未来へ「記憶」をつなぐために、持続可能な計画を検討するよい機会になるのではないかと考えている。（なかい たかゆき）

演劇練習館をはじめとする歴史的資源を活かしたまちづくり

松田和彦

名古屋市役所 観光文化交流局
文化歴史まちづくり部
歴史まちづくり推進室長

松田和彦

1961年 愛知県生まれ
1984年3月 京都大学工学部交通土木学科卒業
1984年4月 名古屋市職員 採用
現在に至る

■はじめに

名古屋は、古くは地方勢力の拠点として、江戸時代は御三家筆頭である尾張徳川家の城下町として、また近代以降は我が国における経済産業の一大拠点として発展してきた。

本市では平成23年7月に「名古屋市歴史まちづくり戦略」を策定し、市内に残る歴史的資源を積極的に活用した、魅力あるまちづくりに取り組んでいる。

ここでは、名古屋市演劇練習館に係る制度等を紹介する。

■歴史的建造物の制度

本市においては、地域を特徴づける重要な存在である歴史的建造物について、景観法、文化財保護法等に基づき、下図のように段階的な位置付けを行っている。

景観法が制定される以前の昭和59年に名古屋市都市景観条例を制定し、都市景観形成上重要であると認められる建築物・工作物については、都市景観重要建築物等として指定を行ってきた。また、平成23年には当該条例を改正し、地域に根差したより身近な歴史的建造物を「登録地域建造物資産」や「認定地域建造物資産」とし、多くの人に知ってもらい、大切にしていける機運の醸成につなげ、歴史的建造物の保存・活用を推進している。

その中で名古屋市演劇練習館は、平成元年11月1日に都市景観重要建築物等に指定されている。

■都市景観重要建築物等(指定基準)

指定については、都市景観上の価値・歴史的価値・地域における景観的な位置付けを考慮し、以下の点に沿って行っている。

- (1) 建築物（工作物）それ自体の価値が優れているもの
- (2) 改造が少なく原型をよくとどめているもの、若しくは原型をいかした改造がなされたもの
- (3) 老朽化が著しくなく、修繕が可能なもの
- (4) 歴史的価値があるもの
- (5) 地域のランドマークやシンボルとなるもの

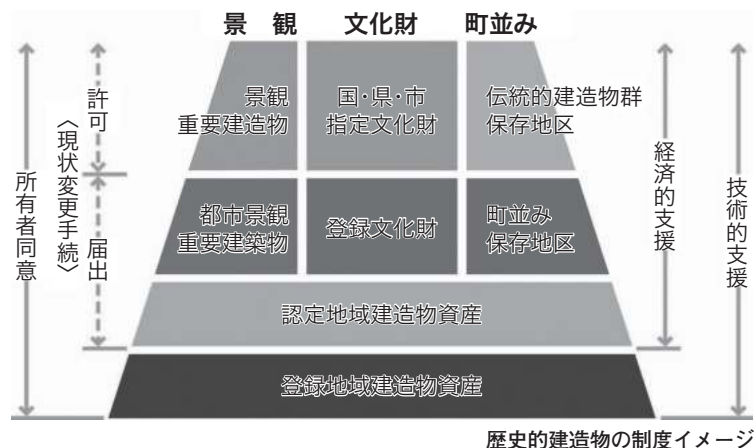
指定物件については、外観の保存工事等に要する費用に対して助成を行っている。

■第1回指定までの経緯（調査）

都市景観重要建築物等については、平成元年から8年までに6回にわたり指定を行っているが、名古屋市演劇練習館は第1回指定物件となった。第1回指定物件の、調査から指定の経緯については、次頁の図のとおりである。

まず、都市景観重要建築物等を指定するにあたり、名古屋市内に残されている景観上価値の高い建築物・工作物を把握するため、昭和59年度に『都市景観重要建築物実態調査』、昭和62年度に『都市景観重要工作物実態調査』を行った。

建築物の調査については、文献調査で193件の物件を抽出したのち、老朽化が著しく修復が困難なものは除外する等の選定基準を設け、100件まで物件を選定し、現況調査を行った。一方、工作物については文献調査で100件抽出したのち、ランドマークとなるか等の選定基準を設け、54件までに物件を選定し現況調査を行った。



これらの中から、第1回の指定であるものを踏まえ、公共物等積極的に指定できるもの、民間所有でも市民に馴染みのあるものという点を重視し、建築物・工作物、計54件を指定候補とした。

第1回指定までの経緯
(審査／指定の考え方)

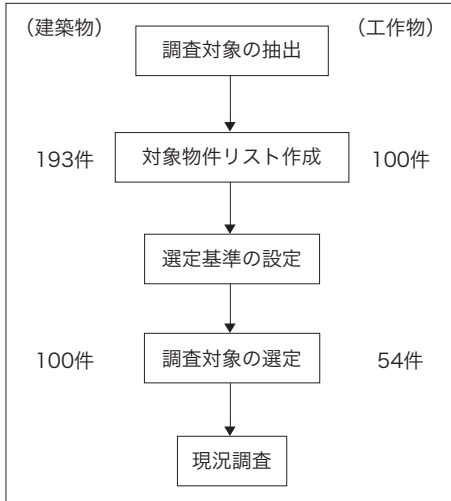
この54件の候補物件について、建築等審査部会において、7名の委員が審査を行うとともに、第1回の指定にあたっての考え方が議論された。

部会ではおよそ10回にわたる議論や現地視察が行われ、第1回指定物件については話題性・群（地域の特徴をもった建築物・工作物のまとまり）を考慮しつつ、早急に指定すべき物件を対象とし、指定についての考え方を以下のようにまとめた。

『都市景観重要建築物等の対象となるものは建設後一定の年月が経ったものが多く、特に都心部では建て替えられつつあるものもあるため、都市景観重要建築物等について市民の意識を高める意味においても市民によく知られた物件とすることが望ましい。』

第1回指定物件として、名古屋市演劇練習館を含め、名古屋市役所本庁舎や鶴舞公園噴水塔など計12件が指定された。

戦災で多くの建築物等を焼失した名古屋では、第1回指定当時にすでに多くの歴史的資源が失われており、都市の景観形成上特に重要な役割を担っているランドマークあるいはシンボルとなる重要な建築物・工作物について指定が行われた。



第1回指定までの経緯（調査）

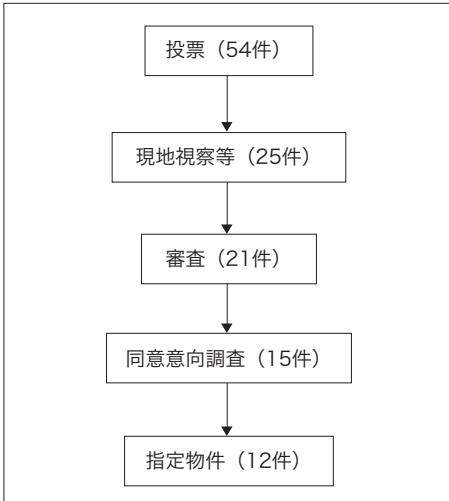
名古屋市演劇練習館の指定経緯

名古屋市演劇練習館は、前述の昭和59年度に行われた『都市景観重要建築物実態調査』において以下の特徴がまとめられた。

- (1) 円柱の神殿のような建築物である（建築物の評価）
- (2) 名古屋の水道事業の歴史上、貴重な存在である（史的評価）
- (3) 公園の広い敷地と樹木によって、良好な景観がつくられ、地域のシンボリック的存在となっている（現況評価）
- (4) 周辺にさげざるものがなく、どこからでも見ることができ、ランドマーク効果が高い（見え方）

そこで、都市景観重要建築物等の指定審査対象となり、54件の対象物件の1つとして審査部会で投票が行われ、7名中6名の委員から票を得た。5名以上の委員から票を得た物件は8件のみであったため、最初の審査時から名古屋市演劇練習館は建築物単体として、景観上価値の高い建築物と考えられていたことが伺える。

名古屋市演劇練習館は、指定当時、中村図書館として広く市民に親しまれており、馴染みのある建物であったこと、建築的に特徴がありランドマーク効果が高かったことなどの点から最終的に高い評価を得て、第1回都市景観重要建築物等に指定されたのである。



第1回指定までの経緯（審査）

まとめ

名古屋市では、平成元年から8年の間、6回の審議により都市景観重要建築物等について57件の指定を行ってきた。

このような指定により、保存を図るべき対象となる歴史的建造物を制度的に位置付け、同時に地域資源として市民に発信していくことが重要であると考えます。

都市景観重要建築物等を含め、前頁のように景観、文化財、歴史的町並みなど重層的な制度の運用によって歴史まちづくりを推進し、市民が自分のまちに誇りを持てる「語りたくなるまち名古屋」を実現していきたい。

(まつだ かずひこ)

鍋屋上野浄水場旧第一ポンプ所
五条橋
名古屋市演劇練習館（旧稲葉地配水塔）
納屋橋
名古屋市役所本庁舎
愛知県庁本庁舎
株式会社三井住友銀行名古屋支店 (旧株式会社三井銀行名古屋支店)
住友銀行名古屋支店 【平成10年 8月12日指定解除】
旧名古屋銀行本店ビル (旧中央信託銀行株式会社名古屋支店)
名古屋市公会堂
鶴舞公園噴水塔
鶴舞公園普選壇

第1回指定物件一覧



稲葉地配水塔不死鳥 伝説

～2度生まれ変わった
配水塔～

小島克生

(株)日水コン 水道事業部顧問

小島克生

1951年 愛知県生まれ
1975年 岐阜大学工学部土木工学科卒業
1975年 名古屋市役所採用（水道局配属）
2007年 名古屋市上下水道局管路部長
2010年 同建設部長（兼水道技術管理者）
2012年 定年退職、「名古屋市水道百年史」
編纂委嘱
2014年 桑名市上下水道部 事業調整官
2016年 (株)日水コン 水道事業部顧問
現在に至る

■はじめに

太平洋戦争が終わり、航空機関連の軍需工場が多かった名古屋も度重なる空襲で一面の焼け野原となっていた。今ではとても想像できないが、名古屋駅から西を見ると何もなく、ただ遠くに見えたのは豊国神社の大鳥居¹⁾と稲葉地配水塔だけだったという。その生き残った稲葉地配水塔はその後、数奇な運命をたどり、不死鳥のように2度も生まれ変わったのである。

■名古屋の水道の始まりと拡張

名古屋市の水道は、大正3年（1913）に給水を開始した。木曽川から取水した原水を鍋屋上野浄水場で浄化し、当時の市域より東方の丘陵地に設けた東山配水池に揚水し、その標高差を利用した自然流下方式で市域に向け配水していた。その後、給水区域が広がり、標高の高い区域にも配水しなければならなくなり、配水池の横に名古屋市初の配水塔である東山配水塔（高さ27m、水槽容量313m³）を昭和4年（1929）に建設した。この配水塔の設計者は、当時、東京帝国大学工学部土木工学科を卒業したばかりの新人技術職員だった成瀬薫（1906～1990）であった。



竣工当時の東山配水塔、成瀬薫
（名古屋市上下水道局提供）

現在、名古屋市水道には、停電対策など安定給水のため多くの配水塔が建設されている。水道施設のほとんどは、半地下・地下構造物か埋設管路であり、また、高い塀に囲まれており、一般的には目立たないものが大部分である。唯一、配水塔は遠くからも目立つ水道構造物である。そのため、配水塔には水道技術者の思い出が強いことが多い。

時代が昭和に入り、名古屋市の発展は著しく、水道施設も拡張に次ぐ拡張の連続であった。人口100万人を目標とした第3期拡張事業の工事中にも関わらず、150万人を目標とした第4期拡張事業計画を早急に策定しなければならなかった。

昭和9年（1934）には名古屋市の人口が

100万人を突破し、また、産業も軍需の要請もあり、従来の軽工業から船舶、鉄道車両、自動車、各種兵器、航空機、化学製品などの諸産業が伸長して、産業構造の高度化が進んだ。

■稲葉地配水塔の計画

そうした中、第4期拡張事業で浄水能力を1.5倍に拡張しても、水道管路網の拡張は簡単にできず、水需要の増加による水圧の低下が特に給水区域末端で生じていた。当時の給水区域の西端に位置していた名古屋駅以西の区域は、名古屋駅が笹島から現在の位置に移転することに伴い、土地区画整理事業が急速に進んでいた。この地域は、給水区域の東端にある東山配水池から遠いため水圧低下が著しく、それを防ぐために幹線管路の増強に加え、稲葉地配水塔の建設が計画された。

通常、配水塔は、一旦、付属の配水池に貯水し、ポンプで塔上部の水槽へ揚水する。しかし、稲葉地配水塔は揚水設備を設けず、夜間の水道使用量が少ない時間帯に配水管内の水圧が上昇することを利用して直接水槽に貯水し、昼間にその貯水を配水塔の高さを利用して自然流下方式で配水するものであった。

設計を担当したのは、東山配水塔を設計した成瀬薫であった。当初計画では水槽容量590m³であったため、東山配水塔と同じ外観形状で水槽を横方向に拡大したものを考えていたようだ。一般的に、水槽の水深は槽内の水位の変化があっても配水圧の変動幅を最小限に抑えるため、水槽容量が増えても水深は変わらず5m程度とされているからである。

しかし、周辺区域の発展が目覚ましく、水需要の激増が予想されたため、容量を一挙に4,000m³に計画変更し、塔の高さも下げることとなり、当初計画案とはまったく別の形状に変更しなければならなかった。

■全く別の変更案

変更案の規模は、水槽容量4,000m³（実容量3,930m³）、水槽直径33m、水槽高さ7m、水深5.175m、地上高29.47mで、当時日本最大の鉄筋コンクリート製水槽であった。水槽を支える塔の構造は、中央に円筒の柱（直径5m）と、中心から半径4.5mと10.5mの円周上に建てた角柱（85cm）を壁（厚さ250mm）で連結し

(輪壁)、地上4階、地下1階の建物とした。さらに半径16.5mの円周上に円柱(補強柱)16本(直径1.5m、高さ20m)を建て、その円柱と輪壁で容量4,000m³の平べったい円筒形水槽を支える構造とした。

外周の16本の円柱で、市民の命を守る貴重な水を貯めた水盤を天に向かって捧げているような姿になり、古代ギリシャの円形神殿を思わせる外観となった。配水塔の周辺は、運動場、プール、噴水、園地などを含む「水道公園」(現稲葉地公園)として周辺道路などを一体とした幾何学的な配置で整備された。



竣工当時の配水塔と水道公園
(名古屋市上下水道局提供)

設計者の成瀬薫は、昭和14年(1939)に名古屋市を辞して中国に渡り、水道の拡張事業等に従事し、戦後、長崎市の助役を4期務め、長崎の復興に尽力した。成瀬は、計画変更により全く新しい発想で、当初から円形神殿をイメージしたと語ったそうだ。

しかし、優美な姿にした列柱については、様々な説がある。戦時下の資材不足のため、外周を輪壁にせず補強柱とした苦肉の策だとか、または、水槽容量が7倍近く増えるという計画変更となったため、当初設計案から拡大した水槽部分を急ぎよ16本の列柱で支えることにしたという説などがある。ただ、構造計算上、非常にバランスが良い構造物なので、苦肉の策というよりは最初から今の形状としたと考えられる。

■完成前にすでに廃止の運命

稲葉地配水塔は、昭和12年(1937)5月31日に竣工したが、同19年(1944)、周辺区域の配水管増強が完了し、約7年間で配水塔としての役目は終わった。実は、配水塔竣工前にすでに次期拡張計画により廃止が予定されていた。すなわち、第4期拡張事業が完了する前に、次期の第5期拡張工事が計画され、昭和12年3月に国の認可を得ており、名古屋

の西方に新設される大治浄水場からポンプ圧送が始まれば、いずれ廃止となる運命であった。このことは、塔建設工事中に既に決まっていたことになる。当時は、戦時体制に向けて水需要が逼迫しており、あらゆる手段を講じて対応をせざるを得なかったためであろう。

配水塔運用停止後は無用の長物となり、水道局倉庫として長い間放置されていた。

■一度目の復活「中村図書館」

稲葉地配水塔は、配水塔としては短命であったが、その後、数奇な運命をたどることとなる。

昭和40年(1965)7月に当時の杉戸清市長(元水道局長)の「1区1図書館政策」により旧配水塔を中村区の図書館として改修・開館した²⁾。この円形図書館は変わった形の図書館として親しまれていたが、建物内部には無駄なスペースができて、使い勝手がよくないという欠点があった。そのため、平成3年(1991)3月に、豊国神社のある中村公園内に新設された「中村公園文化プラザ」内に新図書館が移転・開館され、再び、旧稲葉地配水塔は水道局倉庫に戻った。

■二度目の復活「市演劇練習館」

その後、近隣の音大の練習室やカラオケ・ルームなど、特異な形状である旧配水塔の活用を検討は度々されたが、いずれも立ち消えとなっていた。平成に入り、元水道局長でもあった当時の西尾武喜市長と地元で活躍していた俳優天野鎮雄氏との対談で、発表する劇場は小さくさんあるが、舞台と同じ規模のスペースで練習する場がないので、名古屋に演劇文化が根付かないという話が出た。

かつて図書館に改修した経緯や図書館の移転で放置されていることを知っていた西尾市



名古屋市演劇練習館「アクテノン」(筆者撮影)

長の発案で、大空間の水槽を持つ旧配水塔を再利用することとなった。

平成6年(1994)6月13日、旧配水塔の管理が文化事業を担当する市民局(当時)に移管され、同7年(1995)12月、名古屋市演劇練習館「アクテノン」として改修された。

「アクテノン」とは、「アクト(演劇)」(またはアクア・水)とギリシャの「パルテノン神殿」を合成したものとされる³⁾。

水槽は大リハーサル室(5階)になり、その他大小練習室・研修室等(1~4階)を備え、演劇、ミュージカルの練習以外にも、バレエ、日舞、詩吟、ダンスなどの練習にも利用されている。また、建物内にはモニュメントとして水道管のバルブ等も残され(4階)、短命だったが配水塔だったことの「証し」が留められている。



水槽下の4階に残るバルブ(筆者撮影)

公共の演劇練習専用施設として、また2度にわたって再生利用しているということで、都市の社会資本のリノベーション(再生)の成功例としても注目を浴びている。

まさか水を満々と貯めた水槽が演劇のリハーサル室になり、多くの人々に利用されるようになるとは、設計者の成瀬薫も知ることはなかった。

なお、平成元年(1989)11月に名古屋市都市景観重要建造物に指定、同8年(1996)10月に都市景観大賞(建設省)(稲葉地公園地区)、同年12月に名古屋市都市景観賞(演劇練習館及び稲葉地公園)を受賞した。同26年(2014)10月に旧稲葉地配水塔として土木学会推奨土木遺産に認定された。(こじま よしお)

(註)

- 1) 豊臣秀吉を祀る豊国神社(名古屋市中村区)の参道にある高さ24mのRC製大鳥居(1929年建立当時日本一の大きさ)
- 2) 図書館改修当時の担当課長は、後に市長となった西尾武喜水道局施設課長だった。
- 3) アクテノンの名称は公募により、4,689点の中から選ばれた。

配水塔から図書館へ

地域の「記憶」の倉庫

中井孝幸

愛知工業大学工学部建築学科
教授

中井孝幸

1967年 大阪府生まれ

1991年 三重大学工学部建築学科卒業

1993年 三重大学大学院工学研究科修士課程
修了

1993年 三重大学工学部建築学科助手

2001年 安井建築設計事務所名古屋事務所

2005年 INA新建築研究所名古屋支社

2006年 愛知工業大学工学部都市環境学科講師

2008年 愛知工業大学工学部都市環境学科准
教授

2009年 愛知工業大学工学部建築学科准教授

2016年 愛知工業大学工学部建築学科教授
現在に至る

■配水塔から図書館への転用

近年、既存施設から図書館への転用（コンバージョン）する事例は、全国でも増えてきている。日本図書館協会が2006年に行った調査¹⁾によると1990年以降増加傾向にあり、全国の32都道府県で転用事例があり、既存施設としては学校施設や庁舎が多く、地域的な偏りはなく各地で図書館への転用が行われていた²⁾。今回取り上げる旧名古屋市中村図書館は、もとの施設が「配水塔」ととてもユニークであり、「図書館」として使用した後も、「演劇練習館」へと転用されるなど、数奇な運命をたどった建物である（図1）。



図1 アクテノンの外観（2017年12月）

配水塔から図書館への転用の詳細な資料は少ないため、名古屋市中村図書館発行の「さようなら配水塔の図書館—中村図書館25年のあゆみ—」などの資料^{3、4)}から、当時の様子を整理していく。

「稲葉地配水塔」は、人口が急増した名古屋市西部の水圧低下を防止するため、市内で2番目の高架水槽として、昭和12（1937）年5月31日に竣工した。構造はRC造、直径33mのシリンダー状の形状で、中央部に1本の心柱、外周沿いに直径1.5m、高さ20mの16本の円柱が立ち並び、上部の4000㎡の水槽を支える円形の神殿風の外観となっている。高さは29.4mで、夜間に配水管の水圧を利用して高架水槽へ揚水した自然流下式であったが、昭和19（1944）年大治浄水場からのポンプ圧送による給水が可能となり、配水塔の使用は7年間で取りやめとなった。その後、改修工事の準備が始まる昭和39（1964）年夏まで、長い

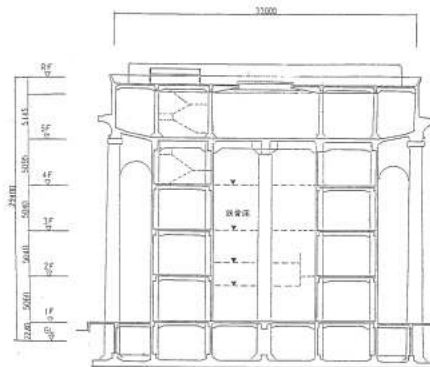
期間無人で一部を倉庫にしか使用されていない状況であった。

■図書館への改修工事

名古屋市は、全国に先駆けて一区一館制を採用し、ひとつの行政区に様々な公共の文化施設を1つずつ整備していき、中村区には昭和40（1965）年に中村図書館が開館した。配水塔を図書館に転用した詳細な経緯は不明であるが、昭和39（1964）年8月の第4回市政世論調査の結果、市民が欲しい文化施設としては図書館が最も高く、身近なところに図書館（分館）が欲しいとの希望が多かった。こうした市民からの要望を受け、市長選挙公約にも「1区1図書館づくり」を掲げ、昭和40（1965）年4月に杉戸清市長が再選した。

改修の計画は、鶴舞中央図書館と水道局施設課との間で進められ、①配水塔の外観をできる限りそのまま保つこと、②吹き抜けの部分に書庫を集めること、③地震に耐えることに留意して、計画された。

改修前の配水塔は図2に示すように、中央の心柱から約5m間隔で内壁と外壁で囲まれており、内壁と外壁は床が張られており、中央部分は4層の吹き抜け空間となっていた。

図2 図書館改装前の稲葉地配水塔の現況図³⁾

書架は500～800kg/㎡程度の荷重がかかるため、この吹き抜けの2階部分に積層の書庫を設置している。窓は自然採光を取るため大きくしたかったようであるが、耐震性の視点から少ししか拡張できず、壁厚が300mmもあるため、はつり工事が大変であったことが残されている（図3）。

工事の起工日が昭和40（1965）年3月15日、竣工が7月8日と工事期間は約4か月の突貫工事であり、7月15日に開館式が挙行されている（図4）。

I 思い出の中村図書館



改修工事直前の
旧稲葉地配水塔
(昭和40年)

改修工事始まる
(昭和40年7月)
中2階床の配筋



窓の断(はつ)り

図3 改修当時の様子³⁾

昭和50年頃の中村区(南方より図書館を見る)



(東方より図書館を見る)



図4 改修当時の中村区の様子³⁾

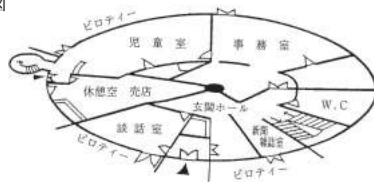
■図書館の平面計画

開館当時は、図書館管理面積は2859.06㎡、座席数384席、蔵書冊数6000冊、職員数8名(うち司書4名)でスタートした。開館当初の各階平面図を図5、図6に示す。

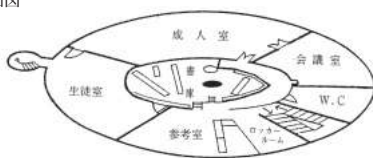
1階は、玄関ホールと談話室、新聞雑誌室、休憩室、売店、児童室、事務室など細かい部屋に分かれている。2階は、中央に積層書庫、周囲はロッカールーム、参考室、会議室、成人室、生徒室など利用対象によって分け

敷地面積	稲葉地公園内(33,528㎡)
建設面積	753.49㎡
図書館管理面積	2,859.06㎡
座席数	384席
蔵書数	6,000冊
職員数	8名(内 司書数4名)

1階平面図



2階平面図



3階平面図

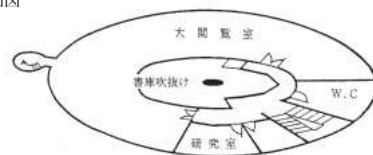
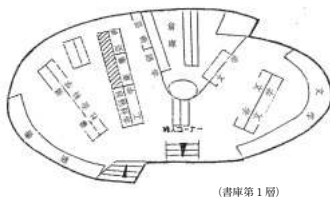


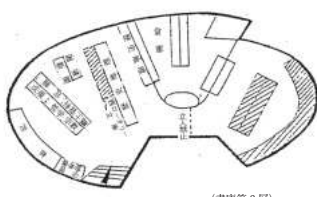
図5 図書館の各階平面図³⁾

2階の書庫の内部
(書庫第1層)



(書庫第1層)

(書庫第2層)



(書庫第2層)

図6 書庫階平面図³⁾

されている。3階は、中央に積層書庫の上階部分、研究室、大閲覧室という開架エリアになっていた。

中村図書館としては25年間使用しており、その間に様々な増改築が行われている。

昭和43(1968)年9月には収容能力を5万冊へ増やし、翌44(1969)年には生徒室に壁面書架を設けて4000冊の参考室に改装し、同50(1975)年には雑誌架を増設している。

また、昭和45(1970)~47(1972)年にかけて、各階の床張工事、同46(1971)年に

は冷房工事が行われ、同42(1967)年は展示室の設置と民具・民族資料室の公開、翌43(1968)年は催事場が設置されている。

児童室には独立した出入口が設けられ、屋外のピロティ部分にはテーブルやベンチなども置かれていたようである。図書の増加により、昭和44(1969)年12月に中2階にする工事が行われ、下を書庫として、上には壁面書架を設け参考図書を置いて学習コーナーとしている。昭和59(1984)年3月に売店が閉鎖されたので、この部分をこども読書室として整備している。

このように、昭和40(1965)年には1382冊だった児童室の蔵書が、平成元(1989)年度には27534冊と約20倍に増え、開館当初から同じ場所でサービスを提供してきたため、室内の様子は大きく変わったと考えられる(図7、8)。



図7 図書館案内図(1987年4月撮影)⁴⁾



図8 書庫階案内図(1987年4月撮影)⁴⁾

■図書館として使い続けた25年間

転用利用のため図書館として最初から計画していないとはいえ、開架室の中央部分に積層書庫を抱く形状となり、サービスデスクからは見通しもよくなく、使い勝手は悪かったかもしれないが、愛着を持って使い続けられたように思える。

円形の平面形の場合、書架を平行に並べても、放射状に配置しても配架の効率は悪くなるが、書庫階の書架レイアウトは斜めに少しずつずらしながら配置するなど、狭いスペースの中でも工夫がみられる。

図書館として利用している当時の詳細な様子は分からないが、図書館として使い続けた25年間の間に、少しずつ手を入れながら、書架を増やし、床を増やして対応してきた様子は伺える。図書館への転用で最も問題となるのが、積載荷重である。一般的な建築物では、床の積載荷重は280kg/m²程度の場合が多く、床の補強を行わないのであれば、書架のレイアウトは既設の梁の上に置く、書架の段数も低く、書架間隔も広げるなどの対策が必要となる。

■活用したい施設を図書館に転用

ここからは、少し既存施設から図書館へ転用するときに課題となることについて整理することにする。先の調査¹⁾によると、木造小学校を「曳屋（ひきや）」にて移築して一部改修した滋賀県の甲良町立図書館、明治期のレンガ造の紡績工場をリニューアルした兵庫県洲本市立図書館、旧陸軍のレンガ倉庫を転用した東京都の北区立中央図書館（図9）など、歴史的に価値の高い建築物をある程度コストをかけて保存活用している事例もある。



図9 東京都北区立中央図書館—外観と内観⁶⁾

また、国立国会国際子ども図書館は、基礎部分に免震装置をジャッキアップして挿入するという免震レトロフィット工法により、従前の壁で囲まれた空間的な特徴を残すように計画されている（図10）。



図10 国際子ども図書館—外観と内観⁴⁾

■書架の固定とレイアウトへの課題

先ほども触れたように、既存施設の庁舎や学校の床の積載荷重は230～280kg/m²だが、図書館の一般開架で500～800kg/m²程度、閉架書庫ならば1200kg/m²程度は必要である。しかし、コストを重視した転用のほとんどの場合では補強工事は行われないため、低書架を採用して書架間隔を広げるなど収蔵能力を減らして計画する必要がある。補強工事を行わずに転用する場合、図書の積載荷重のため新築や増築で計画するよりも書架を置くことができず、特に書架の段数が減るため収蔵能力が少なくなり、たとえ従前から面積が増えても収容冊数は変わらないこともあるので注意が必要となる。

群馬県の草津町立図書館は、役場の一角からバスターミナル駅3階の旧温泉資料館を転用して、資料館を併設した「温泉図書館」として移設された（図11）。書架が配置されるピッチ（間隔）を一般的な1800mmから2000mmに少し広げ、カウンターからの見渡しも考慮して、中置き書架の棚数は低く抑え、壁際の書架は少し高めに計画されている。

また、2011年3月の東日本大震災でも、転用で計画された図書館において床や壁への固定強度不足のため書架の倒壊が数多く報告されている。基本的には、地震時の書架の転倒防止のため床や壁に書架を固定することが求

められ、図書館への転用の際は専門家のアドバイスを受けて計画するべきである。



図11 草津町の温泉図書館—入口と内観

■一般開架室のオープン化への課題

近年の図書館では開架方式が定着し、公開書庫と呼ばれる利用率の下がった図書も開架するなど、一般開架エリアは面積が広がり、ワンルームの大空間として計画されるようになってきた。そのため、既存施設の躯体をそのまま使うのではなく、一部増改築を伴って今日的な図書館に近づける事例も増えている。



図12 潮来市立図書館—外観と増築した開架部分

学校からの転用だと教室ごとに耐震壁があるため、大きな開口を設けることができない。

そこで、茨城県の潮来市立図書館は廃校になった小学校からの転用だが、オープンな一般開架スペースだけ増築して、あとは耐力壁で囲まれた教室空間を閉架書庫や事務所部分として利用している例もある（図12）。

■既存施設の空間特性と施設サービスの確保

海外では製粉工場や複数の建物群をつなぎ合わせて図書館に転用した事例もあるが、日本では既存建物の空間的な特徴を活かし、新しい図書館像を作り出した転用事例はまだないといえる。

転用事例は増えているが、日本図書館協会が地域館クラスで推奨⁵⁾している床面積800㎡かつ蔵書5万冊を超える図書館は、約3割（26/91例）と少ない^{1、2)}。図書館未設置地域の解消、持続可能なまちづくりの観点からも既存施設を活用する必要はあるが、建物のストックがあるからといって、安易な転用は避けるべきであろう。

低い施設サービス水準では利用しようという需要も起こらないため、既存施設の空間的な特徴も加味しながら、増築などによる魅力を付加した施設づくりが必要である。

■増築によるニーズへの対応

浦安市立中央図書館（以下：浦安中央）は、各年代のニーズに対応した「増築」をすることによって、施設サービスの水準を確保し、貸出型サービスを保ちながら、滞在型の利用や課題解決型の利用を支援し、全国トップクラスの実績を維持している。

浦安中央は、1983年に開館している。1989年に「書庫の森」と呼ばれる開架書庫（公開書庫）が増築され、一般的な書架間隔の1.8mよりも少し狭い1.5m程度で計画され、端部には閲覧席が増設されている。この頃から、ビジネス支援などの課題解決型の利用へのサービス提供においても全国的に有名になる。

その後、休憩・飲食可能なラウンジが2006年に増築してオープンし、BDS内に飲食可能な休憩スペースが用意されることで、利用の選択肢も増えて、様々な滞在型の利用が館内

で展開できるようになった（図13）。

このように、図書館は作って終わりではなく、時代や社会の変化、ニーズの変化に増築で柔軟に対応すれば、施設のサービス水準を確保しながら、様々な図書館利用や学習活動が展開され、施設を長く使い続けることが可能となる。



図13 浦安市立図書館の内観
（上：書庫の森、下：ラウンジ）

■地域の記憶を残す

話をアクテノンに戻すと、アクテノンは配水塔として計画されているため、耐力には余裕があり、図書館としての転用にも十分に対応することができたといえる。

図2の断面図や図6の平面図から、当初は3階の心柱周りは吹き抜けて計画されているが、図7の図書館案内図のサインをみると、3階の中央部は床が張り増しされ、民族資料室として利用されている。また、今現在のアクテノンの様子を見てみると、2階部分にあった積層書庫は撤去され、また吹き抜けに戻されている（図14）。

アクテノンは名古屋市の都市景観賞を受賞しているが、重要文化財として登録され、保護されているわけではない。稲葉地公園内に計画され、駅前の都市開発地域からも距離があり、頑丈な建物であるがゆえに取り壊しも大変など、いくつかの要因が重なり、土木建造物が図書館や演劇練習館という文化施設として転用されて使い続けられている。

その際に、床を張り増し、壁を研って窓が大きくされるなど、その時々用途に合わせて、結構「手荒な」ことも行って図書館の機能性を保てたことも、長く使い続けられた所以かもしれない。

図書館は「記憶の倉庫」ともいわれるが、今も多くの地域の市民に使われているアクテノンをみて、地域の記憶を建物に残していくことも可能ではないかと考えた。子どもたちが自転車で遊びに来て、犬の散歩をしている人たちがベンチに座って談笑し、ダンス教室に通う子どもたちが旧配水塔に入っていく姿をみて、思わず「アクテノン、お前は幸せな建物やなぁ…」とつぶやいてしまった。



図14 アクテノン2階（2017年12月撮影）

参考文献

- 1) 日本図書館協会施設委員会編：「第28回図書館建築研修会 図書館建築を考えるー既存施設の転用事例を中心にー」、日本図書館協会、2006.11
- 2) 中井孝幸、植松貞夫、柳瀬寛夫：公共図書館における既存施設の転用に関する研究、日本建築学会大会学術講演梗概集、E-1、pp.115-116、2007.8
- 3) 名古屋市中村図書館編：「さようなら配水塔の図書館ー中村図書館25年のあゆみー」、名古屋市中村図書館、1991.3
- 4) 名古屋市中村図書館：「旧図書館サイン集'87-89」、名古屋市中村図書館、1989
- 5) 日本図書館協会町村図書館活動推進委員会編：「図書館による町村ルネサンス Lプラン21-21世紀の町村図書館振興をめざす政策提言」、日本図書館協会、2001
- 6) 今井正次、櫻井康宏編著、明石行生・中井孝幸・大月淳・吉田伸治著、柳澤忠監修：設計力を育てる建築計画100選、共立出版、pp.225-228、2015.4

（なかい たかゆき）

転用プロセスの 特徴と建物各部の 関連性

名古屋市演劇練習館 「アクテノン」

谷田 真

名城大学理工学部建築学科准教授

谷田 真

1971年 名古屋市生まれ

1995年 名城大学理工学部建築学科卒業

2003年 名古屋大学大学院工学研究科建築学
専攻博士後期課程修了

現在 名城大学理工学部建築学科准教授
博士（工学）

■中村図書館から演劇練習館へ

名古屋市中村区に建つ名古屋市演劇練習館「アクテノン」は、昭和12年（1937年）竣工の稲葉地配水塔を起源とし、昭和40年（1965年）に中村図書館へ、平成7年（1995年）に現在の演劇練習館へと二度の転用を経てきた建物である。当時は「スクラップ・アンド・ビルド」が全盛の時代にあって、建物をストックとして捉え、転用を繰り返した演劇練習館から学ぶべき点は多い。特に転用のプロセスを横断的に見ておくことは、デジタル技術を駆使して設計やマネジメントをする現在の業務環境においても留意する点があるだろうと考える。そこで本稿では、特に二度目となった中村図書館から演劇練習館への転用に力点を置きつつ、そのプロセスをシームレスに概観することで、建物の各部の関連性について整理したい。

■特徴的な外観

演劇練習館の特徴的な外観（写真1）には、配水塔としての機能がシンプルに構成され表出している。名古屋市西部地区の上水道供給を目的としたこの建物は、当初590㎡（既に供用開始されていた当時の東山配水塔と同程度）の容量を持つ水槽を地上20mの高さに設える



写真1 古代ギリシアの円形寝殿を想起させる外観

計画であったが、急激な人口増加による水需要の拡大が予測された為、途中、水容量が当初の約7倍となる4,000㎡に計画変更されている。この結果、規模が大きくなった直径33m、高さ10mの水槽部の支持を補強する為、その外周に高さ20m、直径1.5mの円柱16本を配することになる。これが、まるで古代ギリシアの円形神殿を想起させる特徴的な外観をつくることになる。ここに、要求された機能と構造、外観との関連性が見て取れる。

■特徴的なプランニング

水槽をモチーフにしたと思われる円柱という形は、特徴的なプランニングも生み出している（図1）。地上5階、地下1階の演劇練習館は、かつて水槽であった最上部に約400㎡のリハーサル室を、下層部に各室100㎡程度の大練習室5室、各室50㎡程度の小練習室3室、50㎡程度の和室1室と研修室1室を持つ。いずれの諸室も円という形から現出した扇形を基本としており、それらが重層する配置は建物外形との関連性を強く感じるとともに、シンプルな考え方のプランだと言える。

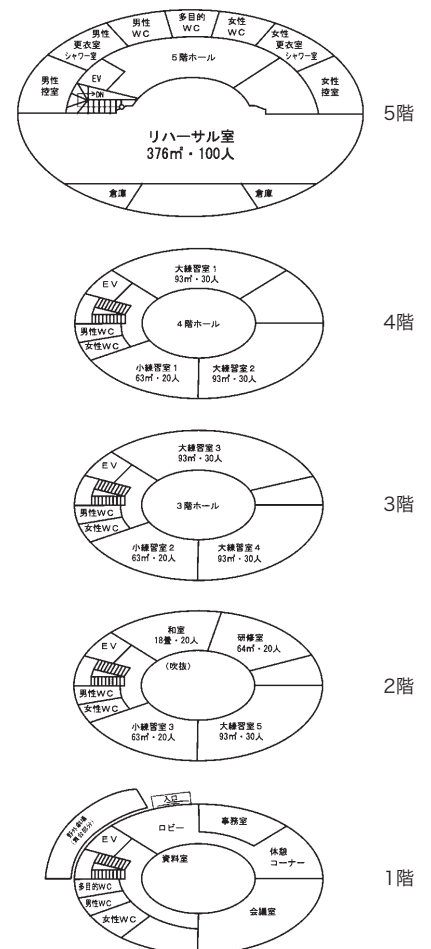


図1 扇形を基本とした特徴的なプランニング

■構造との関連性

配水塔というインフラ的機能を持った建物を、図書館や練習館という地域住民が集まるパブリックな建物に転用するに当たり、外壁に採光の為の開口部が取られ、吹き抜け部分に新たな床が設けられている（1回目となる配水塔から図書館への転用時は2階から4階に床が張られ、2回目となる図書館から練習館への転用時は2階から4階の床が撤去され、新たに3階と4階に床が張られる）（図2）。開口部は1階から4階部分に、厚さ30cmの壁をはつすることで窓としているが、構造的強度を担保する為、その数は最小限に抑えられている（図3）。耐震性への応答は床部分にも補強壁という形で現出しており、各階に均等間隔で配置された壁が上記で触れた扇形の各諸室へとシンプルに反映されている。

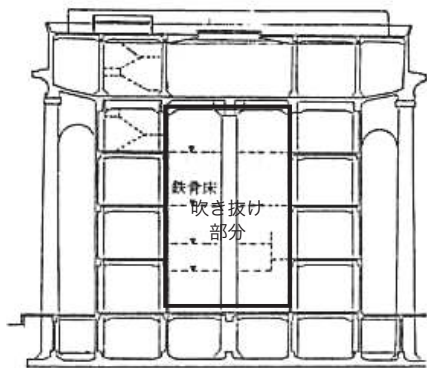


図2 転用時には中央吹き抜け部に床が設けられた

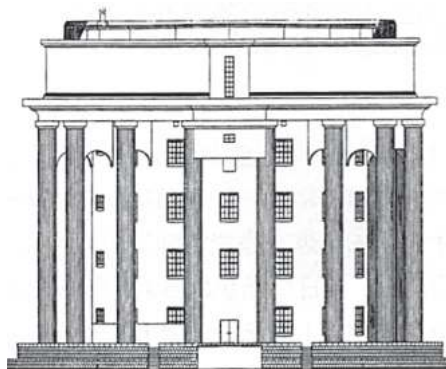


図3 壁の一部をはつすることで最小限の開口部とした

構造的補強により複数に分割された下層部の空間は、ピアノやバレエマットを備えた練習室、邦楽や日本舞踊の稽古に対応した和室、小道具や衣装の製作ができる研究室など、複数のキャラクターを持った諸室へシンプルに置き換えられている（図5）。これら諸室は、演劇、ミュージカル、バレエ、日舞、詩吟、ダンス、ピアノといったジャンルの団体によって高い稼働率で利用されるとともに、団

体のレベルアップを図るワークショップや地域住民が交流を深める場にもなるなど、必然的に生まれたシンプルな置換が、多様なアクティビティを生み出す結果となっている。また、最上部のリハーサル室も、平台、箱馬、 Horizont幕、袖幕、照明機器、音響機器を備え、本格的な稽古が行える場として需要は高い。水槽をこのリハーサル室へ転用するに当たっては、屋根スラブの一部を高くし天井高さを上げるとともに、柱を3本撤去し、代わりにその周囲の柱を補強することで、稽古舞台として必要となる気積を確保している（図6）。

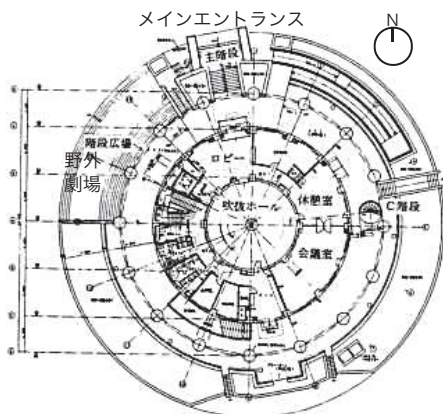


図4 演劇練習館1階平面図

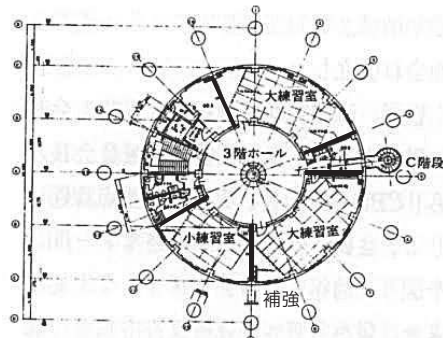


図5 演劇練習館3階平面図

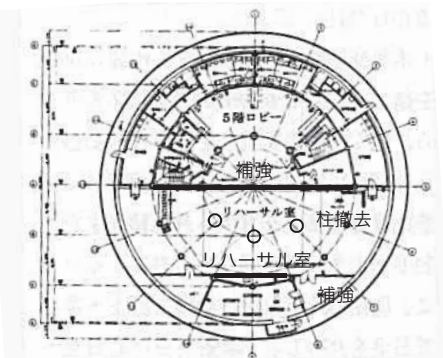


図6 演劇練習館5階平面図

■外部環境との関連性

演劇練習館の起源となる稲葉地配水塔の配置計画はいたってシンプルである。敷地周辺道路の位置をガイドにし、敷地内南側後方に引き込んだ南北軸と東西軸2本のラインの交

点上に建物中心がくるように配置されている（図7）。長手となる南北軸のライン上に1階メインエントランスが北向きに設けられ、円柱形の建物に正面性を作り出している（図4）。なお、練習館への転用の際には、1階外壁に接する形で階段状の野外劇場も増設されている。建物と外部環境との関連性は明快であり、そのバランスも良い。高さ30mを有す建物は、地域のランドマークとして地域住民からの認知度も高く、平成8年（1996年）には稲葉地公園と一体のものとして、名古屋市都市景観賞を受賞している。

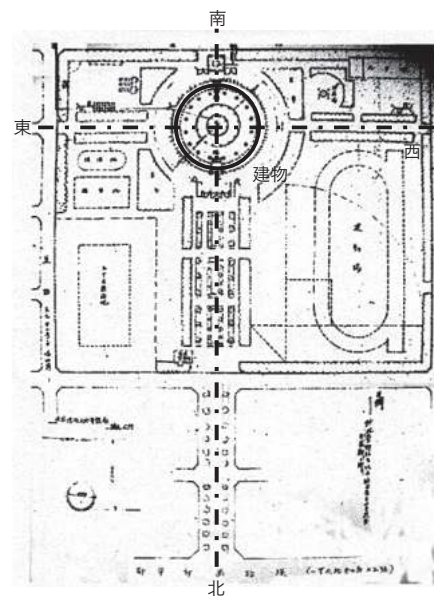


図7 敷地周辺と一体化した配置図（昭和12年当時）

■「複雑さ」と「単純さ」

以上、旧稲葉地配水塔が、中村図書館を経て演劇練習館へと転用されたプロセスを概観してきた。この中で筆者が感じたキーワードは「複雑さ」と「単純さ」である。建物各部は、転用時に、特徴的な外形という枠の中で、構造的な要求や性能的要求など、複雑に絡み合う与件と折り合いを付けながら、かたち作られていることが、本稿で改めて理解できた。一方で、そのかたちに至る考え方はいたって単純明快であり無理がない。故に関係者にとっても使いやすく、現在でも多くの地域住民が交流を深める場として機能しているのではなかろうか。建物を転用の際の大切な観点のひとつとして捉えておきたい。

（たにだ まこと）

写真＝筆者撮影

図1＝名古屋市文化振興事業団HP（www.bunka758.or.jp）抜粋

図2-7＝名古屋市演劇練習館蔵＋筆者加筆

アクテノンの眩き

～私はいき続ける～

加藤武範

(株)メックステクノ東海 取締役
日本建築協会東海支部副支部長

■<アクテノン>名古屋市演劇練習館

名古屋市西部の稲葉地公園内に真っ白で凛とした存在感のある円形の姿をみせる周柱型神殿が名古屋市演劇練習館である「アクテノン」です。愛称の由来ともなったギリシャのパルテノン神殿は小高い丘に建っていますが、公園周囲は配水塔、図書館時代には地名の「稲葉地」がしめすとおり田園が多かったようでしたが、現在は海拔1m前後の平坦な土地に住宅施設が立ち並んでいます。

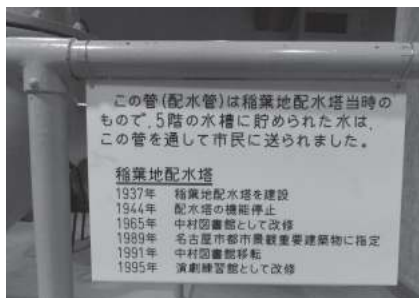
名古屋市中村区の発足と同時期に配水塔として誕生し築80年、配水機能廃止後に廃屋状態であった施設を図書館として、敗戦後50年の節目に現在の演劇専門稽古施設として2度目のリノベーションがなされました。

アクテノンへのアプローチは愛称を想起させるアクト（演劇）の花道ようであり、舞台への誘いを醸し出しているように感じます。配水塔時の水槽部である最上階は、音響や照明等の舞台設備が備えられたリハーサル室として、下部円筒内の各階はホールを中心としてしながらパームクーヘンの断面のような扇形の練習室や研修室等になっています。3階には建設時の配水管設備が残置され往時の名残を留めています。1階の自由に閲覧できる資料コーナーには、国内外の多くの戯曲、伝統芸能、映画等の資料が取り揃えられており、演劇団の企画展も随時開催されているようです。

■演劇者の情熱を笑顔でサポート

国内でも数少ない舞台芸術の練習施設です。現在、どれだけの劇団・舞台芸術関係者がいるのか知る由もありませんが、連日連夜に利用者が存在することに驚きを隠せません。

扇状の練習室は天井が高くのびやかで、使いくさもあるが雰囲気がよく、それが愛着に繋がっているようでもあり、パームクーヘンのように練習を一夜一夜重ねて厚みを増し、



配水管とアクテノンの記憶

演技も味わい深いものとなっていきます。

演劇関係者は優先利用予約ができ、複数の練習室、研修室等が低料金で、さながら社会人の部活動のように深夜まで利用できると好評を得ているようです。充実した設備を備えるリハーサル室は公演目前に活用する団体が多く、遠くは関東や関西の劇団にも利用されています。12室の練習室等は午前、午後、夕方、夜間の4時間帯で利用でき、90%を超える利用率が示すように多くの関係者に支持されていることが伺えます。

演劇専用練習施設という非日常的で、近寄りたがたい神殿には足元に野外ステージが設けられ、アクテノンと地域の人々との交流の場として、演劇への理解と裾野拡大のための情報発信に活用されています。現在も野外ステージを活用したアクテノンフェスティバルが毎年行われており、地域の文化拠点として確かな存在感を持っています。

■用途変更を伴った既存建築の活用

建築は個体と空間と機能で構成されます。パルテノンのような遺された世界遺産ではなく、設計者、管理者によるリノベーションの企画趣旨と運営姿勢が相まって、演劇人の好感を呼び、日々新しい空間として生き続けていくソフトシステムを備えた建築です。

既存の用途に縛られず、その価値を変化・活用し、新たな機能に呼応した多くの人々の手、知恵により空間が蘇り成功した好事例ですが、改めて舞台芸術のための練習専用施設の新たな誕生にも強く期待したいと思います。アクテノンの眩きが耳元にきこえてきます。～私はいき続ける！～ (かとう たけのり)



舞台への花道

加藤武範

1953年 愛知県生まれ
1973年 国立豊田工業高等専門学校卒業
1974年 日本電信電話(株)入社
建築設計、不動産企画開発担当
2000年 (株)NTTファシリティーズ入社
2010年 日本メックス(株)入社
2016年 (株)メックステクノ東海入社
現在に至る

納マリ倶楽部

東海支部青年部会における 30代前後の若手設計者の 意見交換会（第2回目）

開催日：2017年12月5日（火）

開催場所：日建設計名古屋オフィス
9F「sakae-BA400」

出席者：

塩田哲也（委員長）

日建設計 設計部門 設計部

中井孝幸（副委員長）

愛知工業大学工学部建築学科 教授

久保久志

東畑建築事務所名古屋オフィス 設計室

三宅伸幸

安井建築設計事務所名古屋事務所 設計部

鈴木豊一郎

日建設計 設計部門 設計部

小杉嘉文

竹中工務店名古屋支店 設計部

佐藤 剛

大林組名古屋支店 建築設計部

石橋洋二郎

伊藤建築事務所名古屋事務所 設計部

■納マリ倶楽部とは

納マリ倶楽部は、日常的な会社での業務から離れて、建築のディテールの本質について考えることを企画し、2017年9月日本建築協会東海支部に所属する組織の30代前後の設計者が集まって活動が開始しました。

建築作品の中には、設計者の思いが示された新たな構法等を開発した作品があります。設計者の思いに触発され、メーカー関係者や施工者は、図面の真意を汲み取りながら建築作品を完成させています。

今、建築界の垣根を広げる集まりは、多くありますが、日本建築協会は設計事務所のみならず、施工会社やメーカー関係者といった建築を供給する立場を横断した方の集まりです。

建築作品そのものに目を向け、建築のディテールを通して、30代前後の若手設計者の横のつながりをつくることを目的に、9月11日（月）に第1回目の顔合わせミーティングを開催し、年4回程度（ワンシーズンに1回）で、内1回は現場見学を兼ねたものとするのが決まりました。

そこで、第2回目は、メンバーの自己紹介も兼ねて、5～10分程度の各メンバーがスライドを作成・発表し、ディスカッションを行うことになりました。初回なので、ディテールにとらわれず、自分の関心事等についてもよいということで、参加メンバーが発表を行いました（写真1、2）。



写真1 納マリ倶楽部での発表
（日建設計名古屋オフィス）



写真2 納マリ倶楽部の集合写真
（日建設計名古屋オフィス）

今回は、この第2回目で各自が発表した内容を掲載しますが、今後はこうした活動を定期的に報告していきたいと思います。

1. 地域材による木造校舎づくり

東畑建築事務所：久保久志

普段は公共施設、特に小中学校の設計が多く、「利用者と一緒に考え・つくり・使う学校づくり」が設計テーマの一つです。この作品は、愛知県新城市旧作手村に建つ、地区4校の統合校である木造平屋建ての「作手小学校」、地域の活動拠点となる「つくで交流館」からなる複合文化施設です。

施設づくりにおいて、市有林をいかに有効に使うか、複合する施設をいかに豊かに使われるようにするか、を大切にしました。外観デザインは、周辺の山並みになじむ切妻屋根、高さを揃えた深い軒先、地域材で設えた杉下見張りの木壁とし、豊かな自然環境になじみながら、地域と子どもたちの活動が映える、簡素でシンプルな表現を心掛けています。みんなで給食を食べる習慣を継承し大切にしたいランチルームは、円錐を切り取ったシンボリックな形態とすることで、群建築のランドマーク的な存在となるようデザインしました。

平面計画は、中庭を囲むように小学校と交流館が共有する室を配置することで、日常的に地域と子どもたちそれぞれの活動が垣間見え、賑わいが伝わりあう計画としています。



中庭をぐるりと囲んで向き合う小学校と交流館



柔らかな間接光がそそぐ普通教室

普通教室は中庭から離して配置することで、落ち着いた学習・生活環境を確保し、教室に面して設けた土間を児童の出入口にすることで、家の玄関のような設えとしました。

構造計画は、新城市産材の杉・松材をいかに構造材として有効に使うかにチャレンジしました（構造木材使用量は約600㎡）。普通教室棟及び特別教室棟は在来軸組工法の木造とし、体育館棟、ランチルーム棟及びついで交流館は、大空間、遮音性、防耐火計画等による条件を考慮して、鉄筋コンクリート造及び鉄骨造との混構造を選択しています。

「納マリ」という言葉は、ハード的な納まりを指す意味合いが強いですが、「しっくりくる」という意味合いでとらえると、今回の学校づくりは自分にとって、利用者との関係、木の使い方・見せ方、複合施設のあり方、とても「納マリ」よく作れたんじゃないかなと思っています。（くぼ ひさし）

2. 納マリ倶楽部での活動の、 その先に得たいもの

安井建築設計事務所：三宅伸幸

実務に携わって12年目。目の前のプロジェクトに対し、その都度、精一杯取り組み、その都度訪れる納まりの課題に対し、精一杯の検証を重ねてきたように思います。こうした積み重ねが、いつしか自身にとっての原型や形式となり、現在に至っている気がします。

一方で、こうした原型や形式が、自身にとって納まりの新たな展開や発展を阻害しているのではないかと。期限や作業に追われる日常において、それらに甘え、生産的で能動的な態度が不足しているのではないかと。そんな危機感が、常に胸の内に潜んでいます。



あいち小児保健医療総合センター外観

子どもを対象にした施設や病院建築を多く経験しており、直近の竣工作品である「あい

ち小児保健医療総合センター救急棟」を紹介しました。小児の専門科を集約し、子どもの療養環境に配慮した小児総合病院で、2003年に竣工した既設本館と、機能的・意匠的に一体感のある増築を目指したものです。救急・手術・集中治療といった高度医療を担う、万全で最先端な診療環境を用意すること。子どもが安心して医療を受けられる療養環境を用意すること。相反するようなプログラムにおいて、建具の納まりに照射して、前者は集中治療病床のT型平面召し合わせ建具、後者はプレパレーションに結びつくアートワークのキャンバスとなる建具枠を紹介しました。



アートワークのキャンバスに配慮した建具枠

自分自身の発表に伴う質疑応答や他の方の発表や議論を通して、多くの刺激や新たな視座を得ることが出来ました。優れた納まりには、設計者の熱意や努力が内在しますが、その根底には、設計者自身の思想や信念が潜んでいます。こうした思いに触れ、自身の思いと相対化し、納まりの新たな展開や発展に期待が持てる有意義な時間となりました。

部分と全体、平面と断面、中心と周縁、序列と並列、フランクとフォーマル。多様な納まりの世界を多様な次元で議論して、参加者みんなで納まりの多様性を幅広く現前させたい。そう強く思い、願った機会となり、次回以降の開催が楽しみです。

（みやけ のぶゆき）

3. 最近ハマっている事と設計PJ

日建設計：鈴木豊一郎

先に発表した久保さん、三宅さんがちゃんとした建物紹介でしたので若干焦りましたが、同世代の建築仲間とこれから長い付き合いになると思いますので、まずは自分を知ってもらうと、育ったバックグラウンドと設計してきたプロジェクトの紹介です。

生まれは愛知県西尾市、海も近く自然豊かな環境で育ったせいか、外でワイワイ遊ぶ事が好きで（小学生みたいです）、最近特にハマっているのが、キャンプとゴルフです。道具を選ぶのも楽しく、時間を作って友人と出かけています。道具を選ぶ際の判断基準である長く使えるというポイントは、自分が建築ディテールを考える際にも通じるところがあるように思います。もう一つ、子供の頃から続いているのが釣りで、最近は子供と三河湾を転々としており、釣り場のポイントをおまけで紹介しました。

設計建物については、これまで設計した建物をざっと紹介です。大学を卒業し、自分の理想の建築を実現させるためには、まずは実務を身に付けたいと思い入ったアトリエ事務所で担当した木造・鉄骨造・RC造の住宅や診療所。現場で職人さんと一緒にコンクリート打ちをし、大工さん、左官さんから色々教えてもらいながら実務の基礎を築きました。その後、日建設計に入り、名古屋オフィスで担当した様々な用途の中規模、大規模プロジェクト、2010～2014年までは東京オフィスで担当した超大規模の中国プロジェクト、2014年～名古屋オフィスで担当したプロジェクト、合わせて25件を改めて振り返り、これまで自分がどのような視点でディテールを考えているかキーワードを挙げ発表としました。

今後、納マリ倶楽部が定期的に開催されることとなり、新しい仲間とより広い視点で深く語り合うことを楽しみにしています。

（すずき とよいちろう）

4. ディテールを巡る活動

竹中工務店：小杉嘉文

私は普段、社内全店の設計竣工作品の中から優れた建築のディテールに注目し、現地の見学を行ないながら、図面と写真、テキストを編集して設計者に展開する社内の委員会活動を行なっています。この活動の特色は、作品の部分を抽出して評価を行なう点と、何より設計者同士で共通の課題を見出しながら、より良い方策へと近づいていける点にあります。これまでにない全く新しい造形を生み出すためのディテール、構造や設備設計との融合、省人化やコストの低減、地域特性やシ

ミュレーションによって導かれた条件下で作成されたものなどディテールをつくり出す原動力はそれぞれですが、精緻なディテールからはいずれも設計者の作品に寄り添う想いや執着を強く感じられます。

また、ディテールの考察には、計画を取り巻く個別の複雑な外在的事情が深く入り込まない一面もあります。編集に携わり、提供された図面を読み解くとき、その設計者独自の密かなこだわりや愉しみを共通言語として見出せるのは、貴重な経験として、私の日々の設計業務を支えるモチベーションに大きく影響を与えています。

今年の4月で名古屋に赴任して12年目になります。担当した作品も10を超え、経験の蓄積と共に、地域社会への視野も持てるようになってきました。これから本格的に活動がスタートする「納まり倶楽部」は「建築のディテール」に限定するものではありませんが、様々な条件下で日々設計を行なっているメンバーが集まる目的として、ディテールは格好のテーマになっていくと考えています。今後「納まり倶楽部」を、東海地域色を持ちながら、設計愛好者としての愉しみを共有するためのサロンのような居心地のいい場所にしたいと思っています。

(こすぎ よしふみ)

5. 「シンプル」な「納まり」を

大林組：佐藤 剛

私はディテールの検討を行う際には、シンプルな納まりとなるよう心がけています。それは物が実現するプロセスにおける、施工管理者、メーカー、そして職人さんに至る様々な立場の人たちを意識しながら、設計者のエゴを押しつけるのではなく、必然性のある無駄のないディテールであると認識してもらう必要があると感じているからです。現在の会社に入社して7年が経つ今、それぞれの立場で考えるシンプルさとは少しずつ異なる意味合いを持っており、それらの意見がぶつかり、整理されていくプロセスがディテールの決定において重要であると考えようになりました。私は時に、シンプルに“見える”納まりに執着する時があります。物と物、素材と素

材の取り合いが自然に見えるようにと意識するあまり、納まりとしては複雑になってしまった場合がこれまで多々ありました。その時には実現したいイメージに対して、施工管理の立場から見た時のシンプルさ、メーカーの立場から見た時のシンプルさ、それぞれの視点から見たシンプルさを意見・ヒントとして取り入れることで、ディテールの実現に近づけてきました。当初考えていたディテールが洗練され、漠然としたイメージが一つの形として実現する様は、建築設計の醍醐味の一つであると考えます。結果としてのディテールは書籍等でも勉強することは可能ですが、そこに至るまでの設計者としての苦悩やプロセスについて知ることは、直接設計者の口から語る機会がなければ知りえない貴重な情報です。

「納まり倶楽部」は、結果としてのディテールを語る場だけでなく、プロセスを含めて意見を交換し合える場となることを期待しています。「シンプル」な納まりを実現できる設計者となるため、東海地方における活気に満ちた横のつながりを形成できるよう積極的な姿勢で参加して行きたいと思います。

(さとう たけし)

6. 納まりの『楽しさ』

伊藤建築事務所：石橋洋二郎

先日初めて参加させていただいた納まり倶楽部は見るもの全てが刺激になりました。

私は普段からあまり他設計事務所と関わる機会が少なく、更には倶楽部の趣旨も良く聞かされずに出席することになり、始まるまでは半ば不安を抱いて参加しましたが、いざ始まると先輩設計者の皆さんの様々な設計に対する考えや納まりにふれることができ、非常に有意義な時間を過ごすことが出来ました。

思えば、大学時代のある設計課題の授業の際、当時の非常勤講師をしていた先生が「設計は納まりを考えるのが楽しいし、やりがいがある」とおっしゃっていたのを強く覚えています。その当時、建築を表面でしかとらえていなかった私は「設計はコンセプトが第一であり、いかにコンセプトでインパクトを与えられるかが重要な気がするけどなぁ。コンセプトがよければ納まりのような小さな所にはそれほど熱意を持ってこだわらなくてもよ

いのではないのかなぁ」と心の中で思ったものでした。

その後、設計事務所に勤めて8年以上が経った現在、納まりの『楽しさ』という言葉が今ではよくわかるようになりました。もちろん設計を進める中でコンセプトが重要なのは当たり前ですが、そのコンセプトを崩すことなく成り立たせる為の納まりがその裏で重要な役割を担っていることも同時に理解しました。さらには、納まりの中にも見せるため・見せないための納まりなど様々な目的をもつ納まりがあることも理解できました。

私がこれまでに設計に携わった業務の中にも、設計図通りに現場が進まず現場所長から相談された経験があります。現場でスケッチを描いて納まるように修正を行いますが、それで寸法変更を余儀なくされたこともあり、その都度「もっと納まりを正確に詳細に考えておくべきだった。もっと多様な納まりに関する知識を身につけたい」と心に強く感じます。

大きな目で見ると、たかが数ミリ、数十ミリのこともかもしれないが、そこにこだわりを持って時間を費やすことができることが設計者の特権であり、楽しみだと今では考えるようになりました。

今後この倶楽部の集まりが回を重ねる中で、様々な納まりに触れ、さらにはそれを吸収して自分の今後の設計にも生かしていきたいと思っています。

(いしばし ようじろう)

7. 居場所としての図書館について —公共図書館と大学図書館の利用調査から—

愛知工業大学：中井孝幸

皆さんと異なり、大学で研究を行っているので、今日はそうした研究の内容をお話したいと思います。20年ほど図書館に関する研究を行っていますので、今日は公共図書館や大学図書館でのアンケート調査や行動観察調査の結果をご紹介します。

「場」としての図書館について

公共図書館は、貸出利用型から滞在利用型、そして課題解決型へ向かおうとしています。大学図書館も個人利用だけでなく、グループ利用できるラーニング・コモンズが整備され

ています。どちらも「場」としての図書館に関心が高まり、多様なサービスが提供されるようになってきました。

公共図書館の館内での滞在の様子を10分毎に観察した巡回プロット調査を連続してアニメーションでみると、比較的に頻繁に動き回っていること、どこかに集中するのではなく隅々まで分布が広がっていることが分かります（図1）。

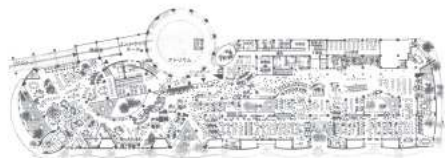


図1 公共図書館（田原市中央図書館）の全体プロット

子どもたちの座席選択と家具レイアウト

子どもたちの座席選択には、書架や閲覧席などの家具レイアウトが大きく影響していますので、事例を紹介したいと思います。

書架と閲覧席が並行していると、書架間から閲覧席の様子がみえず、書架連数も7連だと閲覧席へ回り込まず、その場にしゃがみこんで本を読んでいた。一方、書架と閲覧席が直交していると、書架間から閲覧席の様子が見え、書架の連数も5連と短いと閲覧席へ移動して本を読んでいた。

児童開架では表紙見せ（フェイスアウト）や書架高さだけでなく、書架全体の幅（連数）、書架の向き、閲覧席への近さや見渡せるかどうか、子どもたちの居場所選択に影響を与えているため、注意が必要です。

学習環境としての「場」の段階性

大学図書館でも同じようにアニメーション化すると、書架のあたりに分布は少なく、閲覧席に集中しています（図2）。学生たちは、閲覧席で図書は利用していますが、借りのために書架で図書を探さないため、公共図書館よりも着座している割合が高いと考えられます。



図2 大学図書館（明治大学和泉図書館）の全体プロット

また、大学図書館は圧倒的に個人利用が多く、開架閲覧室は個人利用が約7割を占めますが、グループ利用が前提のラーニング・コ

モンズでも個人利用が約7割を占めています。つまり、個人利用でも一人で集中できる場所、皆の姿が見える席、ワイワイと賑わう中など、様々な「場」を選んでいるといえます。グループ利用も同じように、自分たちの学習活動に合わせて、場所を選択しています（図3）。これから図書館の計画を立てるときには、こうした様々な利用ができるように、様々な「場」を用意する必要があるといえます。今後はもう少し、座席の種類なども組み合わせ、研究を重ねて行きたいと思います。

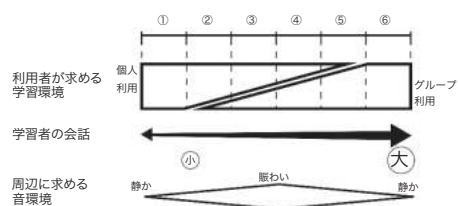


図3 大学図書館の学習環境における「場」の段階性

（なかい たかゆき）

8. 今後の活動に寄せる期待

日建設計：塩田哲也

納まりが建築の出来栄を左右するということは、建築設計を始めてすぐに実感することで、私も全体のデザインと各部の納まりは常に一体で考えています。建築のデザインはそもそもそういうものだと思います。

私は入社し20年経過しましたが、担当したプロジェクトはこれまでに40件が竣工しました。

前半の半数は、主に先輩の指導を受けて仕事を進めていったプロジェクトといえます。その後丁度皆さんくらいの年齢で職位も変わり、以降は、私がリードして設計をまとめるようになりました。自ら責任をもってクライアントと向き合い、もの決めをし、デザインした建築。誤解を恐れずに言うと、私の作品だといえるのは後半の約半数の建物です。



リニア・鉄道館外装

当然、それらについては、設計内容に自分の思い入れや、こだわりが強く反映されていますし、納まりについても同様です。そしてそれらを実現するための苦労も含め、充実感のある良い思い出があります。

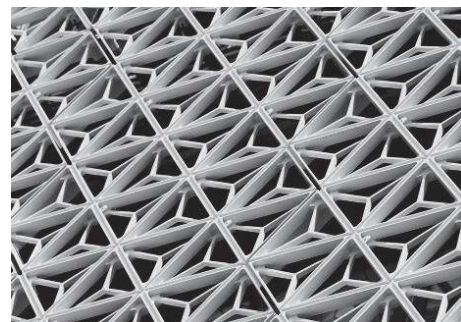
皆さんは各社で設計チームをリードして多くの役割を担い始めた時期だと思いますが、私がそうであったように、これからが真に設計にやり甲斐を感じ、興味深く楽しいと感じられる時期ですので、一つ一つを大切に取り組んでいってほしいと思います。

私もこの納まり倶楽部で、皆さんとそれを分かち合い、刺激を受け、またヒントを得ながらスキルを高めていきたいと考えています。

当日は長時間にわたり皆さんの発表を拝聴しましたが、それぞれに育ってきた環境の影響を感じさせる持ち味や独自の視点が含まれており、実に興味深いものでした。一方で設計実務をしてきた立場として、共感できる、あるいは共通した価値観なども所々に確認でき、安心をしました。今後の活動が楽しみとなりましたし、納まり倶楽部を価値ある場に育てていきたいと感じましたが、皆さんも同様なのではないのでしょうか。

さて、今回の内容ですが、各自気になるディテールの情報を持ち寄りたいと思います。過去の実作の紹介でも、今考えている納まりについて皆の意見を聞いてみるのもよいと思います。ただし意見交換するためテーマがあった方が進めやすいと思うので、切り口を①考え方が新しい納まり、②通常より美しい納まり、③コストダウンを図った納まりに整理します。

あと、雑誌掲載された話題の作品について、納まりという観点で読み解き合う等、ワーク的な時間もあると良いですね。



岡崎信用金庫名古屋支店外装

（しおた てつや）

空港敷地内に建つミュージアムにおける大扉 あいち航空ミュージアム 愛知県西春日井郡豊山町

安井建築設計事務所
清水 満・西野培夫・築谷朋也

あいち航空ミュージアムは、県営名古屋空港敷地内に建設され、YS-11を中心とした実機を展示し、本物の航空機を身近に感じてもらうことのできる施設である。空港内という立地を活かして、展示物となる航空機を駐機場（エプロン）から直接出し入れできることが大きな特徴となっており、格納庫のような大扉がエプロン側のほぼ全面（約70m）に渡って取り付けられている。その半分ずつを開放できる扉割りとしており、有効開口幅は約35mである。

大開口を設ける本体骨組は、45mスパンの大空間を鉄骨組柱と組梁（4本のH形鋼の弦材（400mmサイズ）とアングルのラチス材（75～130mm）で構成している。これだけの開口を設けつつ、上部には展望デッキ、屋根下には小型機4機程度を吊り下げ展示可能のように設計されている。

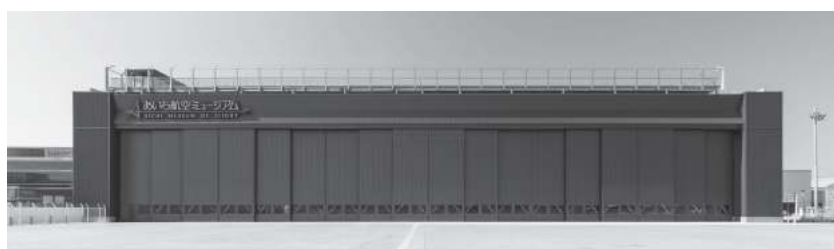
大扉は、開ける頻度が非常に少ない想定のため手動としており、一人でも動かせるよう一枚当たりの大きさはW4,580×H12,000×D250で、重さは約3.5tとした。扉外装は壁と同じ角波鋼板、室内側はミュージアムという施設特性を考慮し、吸音性を期待してグラスウールt50ガラスクロス張りとしている。

また、扉のすぐ向こう側に広がるエプロンを望めるガラス窓を、子供でも見えるよう出来るだけ低い位置に設け、空港をより身近に感じてもらうようにした。この大扉は空港制限区域の境界線を形成するものでもあるため、窓は嵌め殺しとし防犯ガラスを採用している。そのほか、中央の2枚の扉の上部には、実機展示スペース中央辺りの排煙のための窓を組み込んだり、南端の扉には、避難用に電気錠付きのW850×H2100ドアを組み込むなど、格納庫とミュージアムの機能を併せ持った扉となっている。

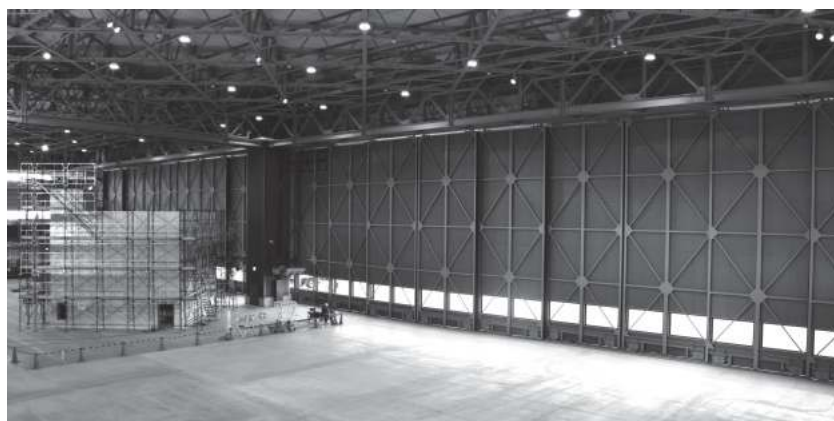
扉の建て込みは骨組みの状態では、クレーンが航空法の高さ制限に触れないように慎重に行われ、扉の内外装や窓の取付けは建て込み後に行われた。



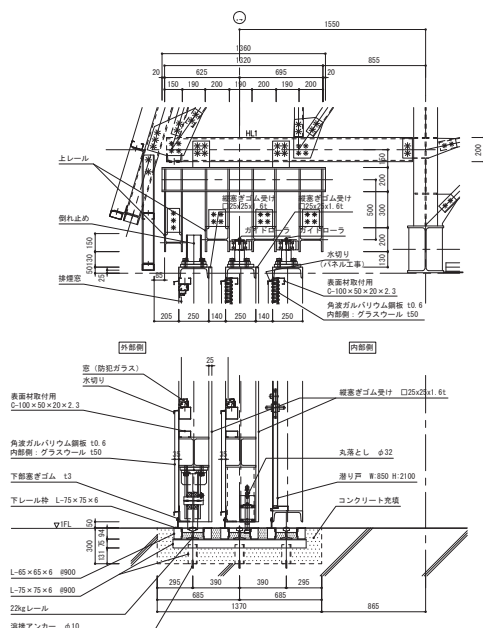
YS-11も搬入された大開口



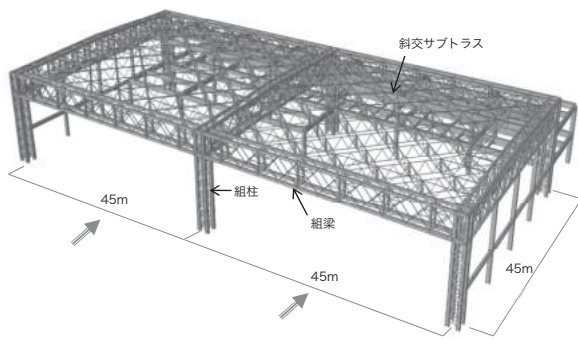
大扉外観（エプロン側）



大扉内観（コンテンツ工事中）



大扉断面詳細図



主要架構のアイソメ図



扉の建て込み作業

内外からの機能を併せ持つ外装スクリーン

岡崎信用金庫 名古屋支店

愛知県名古屋市

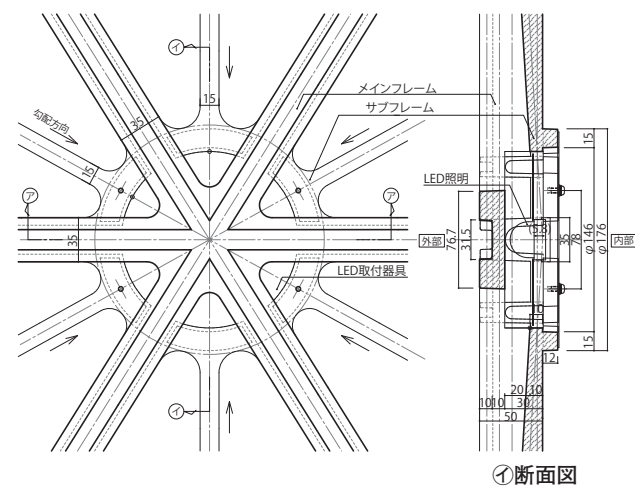
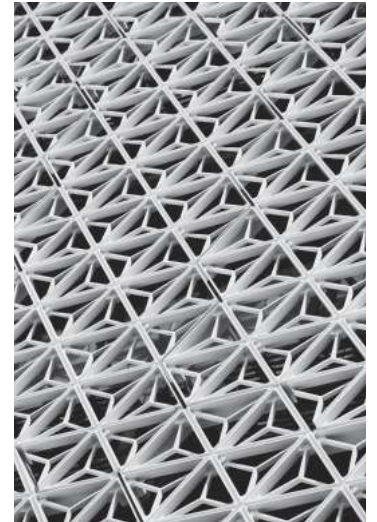
日建設計

塩田哲也・片桐雄歩

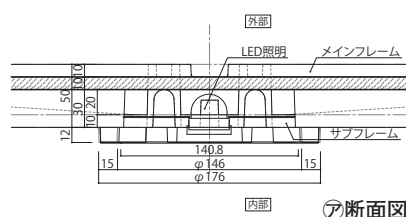
本建物は歌舞伎演芸場を中心とした観劇街に構える、岡崎信用金庫の名古屋拠点ビルである。地域性から伝統ある街並みとの調和を主軸とした開口部計画を行った。

3階～7階の南・西面に設置されたアルミキャストスクリーンは、伝統和柄である「麻の葉模様」をモチーフとしている。「麻の葉模様」の中心一つ一つには、計1,612灯（南面：992灯、西面：620灯）のフルカラーLED照明が、メインフレームと繊細なサブフレームの交差部分に組み込まれており、サブフレームに僅かな傾斜を設けることで間接的に光を受け、柔らかな光が面状に拡散する計画としている。LED照明は個別で制御することにより、様々なアニメーション演出を可能とした。インテリア側からは、夏場の強い日差しや西日を遮るとともに、周辺オフィスビルからの視線を遮ることで、プライバシーを確保する役割を果たしている。

アルミキャストスクリーンは、建物開口部からクリアランスを持って設置することで、「麻の葉模様」に奥行きを与えると同時に、窓面やLED照明のメンテナンスを容易に行える計画とした。

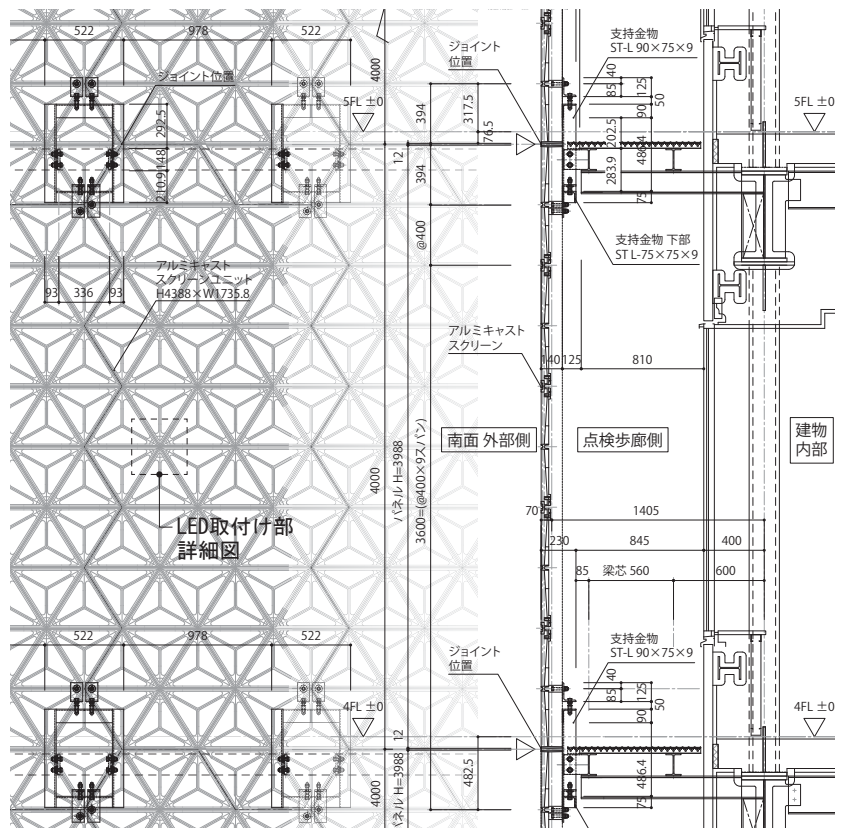


①断面図



②断面図

LED取付け部詳細図 1/6



アルミキャストスクリーン廻り詳細図 1/50

まちに開放された無柱のガラス空間

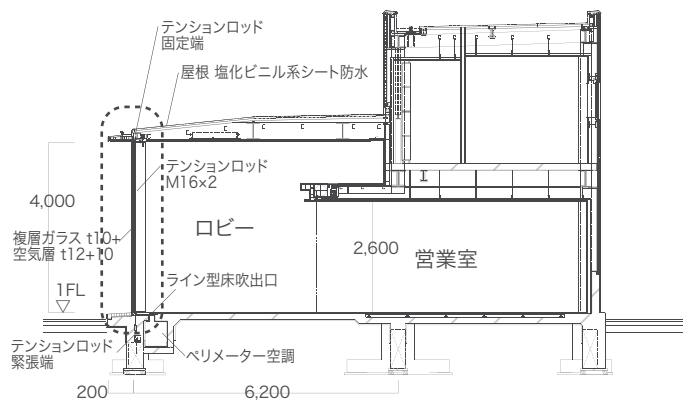
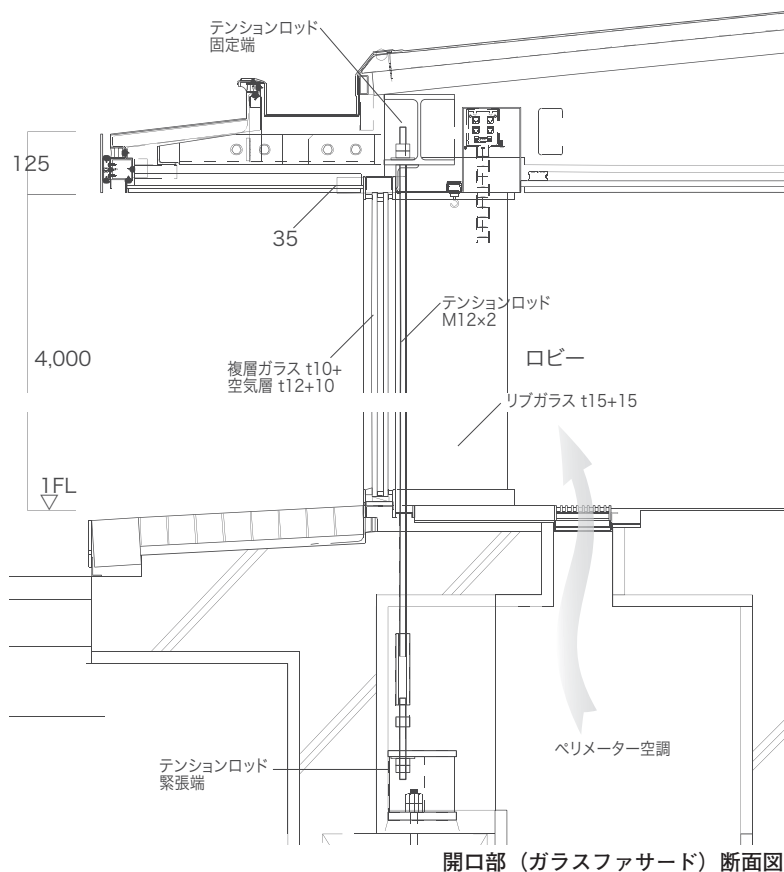
岐阜信用金庫春日井市役所前支店

愛知県春日井市

竹中工務店

中屋隆史・吉田 敦

街に開かれた銀行支店の来客スペースを目指し無柱のガラス空間を計画した。背部にワンスパンの主構造が配置され、そこから約6mのキャンティレバーを出して軽快な屋根（庇）を構成した。この片持ち構造は床と庇をM12のテンションロッドでつなぐことにより短期・長期の荷重変動に対応し、上下変位をおさえることで、リブガラスによるガラスのみのファサードを完成させた。屋根の変位及びガラスの層間変位をガラス上枠の35mmエッジクリアランスで吸収している。



清里・茅野見学会 旅行記

2017年10月8日（日）～
10月9日（月・祝）

平松佳奈

(有)堀内建築研究所

■一日目：八ヶ岳・清里へ

10月8日午前8時秋晴れの中、名古屋を出発し八ヶ岳へ。

はじめに女神の森セントラルガーデンを訪ねた。

施設の方、設計担当者の方の案内で館内を回りながら設計・施工段階での話を伺った。一般では入れない裏方も見せて頂き貴重な見学をさせて頂いた。

館内を巡ってみると、敷地に入った時に思った建物の規模より広く、ゆったりとした空間が広がっていた。その秘密は敷地の傾斜を利用した建物配置と周囲の木々によって程よく建物が隠されていることによるようだ。さらに、木々の影を表現したという森綾模様が建物外壁に表現され、建物を周囲の木々の中に溶け込ませていた。

次回訪れた際には併設されているカフェを利用して、木々の影が映り込む空間を存分に味わいたいと思う。



女神の森セントラルガーデン

その後、中村キースヘリング美術館、八ヶ岳ロイヤルホテルの星と森の教会を見学した。星と森の教会は、木のフレームにガラス張りの建物。連なったフレームの間から自然光が入り込み、柔らかな空間となっていた。ホテルの方の話では、夕方からの式を行い星空の中挙式を行うのが人気とのこと。見学したのは日の出ている時間で星空の中の見学はできなかったが、星空の中に佇むチャペルも見たいと思った。

本日の最終見学地であり、宿でもある清里自然の森山荘へ。以前は竹早高校の林間施設であった建物で、吉村順三氏の設計。現在は卒業生の方たちによって運営され、一般の人でも泊まることができる。

夕食は食堂にて参加者全員で頂いた。夜になり寒くなってきたので、食堂にある暖炉に



清里自然の森山荘 食堂内暖炉

火を入れて頂いた。火にあたる暖かさを感じながら、美味しい料理に舌鼓をうちお腹も心も満ち足りた気分を味わう。

計画時の設計図を見せて頂きながら、林間施設として利用されていた当時の管理人氏の話聞くことができた。これまでの経緯、これからの思いを聞き、これからも長く大切に使われていて欲しいと強く思った。

■2日目：八ヶ岳から茅野へ

2日目の見学は星野リゾート・リゾナーレ八ヶ岳、次に清春芸術村を散策した。

芸術村内には様々な建物があったが、中でも私の印象に残っているのは光の美術館だ。

光の美術館内には作品を照らす照明がなく自然光による明るさで展示されている作品を鑑賞する。見学した日は天気も良く建物に入り込む光も鑑賞する対象に思えた。建物の構造も観る者の立つ位置により見え方が大きく変わり、館内を回りながら変化する見え方を楽しんだ。

また、芸術村内を案内して頂いた方の解説も楽しく思わず笑ってしまった。

昼食後、茅野市民会館を見学、次いで藤森照信氏設計の神長官守矢史料館・高過庵・低過庵・空飛ぶ泥舟を見学。

高過庵のすぐ脇に、新たな茶室低過庵が建築されていた。建物が地中に半分埋まった構造で、入り口は屋根部分に設けてあることが分かったが、中の構造を伺うことはできなかった。2017年に完成したばかりとのこと。銅板葺の屋根がキラキラと輝いていた。次回は中を見学してみたい。



高過庵・低過庵・空飛ぶ泥舟

最後に、見学先の皆様及び今回この見学会を主催して頂いた幹事の皆様に感謝申し上げます。
(ひらまつ かな)

2

清里・茅野建築の旅

塩田有紀

塩田有紀建築設計事務所

2017年10月8～9日、「清里・茅野建築の旅」が東海支部主催にて開催された。

ご縁あり、会員外の私も参加させていただき、充実した見学の機会となった。旅程を下記に紹介させていただく。

■10月8日（日）

JR名古屋駅に集合後、翌日の解散までバスにて移動。

- ・女神の森セントラルガーデン（竹中工務店設計担当大石氏による作品紹介）/設計：永山祐子建築設計+竹中工務店
- ・中村キースヘリング美術館/設計：北川原温
- ・ハケ岳の教会/設計：アトリエKUU+戸田建設一級建築士事務所

・清里自然の森山荘（宿泊）/設計：吉村順三

■10月9日（月）

- ・清春芸術村/設計：谷口吉生他

・星野リゾート・リゾナーレハケ岳/設計：マリオ・ベリーニ+IAO竹田設計、クライン・ダイサム・アーキテツ

・茅野市民館/設計：古谷誠章+NASCA+茅野市設計事務所協会

・神長官守矢史料館・高過庵・空飛ぶ泥舟/設計：藤森照信

特に印象的であった2作について感想を述べたい。

清里自然の森山荘/吉村順三



宿泊後、思い思いに庭を散策する参加者

東京都立竹早高校の寮として建設され、現在は卒業生を中心として有志にて運営されている山荘。

夕食後、東京から通って宿を管理する岩田さんから、この建築の歴史や現状についてお話を伺う。予算の制約から吉村氏の思いの全ては建築として具現化されておらず、改装も重ねられており、作品性は低いという意見もあると聞いた。しかし「ここにあるべき建築」としての強い存在感は、「いい建築」以外の何物でもない。改変されても作品としての強度が保たれる建築の要点とは何か、考えさせられる。一方、愛される存在を眺めるというのは建築によらず心地よいのかも・・・例えば街角で犬が撫でられている風景と意外と似ているのか、どうなのだろうか。

星野リゾート・リゾナーレハケ岳/マリオ・ベリーニ+IAO竹田設計 クライン・ダイサム・アーキテツ

1992年に開業、2001年の星野リゾートによる再生を経て、再び賑わいをみせるリゾートホテル。

新築当初のベリーニのデザインは重厚で大柄、一方増築・改装部分のクラインダイサム側は、軽快で繊細な持ち味。一見、リゾート

ホテルとしての非日常感以外に何の共通項も見出せないのだが、敷地全体を歩くと不思議と一つの体験としてしっくりきている。

新建築2005年12月号によれば、星野リゾート星野社長がリゾナーレの再生にあたり『ベリーニが当初意図した「中世の山岳都市」という発想』が活かされていないことを問題視、『当初意図したであろう空間の実現』（ソフト含む）をテーマとしたとある。（『』内誌面引用）

思い返すと、増築された各部分が家具的なスケール感と親しみやすさを持つ様、素材やヴォリュームが注意深く調整されていることに気づく。一方形態は自由度高く個性的で、全体が生き活きとしたまとまりある場として再生されている。景観条例など具体的なデザインコードで新規部分を縛り全体を整えていく手法とは対極の在り方だ。大学のキャンパスなど複数の建築で構成されるプログラムから小住宅の改装まで、様々な規模の計画に応用の効く発想ではないだろうか。この状態に帰結するまでにどのような議論があったのか、非常に興味深い。



鏡面仕上で建築のヴォリューム感を消した増築部分のブリラーレ

日本建築協会のイベントに参加して

今回初めて参加させていただき、お互いへの敬意を感じる自然体で温かな集まりであることが印象的だった。これは協会の成立（建築という大枠の中の様々な専門性をもった方々の集まりであること）によるのではと推察するとともに、そのような皆様と一緒に建築を巡ることで、おのずと見学の視点も、建築単体の作品性というより、その建築が生む関係性の豊かさに意識が向かっていった様に思う。

自分の枠に閉じず、開いた心で対話する必要を感じる昨今、思いがけない形でそのような集いに参加することができ、建築の視察にとどまらない学びをいただいたことに感謝している。（しおた ゆき）

新耐震基準の木造住宅の耐震性能検証法

(新耐震木造住宅検証法)

一般財団法人日本建築防災協会

国土交通大臣指定耐震改修支援センター

はじめに

2016年4月に発生した「平成28年（2016年）熊本地震」において、木造住宅を中心に多くの建築物に倒壊等の甚大な被害が発生し、新耐震基準（1981年）導入以降2000年までの木造住宅にも一定の被害が見られた。

本協会では、国土交通省からの要請を踏まえ、「木造住宅等耐震診断法委員会」（委員長：坂本功東京大学名誉教授）を設置し、新耐震基準導入以降の木造住宅を対象とした効率的な耐震性の検証法（以下「検証法」という。）を検討し、今回取りまとめた。

検証法の構成

本検証法は、大きくステップ1「所有者等による検証」とステップ2「専門家による効率的な検証」の2段階で構成されている。

ステップ1「所有者等による検証」では、チェックリストを用いて、耐震診断の専門家ではない建物所有者やリフォーム業者など（以下「所有者等」という。）が、適用範囲を確認し、平面及び立面の形状、接合金物の仕様、壁の配置バランス及び建物の劣化状況等の建物調査を行い、それらの結果に基づいて、スクリーニング的に耐震性能を検証する方法である。この検証で専門家による検証が必要であると判定され、次のステップ2「専門家による効率的な検証」に進む場合には、所有者等が追加の建物調査として、図面と建物の整合性の確認、建物の各部位を写真撮影し、当該検証を依頼する専門家に情報提供を行う。

ステップ2「専門家による効率的な検証」では、耐震診断の専門家が現地調査をせずに、図面や所有者等による建物調査の結果等を活用し、一般診断法に準じた方法で耐震性能の確認を行うこととしている。

所有者等による検証

所有者等は、①平面及び立面が比較的整形

である②柱頭・柱脚接合部に接合金物が設けられている③壁の配置バランスが良い④建物著しく劣化していないことの4つのチェック項目について、簡易な計算やチェックリストを用いて確認する。その結果、チェック1～3の項目に全て該当し、チェック4で5点満点中4点以上となった場合、「一応倒壊しない」という判定となり、本検証法は終了となる。

一方、「所有者等による検証」で専門家による検証が必要と判定された場合には、所有者が専門家による建物調査を伴う耐震診断を依頼するか、所有者等による建物調査の結果等に基づいた「専門家による効率的な検証」を依頼するか選択する。「専門家による効率的な検証」を依頼する場合、追加の建物調査として、リーフレット「木造住宅の耐震性能のチェック」(写真)を参考に、図面と建物の整合性の確認(チェック5)、建物の各部位の写真撮影(チェック6)を行い、当該検証を依頼する専門家に情報を提供する。



写真 リーフレット「木造住宅の耐震性能チェック」

チェック5では、実際の建物の壁の配置等が、所有者の保有している図面（建築設計図書）との整合性を確認することとしているが、図面を保有していない場合は、「専門家による効率的な検証」で評価することはできないため、専門家による耐震診断を推奨する。

専門家による効率的な検証

一般診断法による耐震診断の基本的な作業の流れは、専門家が所有者等へのヒアリングや現地調査、地盤の情報収集等を行い、得られた情報を一般診断法のプログラムなどに入力して評点・判定を算出し、現地調査時の写真等や一般診断法の診断表などを整理した上で所有者等に報告するというものである。

一般診断法に準じた方法を効率的に行う方法として、専門家による現地調査の省略について検討した。その結果、建築時の設計図書（図面）があれば壁の耐力や配置について一定の情報が得られる、接合部の状況は施工時の写真や所有者等が撮影した写真をもとに専門家が確認できる、建物の劣化は所有者等が基本的な項目をチェックすることである程度の判断はできることから、①図面が入手できる②所有者等による最低限の建物調査（接合部や建物の劣化状況）の結果が得られることを条件に、それらを代替として、耐震性能の検証方法として一定の水準を確保しつつ、専門家による現地調査を省略できるものとした。

一般診断法に準じた方法について、一般診断法との主な違いを以下に示す。

- ・現地調査は行わず所有者等による検証等の情報を基に行う効率的な耐震性能の検証
- ・昭和56年6月以降平成12年5月までに建築された木造住宅に限定
- ・在来軸組構法である（基礎はコンクリート造）
- ・平屋又は2階建てで全ての階が木造である（平面的・立面的混構造対象外）
- ・柱頭柱脚接合金物が使われていることが確認できる場合には、接合部Ⅱとして評価してよい
- ・仕様が不明な壁でも壁1枚につき、1.0kN/mとして評価してよい
- ・床仕様Ⅱを基本とする
- ・一般診断法に準じた方法における劣化度による低減係数 K_d は、所有者等による検証に基づいて、 $0.7 \cdot 0.85 \cdot 1.0$ のいずれかを適用する

おわりに

一般診断法に準じた方法は、耐震改修促進法における建築物の耐震診断の指針と同等以上の効力を有する建築物の耐震診断の方法としては位置づけられていないが、新耐震木造住宅検証法によって行う新耐震基準の木造住宅の耐震性の確認及びその結果に基づく耐震改修については、社会資本整備総合交付金の基幹事業である住宅・建築物安全ストック形成事業による国の支援の対象となるとされている。

リフォームやインスペクション等の機会をとらえ、本検証法を適用し、木造住宅の効率的な耐震性の検証を実施していただければ幸いである。

本検証法の冊子やリーフレット、関連する情報を公開しているので、本協会ホームページを参照されたい。

<http://www.kenchiku-bosai.or.jp/8100>

(よこた やすひろ)

歴史的建築物と一体化した高層建築物

日本橋ダイヤビルディングの設計

浜田勇気

株式会社竹中工務店 作業所課長

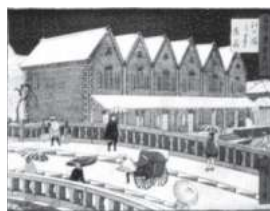
背景

昨今、見られる「歴史的建築物と高機能化した新築建物の共生・共存に対する社会的なニーズの高まり」に対し、一般的には、「既存と新築を構造的に分離すること」で成立させている事例がほとんどであった。しかし、より厳しい与条件の中では、そのような手法では対応ができない場合がある。

「日本橋ダイヤビルディング」では、そのような条件に対応すべく、今までの手法で見られた「既存と新築を分離」して成立する計画ではなく、歴史的建築物と一体化した高層建築物として建物の高付加価値化と保存・再生を行った。

既存建物概要

既存建物である三菱倉庫江戸橋倉庫ビル（昭和5年竣工）は、「東京都選定歴史建造物」に選定（2007年3月）されており、この地の特徴的な景観要素となっていることから、部分的に保存を行いながら新しく高層建築物を建設して機能更新を行った。



明治16年
三代広重作
「古今東京名所」



昭和5年創建当時の
建物写真

□ 建築主	三菱倉庫株式会社
□ 建築地	東京都中央区日本橋一丁目19番1号
□ 主要用途	オフィスビル、倉庫
□ 建築面積	2,518.00㎡
□ 延床面積	30,029.44㎡
□ 高さ	89.9m
□ 構造	S造、RC造、SRC造
□ 規模	地下1階・地上18階

再生後の建築概要

与条件

日本橋ダイヤビルディングは、三菱倉庫江戸橋倉庫ビルの再開発計画であり、再開発手法として既存外観の保存を条件に特定街区により容積割増を受けている。また、歴史的な建築物との共生・共存に加えて、敷地に平面的な余裕がないこと、高さの制限（90m以下）があること、必要延床面積の確保が必須であることが与条件となっていた。

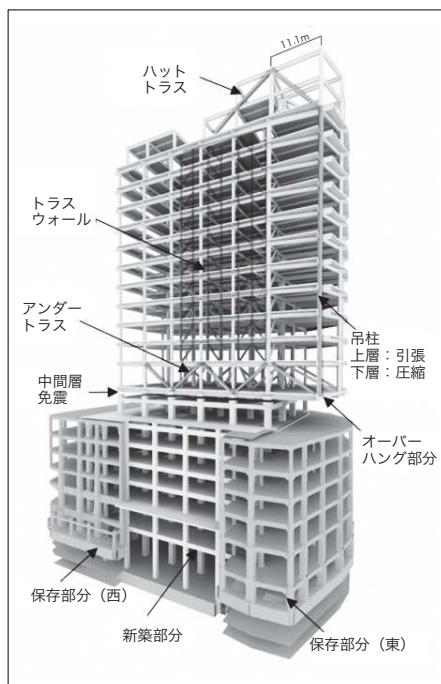
構造計画概要

■新築部分

上部構造は建物中央部にあるコア部分を中心に鉄骨ブレース（トラスウォール）を配置して剛性確保を図った。東側1スパンは既存建物部分に直接荷重影響を与えないようにするために、最大11.1m跳出し、これを支持するため7階機械室の1層分の階高を活用したアンダートラスと最上部のハットトラスを3構面設けた。下部構造は十分な剛性と強度を確保するため、SRC造とした。また、既存部分を含め、全ての水平力を新築部分で負担できるように耐震壁をバランスよく配置した。

■再生部分

昭和5年建設当時の図面の保存状態が良く、これをもとに既存部の断面寸法および配筋を評価し、材料強度等は2009年～2010年に実施した躯体健全性調査（一次～三次）における各種試験に加えて過去複数回行った試験結果を基に設定した。既存保存部の耐震壁については、剛性を増すことなく、小変形レベルから補強効果を発揮できるように高弾性炭素繊維貼りによる補強を行った。



構造パース

■免震層

免震支承は鉛プラグ入り積層ゴム（LRB）8基と天然ゴム系積層ゴム（RB）14基を配置した。免震層を通過するEVの許容変形量と上部構造、下部構造の地震時応答から適切なダンパー量を考慮し、加えて、風荷重に対する免震層の安全性、中小地震に対する応答改善、風居住性の確保に配慮し、鋼材ダンパー11基とオイルダンパーをX、Y両方向に各2基を配置した。特性の異なる減衰材を組み合わせることで冗長性を高めた。

■基礎架構

新築部下部については場所打コンクリート杭とし、基礎架構は基礎梁とマットスラブの併用とした。既存建物は長さおよそ12m（40尺）の松杭を利用した直接基礎であった。松杭は地下水位下にあることから目立った損傷もなく健全性を保っていたが、本計画では松杭の支持力に期待せず、既存部下部に場所打ちコンクリート杭（低空頭で施工可能な小径杭）を新設し、既存地下1階部分を活用して新たに構築するマットスラブを介して既存部全重量を新設杭に受け替えた。

ただし、既存松杭は極力残し余力とした。新設マットスラブと既存1階床との間の空間は設備ダクトとして利用した。

■おわりに

本建物の設計にあたって、多大なご協力をいただいた三菱倉庫株式会社ならびに株式会社三菱地所設計の皆様にご心より謝意を表する。

●浜田勇気

1978年長崎県生まれ。京都大学大学院修了。
2003年竹中工務店入社。



建物外観（再生後）



船橋状塔屋（再生前）



船橋状塔屋（再生後）



フラットスラブ（再生前）



フラットスラブ（再生後）

建築的思考の射程

竹山 聖

建築家
京都大学教授

竹山 聖

1954年大阪生まれ。

77年京都大学卒業、東京大学大学院修士課程進学、79年博士課程進学、84年単位取得退学、92年京都大学助教授、15年教授。東京大学博士（工学）。14年日本建築設計学会会長。16年香港大学客員教授。

80年設計組織アモルフ一級建築士事務所登録、83年株式会社に改組、代表取締役。

82、83年SDレビュー入選、86年湘南台文化センター2等、第2国立劇場Best30、87年愛知県芸術文化センター佳作、89年吉岡賞、91年アンドレア・パラディオ賞、95年仙台メディアテーク佳作、Mid Wales Center for the Arts入賞、01年白石ふれあいプラザ1等、06年台南億載金城2等、07年高尾オペラハウス3等など、コンペ入賞多数。

89年ギャラリー間にて個展「不連続都市」、90年より94年グループ展「Emerging Japanese Architects '90」ニューヨークを皮切りにアメリカ、ヨーロッパの8都市巡回。ミラノトリエンナーレ96日本パビリオン展示コミッションナーなど、国内外で展覧会、講演会多数。

著書に『竹山聖』（六耀社、90）、『都市を呼吸する』（リプロポート、94）、『独身者の住まい』（廣済堂出版、02）、『ぼんやり空でも眺めてみようか』（彰国社、07）、『Kiyoshi Sey Takeyama + AMORPHE』（Equal Books）など。

05年映画「KAMATAKI」（モントリオール映画祭で5部門受賞）美術監督。

■建築的思考について

建築的思考について語ろうと思う。

それは建築物をあだこうだと眺めまわし眺めまわしては価値を云々する思考のことではない。つまり他人事のように見るという観点から捉える思考ではない。そうではなく、建築という行為を、そしてその行為のただなかに宿る思考の運動を、つくるという観点から捉え追跡する。そうした作業になる。

建築の理論という構えをとるものでもない。未来社会にユートピアを構想し理想の建築像を描き出すでもない。ただ建築設計行為の時時刻々と変化する流れのなかで、どのような意識と無意識が働いているのかを問う、現在の思考である。

そしてそれは、いわゆる思考一言語的思考とどのように違うのか、違っているとしたらどこが違う、どのような意味や意義があるのか。長い人類の歩みのなかで建築という行為の果たしてきた役割は何か、そしてこの先果たしてゆく役割とは何か。建築的思考がいま、人間社会に果たしうる機能や価値はあるのか。可能性は、射程は、どのようなものなのだろうか。そのことを考えてみたいのである。

■行為としての建築

建築を建築物という名詞として捉えるのではなく動詞として捉え、「建築する」という行為として捉えたときに現れ出るのが、建築的思考である。Architectureはそもそも名詞だが、最近目にした英語の文献では動詞としても使われておりなるほどと思った。意図を持って組み立てる、世界を秩序立てる、そうした意味合いだ。

「建築を考える、ということはということか、これを考えよ」

1973年に増田友也教授が杯を掲げながら我々京大建築新入生に語りかけた言葉だ。以来この言葉を反芻してきた。行為としての建築、建築するという観点からの建築把握、これはそもそも増田友也の一連の思考を貫く態度である。ただ建築を目的語にしてしまい難解さを倍加した悩みがある。建築をただ建築物として捉えるのではなく、建築するという行為として、そのただなかの思考の運動として捉えよ、というメッセージが込められていたからである。これを増田友也は「存在論的建築論」と呼んだ。

増田友也の思考はつねに建築の初源の場へと立ち戻る。参照されるハイデガーも同様に言葉を遡行する傾向があり、たとえば「存在」はヘラクレイトに遡り把握される。ヘラクレ

イトスの言う自然（ピュシス）の呼び声、それがやがて存在の呼び声となった、とハイデガーは説く^{註1)}。世界はただ「ある」のではなく呼びかけ応答する「いる」に満ちている。呼び声であるロゴス、その動詞としてのレゲインは、さまざまな事物を呼び集め関係を見出す、という意味であって、世界は存在の声の集合として人間に立ち現れた。ハイデガーは古代ギリシア人の思考を言葉の意味を追いつつ遡る。そのようにしてまた増田友也も、建築という行為の始源へと遡ろうとした。それが図を描く、という行為であり思考であった。

■アルタミラ

アルタミラの洞窟を訪ねたのは90年代の前半のこと。その洞窟絵画は大広間の天井に描かれていた。天井の凹凸を利用し巨大な牛や馬があたかも生きて走っているかのようだ。ガイドは松明の代わりに懐中電灯の点滅と揺れによって太古の人々の経験を追体験させてくれた。

アンドレ・ルロワ＝グーランの説くようにそれは神話文字であったのかもしれない^{註2)}。人類はそこで象徴的思考に到達しているのでありこれらの絵画はその証拠である、と。彼の分析をつぶさに追えば、抽象を行う言語的思考と自然主義的形象による特殊な思考の区別や、時代的な変化を読み取ってはいる。ただ洞窟絵画の研究者の多くはそれが太古に人類が象徴的思考に到達していた証左であると踏んでいる。関係の体系としてすなわち神話文字として読み取ることが可能だからだ。

一方ニコラス・ハンフリーは、洞窟絵画の写実性と構図をもたぬ重ね合わせの様子が自閉症児の絵画に酷似していることから、それは自閉症的な心の状態の証であり、象徴的思考はほとんど授けられていなかった、つまり言語を持たなかった、という推論を述べている^{註3)}。ハンフリーの暗示する仮説はこうだ。言語を持つとそこに抽象化が生まれ世界が記号化され洞窟絵画のような生き生きとした自然主義的表現は失われてしまうのであって、人類がふたたび豊かな自然主義的表現に立ち戻るのはルネッサンス期を待たねばならなかったのであり、言語の獲得とともに失われる描画能力があり、洞窟絵画は言語を持たない思考の賜物だ、と。ルロワ＝グーランも写実に対する抽象の意味には触れているが、やはり象徴的思考の証、と見るロマンを優先する。

ここで洞窟絵画を持ち出したのは、文字であるかどうか、言語であると言えるかどうかを検証するためではない。そうではなくそれが単

に「描かれている」からだ。語られたのではなく（洞窟絵画の前で語ったり歌ったりしていたかもしれないが）、岩に刻み、擦り、描画している。ある種の図式がそこに展開されている。

ハンフリーはそれら描画相互の無意味に近い重ね合わせこそが彼らが自閉症時と同様の心の持ち主であり、象徴的思考を有さぬことの証であると解釈している。しかし一歩足を踏み入れ天井一杯に広がるリアルな動物たちの形象とその乱舞を体験してみれば、そこにある種の荘厳な空間が立ち現れ、音にならない音、言葉にならない言葉の響きをもって迫ってくることがわかる。幾多の動物が宙空を疾走する。物語をすら伴って、そう、生殖と誕生、死と再生の物語を。それが言語を形成していたかどうか、明快なメッセージをもつ記号であったかどうか、そのようなこと以前の、身体の内底に響く空間的現象として。

文字であるかないか、言葉であるかないか、言語であるかないかは一旦措く。確実なのはそこに少なくとも生き生きとした動物の表象があることであり、世界の似姿が描かれて空間的に現象していることであり、体験する人間に感情の高ぶりがもたらされる、ということだ。感興や畏怖すらもたらされる。心が動く。さまざまな形象とこれに満たされた空間が、一つの世界を生み出している。

これは言語になっていても（ルロワ＝グリーンたちの説）、言語になっていないとしても（ハンフリーたちの説）、そこにあるのはまぎれもない思考、まさに形と空間を通した思考の表現ではあるまいか。

■言葉による思考

コロラド大学からやってきた建築研究者とちょっとした議論になった。2017年の暮れのことである。なんの経緯か、言語以外の思考はない、と彼が言い出した。少々酒が入っていた勢いもあり、これから論じる建築的思考の可能性について思いを巡らせていたこともあって、私は強く反論を試みた。「語りえぬことがあり、それは神秘であって、そこでは沈黙しなければならない」というヴィトゲンシュタインの謎めいた言葉も繰り出しながら^{註4)}。しかし議論は堂々巡りを繰り返した。互いの狙いや思考のツボをよくわかりあっているだけに、なおのこと。

我々の世代は、彼もまたそこに属しているのだが、学生時代に強く構造主義の洗礼を受けていて、文化現象すべてを言語として、変換可能な系、文法を持つ意味ある系として捉

える思考の波をかぶっている。そして絶対的に透明で純粹で無垢な思考などなく、すべての思考は文化的言語的地理的空間的時代的時間的差異のなかに埋め込まれているのであって、いわばコンテキストを抜いて意味はない、と骨の髄まで叩きこまれている世代だ。レヴィ＝ストロースが婚姻関係を図式化し野生の思考を見出して、透明で純粹なる時代を超えた知性を自称したサルトルをコテンパンに叩きのめしたのを見て溜飲を下げ、無意識もまた言語であると喝破したラカンに快哉を叫び、考古学のように時代を掘り下げながらエピステーメー転換の切斷箇所を優秀な外科医のような手さばきで取り出すフーコーに痺れた。我々の思考にはあらかじめ言語あるいは構造という文化的水脈が隠されている。その向こうにはソシュールらの言語学があり、手前にはバルトラの豊かな表層の戯れがあった。

「すべては言語である」。これは時代の刻印を受けたものの、いわば信仰告白である。そのことを酒の席の建築談義で声高に語り出した彼のことは、笑って受け流すのが大人の態度というものだろう、おそらく。しかし、先にも述べたように、建築と言語の関係を、より正確に言えば、言語的思考でなく建築的思考の可能性を、言語に即しつつ言語からの逸脱をいかにして果たすかを執拗に考え続けてきた私はつい過剰に反応した。「言葉にならない思考もある」と。

言語は構造を含むが言葉はそうでないという捉え方もあるから、対句でいうなら「言語にならない思考もある」というべきだが、この場合、日本語として平たく考えるためにあえて言葉、としておきたい。

実はこれにはやや伏線がある。学生時代に建築誌で連載コラムを持っていて、そこに概念操作に足をすくわれない建築的思考、といったニュアンスで篠原スクールを論じたことがあった^{註5)}。無論肯定的に、である。そこにとある論客から、概念操作以外に思考はない、と辛辣な批判を浴びた。構造主義の洗礼を被った世代としてはまことに痛いところをつかれた。そう、概念操作以外に思考はない、のである。言葉なくして思考はない。正論である。

しかし、とそのとき私は考えたものだ。正式な教義ではそうになっている。しかしそれは本当だろうか、と。自身の経験を振り返って、たとえば高校の頃ゴッホの絵に、そのうねるようなテクスチュアと鮮やかな色彩の過激なハーモニーに感じた胸の高鳴りは、これは思考の名に値しないのだろうか。あるいはパス

ケットボールでスクリーン（オフェンスが味方の攻撃を助けるためにディフェンスの進路をブロックすること）を繰り返しながら最後にシュートに持っていく、そのような一連の流れを瞬時に判断しつつたどる身体の直観と経験は思考ではないのか。そして音楽。音楽は言葉ではない。でも思考ではないのだろうか。言葉ではないが、構造がある、変換可能である、秩序がある、美がある（たぶん）、ということになる。これをもって言語というなら、それはそれで結構。しかし少なくとも概念操作ではない。そしてこれは音を通しての思考なのではないか。人の耳に心地よく響く音のつながりと広がり。人間の脳は、あるいは身体は、荒れ狂う混沌と混乱のさなかにあっても、こうした秩序を探し求め、これに反応する。そしてそれは概念への抽象化とは異なるルートで、人間の「思考」を促してゆく。

絵画は色を、あるいは形を通しての思考であり、スポーツは身体を通しての思考であり、音楽は音を通しての思考である。どうしてもこうなる。そしてそれらは概念操作などではさらさらしない。

翻って建築はどうだろう。建築はすぐさま全体を把握しにくい上に、部分部分に自立した論理もあり、確たるハーモニーの規則を確定しにくい。モノの要求する秩序とヒトの要求する秩序、さらには社会の要求する秩序が交錯している。古来さまざまな論者がそのプロポーショナルや形の原理を論じてはきたけれども、破調は破調で新しい美に通じたりもする。しかも多くの場合、言葉でその理屈が語られ続けてきた。建築書、である。ヴィトルヴィウス、アルベルティ、パラディオ、ル・コルビュジエ、etc. そして言葉で語りうる側面が他の表現ジャンルに比べて多いことも確かだ。複雑な思考を整理するのに言葉に勝る手段はなかなかない。

■イメージの思考

私が1992年に京都大学に着任して以来、建築と言葉との関係は毎年のように学生たちとの議論のテーマとなってきた。曰く「建築に言葉は必要か？」

建築に言葉が必要ない、という主張には、いかに言葉が建築的想像力を喚起するかを説き、建築に言葉が必要だ、という向きには、それでは新しい空間イメージには到底たどり着くまい、とまぜ返す。詭弁も含めて、言葉は、そして言語は、いうまでもなく、最も強力に、そして精緻に、我々の思考を誘導している。言葉がなければ思考できないことばかりだ。

たとえば言葉を持つことによって初めて「存在」と「不在」と「虚構」を考えることが可能になった。これは人間を他の動物と隔てる大きな特徴だ。「不在」も「虚構」も言葉があって初めて思い浮かべることができる。ものがあることは一目瞭然だが、ないことを考えるには想像力がある。ましてや虚構を、つまり嘘を考えるには、言葉がある。動物たちになかなか不在や虚構が楽しめないのは、言葉が、言語能力が、不足しているからだ。ハイデガーは世界という言葉で精神世界の意味で用いたが、石に世界は欠けている、動物にとって世界は貧しい、と記している。人間は言葉のおかげで豊かな精神世界を持つことができた。それは確かだ。

しかし、とこでつぶやいてみるのである。言葉による思考があるのならば、形の思考、空間の思考というものもあるのではないか。むしろ建築設計の現場で大きく働いているのは、そうした形の思考、空間の思考ではないか。イメージの思考ではないか。イメージにはイメージの論理があるのではないか。音楽に文法があり論理があるように。この建築設計の現場で働くイメージの思考を、建築的思考と名づけてはどうだろう。それは言葉に介在されてであるかもしれない、あるいは大きく言葉に介入されてのイメージであるかもしれないが、言葉を逃れる側面もある。言語の規則にとらわれぬことによる思考の自由の可能性もあるだろう。これまで建築の歴史を彩ってきた幾多のドローイングを眺め、そこに言葉を超える建築的思考の可能性を見るのはさほど難しいことではない。むしろ言葉に限定される建築的思考を考える方が困難なのではないか。

そんな思いもあって、90年代の半ばには、学生たちと一緒に「記憶術」に関わる書物を繙きながら、古代から伝わる「場」と「イメージ」による空間の文法、それに基づく記憶術やその図式を研究した。そこで浮かび上がってきたのが、文字という離散的な、しかしそれ自体ではまとまった意味を持たない要素にまで分解せずに、「場とイメージ」という、それ自体が物語を内包する単位に事物の意味を戻して、緩やかな連携のうちに世界を凝集する思考の方法であった。

記憶術とは場とイメージをめぐる思考の体系である。空間的想像力が記憶の繫留装置となる。アルタミラの洞窟にせよ、古代ギリシアの円形劇場にせよ、アトリウムをもつ住まいに立つ像たちにせよ、人間は思考を、世界の表象と密接に関係づけて鍛え上げて来た。

かつて表象の多くはより具体的であり知覚的であり身体的であって空間的現象を伴っていた。それが完全に断ち切られたのは、書物によってであった。ヴィクトル・ユゴーの「これがあれを滅ぼすだろう」という予言めいた言葉は、近代人の失った世界を暗示している^{註6)}。

■エクリチュール／コーラ／ダイアグラム

エクリチュールとは文字を書くことであるが、筆跡、書体の意味もあり、何らかの表象を刻み込むこと、その行為に源を持っている。デリダは痕跡とも捉えており、それは想像力を喚起する契機としての痕跡である。描かれた表象あるいは記号は、なんらかの心の動きをもたらし、書き記し刻みつけた人間の思いとそれが一致していてもずれていても、そこには結果的に伝えられる世界があり、立ち現れる空間がある。建築の出現はそうした行為の展開された場所からそう遠くないところに見出されたのだろう。洞窟絵画のように、記憶術のように、あるいは墓とモニュメントのように^{註7)}。

デリダの「Architecture Where The Desire May Live」^{註8)}という議論には大きく心を惹かれた。そこでは建築が内在的な道であり、世界を切り開く行為、欲望と捉えられていたからだ。世界にエクリチュールを刻み込む。エクリチュールが新しい世界を開く。建築をエクリチュールの位相で捉えれば、建築的思考は言語的思考と交錯しつつ異なる可能性を開くことになる直観があった。言語の明晰や正確を失うかわり逸脱と夢想の豊饒を得る。デリダのエクリチュールは、あるいは脱構築は、言語的思考に逸脱と豊饒の可能性をもたらす試みであったが、建築的思考はそもそもその傾向を内包している。

2013年の秋学期に大学院生のセミナーではこのデリダの論考を導きの糸とし、さらにドゥルーズ、ウルマーなどを取り上げ、そしてピーター・アイゼンマンとデリダのコラボレーションであるコーラルワークスを議論することにした。コーラルワークスChora L Worksはプラトンの『ティマイオス』に出てくる「コーラChora」にかけた言葉であるから、まずプラトンを読まねばならない。さてコーラとは何か。

プラトンによれば、世界は叡智界（the intelligible：頭で考える世界）と感性界（the sensible：体で感じる世界）にわかれ、コーラはその両者を結びつける場、どちらにも属さぬいわば出来事の鋳型のような場である、とされている。アリストテレスのトポスが、

はっきりと境界づけられた明快な場所であるとするなら、プラトンのコーラは境界の定まらぬ、しかし事態の出現を孕むような場所であって、コーラスと語源を同じくする^{註9)}。

コーラは事物や出来事の揺籃の場であり、つまり何ものかが創造される場所。メタフォアとしては窪みであり、穴であり、篩（ふるい）であり、東洋思想に照らせば、無の場所であり、空である。無為の時間を宿すどこにも属さぬ場所、という私が建築で常に追い求めていた主題と重なり合う場のイメージであった。荘子の言う「虚室生白」、空っぽな部屋に光は満ちる、そうした情景を思わせる。

1983年のコンペにバーナード・チュミが勝って計画を進めていたパリのラヴィレット公園の一面に、チュミの招聘によってデリダとアイゼンマンが協働し、ある場所をデザインすることになった。結局そのプロジェクトは幻となり、一冊の本が残ったのだが、それがアイゼンマンによって名づけられた『Chora L Works』である。命名はデリダがコーラという言葉と一緒にとあるダイアグラムを持ち込んだことに由来する。

アイゼンマンは哲学者がダイアグラムを持ち込んだことに強く反応した。なぜならそれはヴィジュアルランゲージであったからだ。視覚的なものは建築家の領分に属する、そうアイゼンマンは思ったに違いない。実際の絵柄としては何やら竖琴のような、あるいはウィンドウズのマークのような図像だったのだが、アイゼンマンはコーラの図像化、空間化は建築家の課題だと意気込んだ。そしてそれが不在の想像力をも意味するから、自身がヴェネチアで行ったプロジェクトよろしく地面に規則正しいピッチで穴を掘り込んでいく。チュミのラヴィレット案が自身のヴェネチアのカナレージオのパクリだと仄めかす狙いも、アイゼンマンにはあった。

もちろんデリダとしてはコーラという思想的課題を持ち込み、それは謎ですらあったから、この言葉を通して場所の性格を編み出していこうとしたのだろう。デリダの示したダイアグラムも、コーラのメタフォアのひとつである篩（ふるい）のようなものだ。何らかの操作、濾過、潜り抜け、プロセッシング（空間加工）を通して創造が行われる、そのようなイメージとして。ただ、哲学者にとってそれはある抽象的な印であるにすぎなかったが、つまり思考の装置に過ぎなかったが、建築家にとっては文字通りのイメージであり、ヴィジュアルランゲージであった。アイゼンマンはやや

焦ったきらいがある。

結果的に二人の共同作業に著しい認識のズレがあり、たとえばアイゼンマンが石切場のイメージで不在の想像力をかきたてる場を構想しているところに、デリダが、ところで木はどこに植えるんだ、ベンチはどこに置くんた、という素朴な質問をして、それが皮肉でも何でもなく、哲学者は大真面目に公園をデザインしようとしていて、それに対して建築家はまだ見ぬ空間を描き出そうとしていた。「公園」という言葉を文字通り憩いの場とするか、方便として新たな空間構想の契機とするか。哲学者はここでは比較的穏当な生活者であり、建築家はいつものように過激な創造者であった。

コーラという言葉に触発されて進んだ二人のコラボレーションにとって大きな手がかりであり、躓きの石でもあったのがダイアグラムである。そしてアイゼンマンは改めて気づくのである。言葉で勝負しては哲学者の土俵に乗せられるだけだ。むしろダイアグラムのようなヴィジュアルランゲージに寄り添ってこそ勝機は開ける。アイゼンマンは論客ジェフリー・キプニス¹⁾を常に伴ってデリダとのミーティングの場たる戦場——それはまさしく戦場であった——に臨んだが、言葉にプラスしてダイアグラム、そしてもちろん図面が大きな武器となることを自覚した。現実の計画にとって、図面ほど大きな力を持つものではなく、すくなくとも局地戦では言葉を凌駕する。

アイゼンマンはもともと抽象的な思考を得意とする建築家であった上に、ダイアグラムの図面表現巧者であったから、デリダがダイアグラムを持ってきたことがアイゼンマンの気持ちに火をつけた。ダイアグラムこそが創造のためのコーラだ、と。

あらためてダイアグラムに目覚めたアイゼンマンは1999年には『Diagram Diaries』という本を出す。「アイゼンマンはなぜこんないい本を書くのだろう」というタイトルの文章をすらものした彼である。ダイアグラムに引っ掛けてダジャレのタイトルをつけることに躊躇はなかった。コーラルワークスももちろんダジャレである。ともに高度に知的なダジャレ、アイゼンマンならではのダジャレであったが。

2014年の春学期のスタジオは、ダイアグラムというテーマで行った。建築がもし何かを常に参照するものであるなら（ただ構造的合理性や機能的要求や法規やコストにとどまらず、ルネサンス期のように人体でもいい、フランク・ゲーリーのように魚でもいい、もちろんグリッドでも幾何学でもいい）、なんらか

の「根拠」を見つけてきて、そこから形を決定する、というルールに則った建築的ゲームであってよい。言語ゲームのヴィトゲンシュタインではないが、建築の設計には大なり小なりゲームの快感が付属している。「解く」という言葉はそれをよく表している。

ダイアグラム・スタジオは建築的思考の可能性を広げる試みであったが、ことによるとそこにこそ建築的思考の本質が潜んでいるのではないかという感触を持った。社会に頼ったりクライアントに阿ったり予算を言い訳にしたりして形が決まっていくのではなく、形には形の論理がある、ということ、を、いまさらながらあらためて確認することになる。建築的思考の射程は定かでないが、その可能性は垣間見られた実感があつた。

■襞／モノド／身体

2016年と17年の秋学期、大学院のセミナーでは、各々ジル・ドゥルーズの『^{ひだ}襞』とライブニッツの『モノドロジー』を読みつつ、さらに建築的思考のありようを考察し議論した。ドゥルーズは実はダイアグラム好きな哲学者であり、ヴィジュアルイメージの分析に長けている。というよりむしろ、ヴィジュアルイメージを積極的に哲学的な概念に繰り込んできた。リゾームやノマドなどは80年代に建築の世界でも多く語られたイメージであり、刺激的な思考に満ちている。そのドゥルーズがライブニッツのモノドをダイアグラムに即して解き明かし、「襞」というメタフォアを通してイメージを広げた。ここにもまた、建築的思考の可能性が眠っている。ライブニッツもまたドローイングが好きであつて、じつは公園計画も行い、ループルの東翼の設計にも強い関心を示していた。ドゥルーズもライブニッツも、どちらかというと言葉を超え出す哲学者であつた。ドゥルーズは音楽にも造詣が深く、ライブニッツはいうまでもなく数学者である。あらゆる表現活動をその思考の舞台としていた。

ドゥルーズのモノド解釈は一枚の建物の断面図で示される。1階に開口があつてそこが知覚を司る。そして屋根裏のような2階にその知覚された表象が伝わり、無限の襞のようなものに覆われ蠢めく2階の内壁に知覚された情報がしまわれる。一種の記憶のようなものか。そしてそれが襞の開閉によってさまざまな関係と欲求の場にもたらされ、身体に即した思考が展開される。プラトンと違って知性と感性は分離されていない、むしろ一体である。そこにさまざまなグラデーションがあ

るだけだ。脳の内部がさながら建物のように図式化されている。

モノドは予定調和に向かう魂であり、さまざまなヒエラルキーがあつて、しかも神という自然界をあまねく司る精神を仮定しているからドゥルーズのダイアグラムをそのまま肯んずるかは措くが、やはりプラトンのように精神と物質を分離するのではなく、原理は異なれど身体において一致する、と見ている。つまり感覚や物質を精神の下におかず、全ては通じ合う。

人間社会に応答しつつ最終的に物質に形を与える建築という行為にとって、ドゥルーズやライブニッツのような感覚と精神を一体に捉える思想や、デリダのように欲望をもって場所を開く原理と見る思想は、極めて豊かなヒントに満ちている。そして彼らが皆、言葉の世界に閉じこもらず、むしろ人間の身体的活動のすべてに渡ってそのまなざしを注いでいることには大きく力づけられる。建築的思考の射程も可能性も、他の領域との応答的な思索と実践を通して鍛えられていくものであるに違いない。そうした場を多くの人々と共有したいものである。（たけやま きよし）

註)

1. マルティン・ハイデガー『形而上学入門』川原栄峰訳、理想社、1960.
2. 彼はその著『身ぶりと言葉』（荒木亮訳、新潮社、1973.）のなかで、「形の言語」という章を立ててこのことを論じている。
3. ニコラス・ハンフリー『喪失と獲得』垂水雄二訳、紀伊國屋書店、2004.
4. ヴィトゲンシュタインは『論理哲学論考』（藤本隆志・坂井秀寿訳、法政大学出版会、1968.）において精緻な論理を展開しつつ、最後にどんでん返しのように言葉にならない思考の存在を付け加える。「実際私はペンで考える。なにしろ手が何を書いているのか頭が知らないことがしばしばである」（『反哲学的断章』丘澤静也訳、青土社、1981. p.50）とは、『論理哲学論考』出版の10年後の彼のメモである。エクリチュールの自立。
5. 実際の文章は以下の通り。「篠原スクールの建築を語るとき、概念操作や記号論を振りまわして思わせぶるようなやり方は、実質的にはずれである。彼らはもっとものを知っている。」SD7901、p.223
6. ヴィクトル・ユゴは『ノートル＝ダム・ド・パリ』第5編2（潮出版社、pp.176-191、辻昶・松下和則訳）を「これがあれを滅ぼすだろう」と名づけ、書物が建築に取って代わるさまを活写している。人類の知は明晰さを増し、空間的想像力の豊饒を失った。
7. アドルフ・ロースは、真の建築は墓とモニュメントのうちにしかないと言っている。近代では機能のための建築が主となり、それは反語的に語られたのだったが。
8. Architecture Where Desire May Live, interview with Eva Meyer, DOMUS, vol.671, 1986.
9. ギリシア悲劇で舞台の進行を助ける合唱隊であり群衆役のコロス（コーラス）に通じる。

Member's Forum

会員投稿の頁



U-35委員会企画 talk baton 13 活動報告

talk baton とは…

若手プラットフォームづくりの活動の一環として、建築を取り巻く他分野のゲストがトークのバトンを繋げていくコミュニケーショントークイベントです。

建築をフィールドとする私たちと毎回のゲストとの対話を通じて、建築が本来持っている多様性やバイタリティを見つめ直し、これからの建築に求められる領域を探っていきます。

U-35委員会ホームページ

HPを開設しました。

新着情報や過去の活動報告もご覧になれますので、ぜひ一度お立ち寄りください。

<http://www.aaj.or.jp/u35>

U-35委員会Facebookページ

活動内容やメンバーの雑感などざっくばらんに情報をアップしています。ぜひ一度お立ち寄りください。

<https://www.facebook.com/U35.aaj>



川田氏によるレクチャーの様子



今回のゲストは壁画制作を主力に作家活動する川田氏。建築と壁画は空間を扱い共有するという意味では共通する要素があります。公共的な施設で作品を制作する川田氏と対話を重ね、新たな視点や発想を探りました。

会場は、六甲ミーツ・アート芸術散歩2017での展示会場である六甲山ホテルです。前年度の六甲ミーツ・アートでは自然景観に呼応し樹木にフレスコ画を重ねた作品で公募大賞グランプリを受賞し、今回は招待アーティストとして参加されました。フレスコ画は漆喰が乾かないうちに顔料で描く絵画の古典技法の一種です。展示作品「The soft culture」の解説と、自身の壁画制作へのスタンスやこれからの抱負について語って頂きました。初めに、六甲ミーツ・アート芸術散歩 総合ディレクター/キュレーターの高見澤清隆氏から展覧会全体について語って頂き、今回のtalkbatonをスタートしました。

■六甲ミーツ・アート芸術散歩について

高見澤 六甲ミーツ・アート芸術散歩は六甲山を舞台に展示される数々のアート作品を、ピクニック気分で周遊しながら楽しめる現代アートの展覧会です。2010年から毎年開催し、今年で8回目となります。阪神電気鉄道株式会社と子会社が運営していて、公的資金の投入はなく、民間企業による営利活動としてのアートイベントであることが大きな特徴



「木立」の展示

です。毎年、「赤字だったら打ち切り。」というプレッシャーを背負いながら実施しており、入場者数よりも収支が取れているかが重要とされ、経営的な視点が求められます。このため、展示作品に関しては、事業の原資として見る側面が主催者側にあることをアーティストの方々にも伝え、了承いただいています。今回は総勢39組のアーティストが参加しており、私を中心に数名のスタッフ、インターン、アルバイトで運営しています。

■作品「The soft culture」

川田 今回、六甲山ホテルの屋外にある敷地を展示会場として作品を制作しました。この敷地を選定した理由は、六甲ミーツ・アートの会場となっている六甲山上の様々な要素（自然、水、くつろげる場所、屋内空間など）が全てコンパクトに納まっており、一つの壁画を様々な手法で見せることが出来たと思ったからです。この敷地を「木立」「広場」「温室」の3つに区分して作品を制作しました。複数の木立に寄り添うように壁画を描き、その幾つかを解体・移動させて別の場所に展示するという新しい壁画制作を試みました。作品のプロセスを辿りながら、解説します。

①「木立」の展示

昨年の六甲ミーツ・アート作品の延長線上にある展示です。今回は、この場所を制作スペースとして、全てのフレスコ画を制作しました。樹木を囲むように壁画を制作し、その幾つかを取り外し、別の場所に移動させるという行為を繰り返しました。

②「広場」の展示

「木立」(＝アトリエ)で制作した壁画を「温室」(＝展示会場)に移す過程をチャプタ画像のように切り取って展示しているのがこの「広場」です。「木立」から「温室」への移動には、2種類の方法をとりました。一つ目は担いで移動させ、二つ目は池の上にいかだを浮かべて移動させました。移動の痕跡として



「広場」の展示

いかだも作品の一部として展示しています。これまで、私は公共の場所で様々な手段で壁画を制作・発表してきました。但し、展覧会という一定期間にのみ「壁画」として存在することを前提とした制作であり、会期が終わると「壁画」ではなく空間の中にある「飾り(装飾)」に変換されることに気づき、最近は「壁画」として残す方法に強い関心があります。今回は、壁画と相いれない素材として、移動という手段を作品の一部に挿入しました。

③「温室」の展示

制作スペース、移動手段の過程を経て、「温室」は本来的な展示会場にあたります。最後にここで作品に対して空間という素材が加わりました。壁画と空間を独立させた状態から合流させることは初めての経験で、空間に対して壁画をどのように配置するのか試行錯誤しました。「木立」で制作した壁画と別の用途のために存在した空間との関係性や人の動線を加味して、展示会場を構成しました。

今回の作品を一言で表現すると、「実践的な実験」です。壁画が空間に対して、独立した環境におかれた場合、作品として自立できるのか、さらに社会に及ぼす影響の検証と考察を試みました。

■新しい壁画表現を試みて

質問 「壁画」を移動するという試みを経て、率直な感想を教えてください。

川田 表現としてのある一定の到達点に達したと思いますが、相対的に良いものかどうかの判断はまだこれからだと考えています。

質問 温室内に壁画を表現する展示方法については最初からイメージがあったのでしょうか。室内に垂直な壁画が配置されることによって、外部の林を反転して室内に再構築されたように感じました。

川田 当初より配置のイメージはありましたが会場に合わせてより自然な形で構築していました。感じて頂いたことはまさに表現と

して考えていたことです。

質問 壁画の色や柄についてのイメージを教えてください。「温室」の展示は茶系の色で統一されていますが、「広場」や「木立」での展示は黄色や他の色を使用するなど、表現に差異がありますがどういった意図か教えてください。

川田 柄は今年のモチーフである六甲山の植物を踏襲し、作品の連続性を意識しました。色についてはフレスコ画の技法から下絵で最も標準的な茶系の色を使用しています。

表現の差異については、温室の展示は移動した終点にある、ということが大事なのですが、意図的に温室内の壁画はそのままにして、「木立」や「広場」の壁画には加筆をして表現に重ね付けをすることで視覚的な反転、つまり「温室」で制作して外に展示しているという逆の状況も想起させることを狙っています。どこで制作したかが重要でなく、結果的に誕生した空間が大事だと考えているからです。

■壁画への想い

質問 私たち建築設計者はある案をブラッシュアップさせる時に様々な人の意見を聞いたりプレストしたりするのですが、川田さんはどのようにアイデアを膨らませていくのでしょうか。

川田 私はできる限りの資料・情報を集めたうえで確信を持って進めていくことが多いです。人に相談することはほとんどありません。自分のアイデアに自分で責任を持って進めて行きたいからです。

質問 本来空間に固定される「壁画」に移設というテーマを盛り込むなど、表現の幅を広げていると思いますが、「壁画」としてこれは譲れない、守りたいポリシーというものを教えてください。

川田 この場所に、空間に、美術が必要かどうかです。公共的な考え方からは離反しているかもしれませんが、私自身ここに絵が

あっても意味がないと思う空間もあります。

■壁画と建築の関わり合い

質問 「壁画」は壁や柱といった建築の構成要素を利用するものと考えていましたが、「木立」を柱に見立て、それを移動することで「温室」という本来「壁画」が存在し得ない何もないワンルームの空間に「壁画」自体が柱の様に建築の構成要素に変遷しているという反転が建築的に面白いと感じました。

川田 作業療法的な観点からすると「壁画」は人々が建物の中で過ごす日常のルーティーンの中に一つ何かを差し込むことで、些細なことですが何かが変わるという働きかけかなとも考えています。

質問 それは「壁画」がその空間からなくなっても作品として成立するかということから、「壁画」によってその空間に何をもたらすことができるかというテーマへ移行しつつあるということでしょうか。

川田 考え方としては逆だと思っています。結果的に私の「壁画」は写真や断片でしか存在を継続させることができないものがほとんどです。身体的な情報は消え視覚的な情報しか残らないという中で、空間に対して日常の変化をもたらすということは常々考えてきました。その上で美術というフィールドで「新しい壁画」を追求することによって、その表現はより進化してきています。仮設的である「壁画」そのものが残るということ、あるいは「壁画」という存在自体への問いかけに変わってきたと思っています。

talk baton 13 を終えて

高見澤氏と川田氏の間には、理解と強い信頼関係があった。アーティストとディレクターは、育て・育てられる関係が理想で、連綿と受け継がれてきた文化なのだろう。設計者と施主の関係にも似ていると感じる。そうなるための信頼を、昨年の展示作品で勝ち得た川田氏の真摯な姿勢にも学ぶべき点が多かった。今回の企画に協力いただいた高見澤氏、川田氏とアートコートギャラリーにお礼を申し上げたい。

対 談 日：2017.11.03

場 所：六甲ミーツ・アート芸術散歩
2017 六甲山ホテル展示会場
モデレーター：吉田 悠佑（大林組）



「温室」の展示



打ち上げ会での集合写真

1

ONTEN～LOVE&ROCK ビートルズ×忌野清志郎～



英国と日本のキング・オブ・ロックとして活躍したビートルズと忌野清志郎の展覧会が開催される。

ビートルズ展「Ladies and Gentlemen... THE Beatles」では、アメリカに本社を置き、ミュージアム運営を行う「THE GRAMMY MUSEUM and Fab Four Exhibits」が保有するザ・ビートルズの貴重な展示作品400点以上が一堂に会する。これらの品々の大半は、1964年から1966年中期で行ったアメリカツアーの貴重なものであり、今まで日本で見る事はできなかった。また、有名なアビー・ロードのレプリカパネル前でのインスタ映え記念撮影、リングスターのドラムレッスン、イエローサブマリンのカラオケBOX、本展限定映像なども観ることが出来る。

「ロックスター忌野清志郎展」では、忌野清志郎のギターや、愛用のアンプなどの楽器類をはじめ、特徴とも言えるカラフルなステージ衣装、オレンジ号と呼ばれる自転車などの愛用品、そして東京・タワーレコード新宿店のオープン記念に書かれた9mの大作の絵画など、ミュージシャン、サイクリスト、アーティストとしての“イマノワールド”を余すことなく堪能できる展示となっている。

期 間 4月8日(日)まで

11:00～20:00 ※入場は閉館の30分前まで

休 館 日 会期中無休

会 場 ATC（大阪南港）特設会場ITM2F

大阪市住之江区南港北2-1-10

TEL.050-5817-9070（楽天チケット）

観 覧 料 <ビートルズ展・忌野清志郎展 二展示会共通券>

一般3,300円、学生2,200円

<ビートルズ展>

一般2,200円、学生1,500円

<忌野清志郎展>

一般1,800円、学生1,200円

*小学生以下無料

2

新収蔵品展

西宮市大谷記念美術館では2016（平成28）年度に寄贈を受け、館蔵品として新たに73点の作品が加わった。

2016年に個展を開催した川村悦子をはじめ、1967年の第1回ボローニャ展に日本人で唯一紹介された松原直子、1918年に土田麦僊らとともに国画創作協会を創設し後に芦屋や神戸に移り住んだ日本画家村上華岳ら、11作家による新収蔵品（新たに加わった作品）全点を一堂に公開する。



西村五雲《鮮鮭》1934年頃
絹本着色・軸装

新収蔵作家紹介（生年順）

- ・西村五雲（にしむら・ごうん 1877～1938）計1点収蔵
- ・村上華岳（むらかみ・かがく 1888～1939）計1点収蔵 [※]
- ・鍋井克之（なべい・かつゆき 1888～1969）計2点収蔵 [※]
- ・徳岡神泉（とくおか・しんせん 1896～1972）計2点収蔵 [※]
- ・伊藤慶之助（いとう・けいのすけ 1897～1984）計2点収蔵
- ・梅澤静雄（うめさわ・しずお 1914～1943）計2点収蔵 [※]
- ・泉茂（いずみ・しげる 1922～1995）計39点収蔵
- ・山中嘉一（やまなか・よしかず 1928～2013）計16点収蔵 [※]
- ・松本宏（まつもと・ひろし 1934～2013）計4点収蔵
- ・松原直子（まつばら・なおこ 1937～）計2点収蔵 [※]
- ・川村悦子（かわむら・えつこ 1953～）計2点収蔵 [※]

※今回初めて作品を収蔵する作家

期 間 3月3日(土)～3月25日(日)

10:00～17:00

※入館は16:30まで

休 館 日 水曜日（ただし3/21は開館、3/22は休館）

会 場 西宮市大谷記念美術館

兵庫県西宮市中浜町4-38

TEL.0798-33-0164

観 覧 料 一般200円、高大生・小中生100円

*西宮市在住65歳以上の方は無料（要証明）

*ココロカード・のびのびパスポート呈示の小中生は無料

*障がい者手帳等をお持ちの方とその介助者1名は無料

3

アニメーションにみる日本建築
—ジブリの立体建造物展より—

日本が世界に誇るアニメーションの文化。その中で日本の伝統建築はどのように描かれてきたのだろうか。スタジオジブリのアニメーション作品にはドラマが起こる舞台として、たくさんの日本建築が登場する。本展覧会では、竹中大工道具館が展示協力として携わった「ジブリの立体建造物展」から、「となりのトトロ」「もののけ姫」「千と千尋の神隠し」などに登場する日本の建築を採り上げ、建築史家・藤森照信氏の監修により紹介する。作品に登場する建物に関連する背景画や美術ボード、美術設定といった制作資料約70点（複製）を公開するほか、「となりのトトロ」に登場する草壁家住宅を一部、立体で表現し、その設計の源に触れる。



草壁家(となりのトトロ)
©1988 Studio Ghibli

期 間 5月6日(日)まで
9:30~16:30
※入館は16:00まで

休 館 日 月曜日(ただし4/30は開館、5/1は休館)

会 場 竹中大工道具館1Fホール
神戸市中央区熊内町7-5-1
TEL.078-242-0216

観 覧 料 一般500円、高大生300円、65歳以上200円
(常設展示観覧料含む)
*中学生以下無料

4

くまのもの
隈研吾とささやく物質、かたる物質

国内外で膨大なプロジェクトを抱えつつ疾走する世界的建築家、隈研吾(1954~)。古今東西の思想に精通し、「負ける建築」「自然な建築」などの理念を実践してきた約30年に及ぶプロジェクトを集大成して展観する。本展では特に、隈が仕事を通じて対話を重ねてきた素材に着目し、主要なマテリアル(竹、木、紙、石、土など)ごとに分類・整理することで、「もの」という観点から概観を試みる。「もの」の開放によって、人の感覚や意識、そして環境を媒介する建築の可能性に迫る。



ヴィクトリア&アルバート・ミュージアム ダンディ 2018
Photo: Ross Fraser McLean

期 間 3月3日(土)~5月6日(日)
10:00~18:00(金曜日は20:00まで)
※入館は閉館の30分前まで

休 館 日 月曜日(ただし4/30は開館)

会 場 東京ステーションギャラリー
東京都千代田区丸の内1-9-1
(JR東京駅丸の内北口改札前)
TEL.03-3212-2485

観 覧 料 一般1,100円、高大生900円
*中学生以下無料
*障がい者手帳等をお持ちの方は100円引き、その
介助者1名は無料

5

明治150年展
明治の日本画と工芸

1868年に明治時代に入ると、政府主導のもと殖産興業や輸出振興政策が推し進められ、海外での日本美術への関心が高まった。政府は『温知図録』を制作するなど、国家戦略として工芸図案指導に力を注いだ。京都では、地場産業の振興を目的の一つとして京都府画学校が設立され、多くの日本画家が工芸図案制作に携わることで、時代に即した図案の研究が進められた。

本展では、明治の工芸図案とともに、美術工芸作品や工芸図案を描いた日本画家たちの作品を一堂に展示することで、近代化していく社会の中で生み出された明治の美術品を紹介する。
(※会期中展示替えあり)



トーマス・B・ブロー
《花蝶図輪花皿》
明治~大正時代
陶、色絵金彩
京都国立近代美術館

期 間 3月20日(火)~5月20日(日)
9:30~17:00(金・土曜日は20:00まで)
※入館は閉館の30分前まで

休 館 日 月曜日(ただし4/30は開館)

会 場 京都国立近代美術館
京都市左京区岡崎円勝寺町
TEL.075-761-4111

観 覧 料 一般1,000円、大学生500円
*【夜間割引】会期中、金・土曜日の17:00以降は
一般800円、大学生400円(他の割引との併用不可)
*高校生、18歳未満無料
*障がい者手帳等をお持ちの方とその介助者1名は無料

本欄掲載の1~5の美術館等の招待券ご希望の方は、電話等で申し込み後、招待券送付用の切手(82円)を日本建築協会事務局までお送りください。

理事会

第6回常任理事会

1月24日(水) 16:00~17:10

日本建築協会会議室

出席者 設楽会長ほか6名

- 議 事 (1) 平成30年常任理事会、通常理事会、定時総会の日程
 (2) 「建築と社会」アーカイブ化の経過
 (3) 在阪建築4団体意見交換会報告
 (4) 協会リーフレットのリニューアル
 (5) 論考コンクール「片岡安賞」の経過報告
 (6) 第38回大阪都市景観建築賞の報告
 (7) 公益目的支出計画の実施完了報告

編集委員会

第10回広告企画・編集合同委員会

1月18日(木) 18:10~19:00

日建設会議室

出席者 勝山委員長ほか4名

- 議 事 (1) 2月号特集 第24回私の空間作法
 (2) 3月号特集 東海支部特集
 (3) 4月号特集 特別編集委員会特集
 (4) 5月号特集 スポーツイベントを支える設備技術(仮)
 (5) その他

2018年4月特集号第4回特別編集委員会

1月18日(木) 19:00~20:20

日建設会議室

出席者 勝山委員長ほか6名

議 事 (1) 企画の決定

第2回建築計画系分科会

1月26日(金) 19:00~21:30

日本建築協会会議室

出席者 桑原幹事ほか3名

議 事 (1) 2018年特集について

第9回設備分科会

1月10日(水) 18:00~19:20

日本建築協会会議室

出席者 橋本幹事ほか6名

- 議 事 (1) 2018年特集の企画
 (2) 「設備の頁」の企画

第4回施工材料分科会

1月29日(月) 17:00~18:10

日本建築協会会議室

出席者 高橋幹事ほか5名

- 議 事 (1) 委員交代
 (2) 2018年特集の企画

第8回法令分科会

1月17日(水) 16:00~17:20

日本建築協会会議室

出席者 小林幹事ほか3名

- 議 事 (1) 法令コーナーの企画
 (2) 2018年特集の企画

事業委員会

第6回情報見学小委員会

1月11日(木) 18:00~19:10

日本建築協会会議室

出席者 中尾委員長ほか11名

- 議 事 (1) 本年度事業 茶室見学会 実施報告
 (2) 来年度事業 見学先の検討
 (3) 2017年建築関係団体合同忘年懇親会について実施報告

次世代委員会

第4回2040委員会

1月22日(月) 19:30~21:30

日本建築協会会議室

出席者 駒井リーダーほか6名

- 議 事 (1) 企画内容
 (2) 今後の委員会活動

第12回U-35委員会

1月11日(木) 19:00~

昭和設計

出席者 三谷リーダーほか9名

- 議 事 (1) 活動/予定
 (2) 次回予定/その他

U-35委員会

1月25日(木) 18:30~

凱風館

出席者 三谷リーダーほか14名

内田樹氏とのトークセッション

第5回建築次世代委員会

1月17日(水) 18:30~20:00

竹中工務店会議室

出席者 菅原委員長ほか5名

- 議 事 (1) 委員会の活動方針、今後の進め方
 (2) 日本建築協会 新パンフレット検討

出版委員会

第9回出版委員会

1月23日(火) 18:00~19:00

日本建築協会会議室

出席者 西委員長ほか5名

- 議 事 (1) 既刊書籍経過報告
 (2) 制作進行中の書籍
 (3) 今後の出版テーマ
 (4) 既刊書籍を用いた講習会の企画

教育委員会

第2回工高生教育小委員会

1月18日(木) 18:00~19:20

日本建築協会会議室

出席者 谷口委員長ほか1名

- 議 事 (1) 第63回工高生デザインコンクール実施報告
 (2) 第64回工高生デザインコンクール募集規定検討
 (3) 次年度の審査委員長並びに審査委員の委嘱
 (4) 年間スケジュールの変更提案検討

大阪府住まい・まちづくり普及協議会全体会議

1月19日(金) 10:30~12:00

大阪建築会館会議室

報告・議題

1. 出前講座の実施
 - 1) 名刺について
 - 2) マニュアル作り
2. その他
 - ・ 次回の日程

100周年関連事業委員会

第4回史料研究会

1月17日(水) 18:00~19:15

日本建築協会会議室

出席者 山形委員長ほか5名

議 事 (1) 会誌での新連載

審査会

論考コンクール第2回審査委員会

1月6日(土) 14:00~16:15

日本建築協会会議室

出席者 審査委員 舟橋審査委員長ほか4名
協会関係 米井副会長ほか2名

- 議 事 (1) 第1次審査
 (2) 公開プレゼンテーション
 (3) 最終審査委員会
 (4) 第2回コンクール

編集委員会(平成29年度)

■副会長

米井 寛
本多 友常

■編集担当理事

◎勝山 太郎
佐藤 榮一
杉本 浩
竹中 統一
西 博康
松崎 公一
船越 淳久
吉村 英祐
香西喜八郎

■副委員長

○戸川 勝之

■特集小委員会

■計画分科会

★計画系

飯田 匡
鈴木 克彦
△田中 直人
松田奈緒子
三宅 次郎
守井 辰
吉村 英祐

★建築計画系

神戸 嘉也

△桑原 悠樹

下坂 浩和

中辻 浩介

東 拓郎

樋口 展寛

松岡 英緯

三谷 帯介

米山 剛史

渡部 剛

★インテリア・住宅系

赤川貴世友

今井 充彦

岩田 圭司

川合 隆之

河西 孝平

△黒柳 亮

塚口 洋之

ペリー史子

■構造分科会

△伊藤 栄治

岡田 健

岸本 光平

瀧野 敦夫

角田 耕一

穂原 学

前沢 皓生

宮久保秀樹

向井 洋一

■設備分科会

有尾清二郎
木谷 晃之

北野 勝也

佐々木章二

寺井 千佳

夏井 重行

△橋本 直樹

梶井 貴廣

宮崎ひろ志

森山 正和

山本 雅洋

■施工材料分科会

東 琢

桜井 和男

△高橋 秀一

藤丸 啓一

山口 紀宏

山崎 順二

吉田 正友

吉居 哲

■法令分科会

磯林 雅之

黒川 正樹

河野 学

△小林 智成

武田 知士

■作品作風小委員会

東井 嘉信

居内 章夫

池上 明

稲垣 和江

太田 栄治

▲加嶋 章博

菊池 浩輔

倉渕奈千子

澤田 純一

高木 秀晃

鞆野 淳司

西田 佳代

芳谷 晴彦

平野 尉仁

増田 敬彦

■広告企画小委員会

小川 雄介

金築 雄

小山 昭

野山 将男

藤田 昌宏

▲前田 衛

山辻 直樹

(順不同)

◎委員長

○副委員長

▲小委員会委員長

△幹事

印刷 2018年2月26日

発行 2018年3月1日

発行人 一般社団法人日本建築協会

大阪中央区大手前1-7-31

電話 06-6946-6981

印刷所 柳中島弘文堂印刷所

定価 1230円(税込)

©「建築と社会」誌の記事の無断転載を禁じます

**お客様の抱える問題やニーズに
より速やかに、より丁寧に対応できるように**

企画・デザイン、制作、製版、印刷

株式会社 中島弘文堂印刷所

本 社 〒537-0002 大阪市東成区深江南2丁目6番8号
TEL.06-6976-8761 / FAX.06-6976-8765

東京支社 〒101-0052 東京都千代田区神田小川町1丁目4-2 風雲堂別館ビル2階
TEL.03-3526-5580 / FAX.03-3526-5582

<http://www.n-kobundo.co.jp/>

地球環境を守り、100年建築に貢献する

NACL のアルミ表面処理

株式会社 日本電気化学工業所

<http://nacl.jp> E-mail: sc@nacl.co.jp

本部営業部 〒560-0036 大阪府豊中市蛍池西町2丁目7番26号 NACLビル2階

TEL (06)6843-1235(代) FAX (06)6853-1632

東京事務所 〒111-0051 東京都台東区蔵前2丁目6-7

TEL (03)3862-0978(代) FAX (03)3862-7098

年間広告のご案内

会誌「建築と社会」では、後付部分に
広告スペースを設けております。

1年を通じて、社名広告を掲載されませんか？

掲載期間：4月号～翌年3月号までの1年間

掲 載 料：48,000円（消費税込み）

サ イ ズ：1/12頁（タテ40mm×ヨコ90mm）

※毎月掲載誌をご送付します。

※原稿は1年間同じ原稿を使用します。

お問い合わせ先

一般社団法人 日本建築協会 内山・井筒

TEL : 06-6946-6981 FAX : 06-6946-6984 E-mail : koukoku@aj.or.jp

日本建築協会創立100周年記念誌 頒布のお知らせ

日本建築協会は、2017年3月30日に創立100周年を迎えました。その記念すべき年にあたり、100周年記念事業の一環として、3冊の記念誌を発刊いたしました。

それぞれの誌面では協会100年の歴史を振り返るのみならず、本会が社会の中で果たしてきた役割を見つめ直すとともに、かつて会誌に掲載された貴重な記録を再発見するほか、現在の建築に携わる人々の想いなど、様々な視点から「建築と社会」を取り上げております。

つきましてはこの度、記念誌を頒布することとなりましたので、ぜひお手元に備えていただきたく存じます。

<お申し込み方法>

ご注文の書籍名（もしくは3冊セット）、お名前、ふりがな、ご住所（〒から）、電話番号、メールアドレスをご記入の上、下記宛てにFAXまたはメールでお申し込みください。ご記入いただいたご住所に請求書をお送りしますので、お振込をお願いします。ご入金確認後に冊子を発送いたします。※価格はいずれも税込、送料別です。

お申込先 一般社団法人日本建築協会

FAX: 06-6946-6984 Mail: soumu@aaj.or.jp

◆3冊セットでご注文の場合は

特別価格 **¥5,000** にてご提供いたします。

■日本建築協会100年史1917-2017

¥2,000



<目次> (全96頁)

- 序 香西喜八郎
- 第1部 日本建築協会100年の概要
石田潤一郎/石川祐一/平井直樹/玉田浩之/三宅拓也
- 第2部 座談会
 - 1 座談会 回顧と展望—坂本勝比古先生を囲んで
坂本勝比古/佐野吉彦/山形政昭/設楽貞樹/和田康由
 - 2 座談会 大阪万博から阪神淡路大震災復興の時代
上田篤/鳴海邦碩/小林郁雄/天野直樹/大井昇二/設楽貞樹/橋爪紳也
 - 3 座談会 21世紀を拓く建築
本多友常/鈴木 毅/安原 幹/横山俊祐
 - 4 座談会 支部活動をめぐって
香西喜八郎/高松隆夫/篠原佳則/長瀬博一
- 第3部 年表(1917-2017)
- 第4部 協会活動の記録

■モダンエイジの建築『建築と社会』を再読する

¥3,000



2009年~2016年にわたって会誌『建築と社会』に掲載された連載「再読 関西近代建築」をまとめたものです。会誌に収められた貴重な建築記録や論考を取り上げ、解説しています。

<目次> (全352頁)

- はじめに 史料研究会一同
- 第1部 『建築と社会』の100年 山形政昭
- 第2部 建築作品編
 - 1 官庁・公共建築・学校(泉布観・大阪城天守閣ほか全13件)
 - 2 業務ビル(旧住友ビルディング・御堂ビルほか全22件)
 - 3 会館・劇場・博物館(綿業会館・自泉会館ほか全15件)
 - 4 ホテル・病院・駅舎・百貨店(宝塚ホテル・新大阪駅ほか全16件)
 - 5 住宅・住宅地(千里山住宅地・住宅改造博覧会ほか全6件)
- 第3部 論考・記事編(全10件)
- 第4部 掲載記事一覧

■関西の建築界/群像

¥2,000



2009年より70回にわたり『建築と社会』に掲載された、建築に携わる方々へのインタビュー記事をまとめたものです。(追録あり)

<目次> (全164頁)

- 関西の建築界/群像 本多友常
- 「群像」全70組
- 「大阪」フォトギャラリー 撮影:河合止揚
- 公開討論会 1987年と2017年の「関西」
倉方俊輔、本多友常、岡村吉展、奥 貴人、清原健史、河合止揚、駒井陽次、杉山美納、藤原芳寿、三谷勝章、三矢大祐、吉永規夫
- 委員プロフィール